

一・血筋

平成二十八年、ドイツ・ミュンヘン国立射撃場―。
クレール射撃・世界選手権の決勝戦は、大詰めを迎えていた。ファイナリスト・三上謙作の最後の射撃だった。

観客席にいたラファエラは、はつきりとそれを目撃した。その時、確かに謙作は銃に向かって何かを呟いていた。それは、まるで自分の銃と会話をしているように見えた。

同じその光景を、関係者席に座るコールマン風の口髭を蓄えたその男も見ていた。

「血筋だな…」

その男は顔色一つ変えずに、そうひと言だけ呟いた。

やがて、最後のクレールが空に向かって放たれると、謙作は引き金を絞った。鮮やかなオレンジ色のクレールが綺麗に粉碎され、空に広がった。

さながら、それは彼の優勝を祝福する花火のごとく美しく見えた。

二・逃避行

昭和六十二年、イタリア―。

ミラノは夕暮れ時を迎えようとしていた。

スピードを出した警察のワゴン車が、マルペンサ国際空港の裏ロゲートをくぐり、滑走路に待機する航空機の尾翼付近に乗り付けた。航空機にはタラップが接続されたままの状態になっていたが、そこまでは行かず目立たないようにその手前で停まる。航空機の乗客達に無用の関心を抱かせない為だ。

ワゴンの助手席から一人のイタリア人が降りる。続けて車のスライド・ドアが開いて、もう一人の男が降りる。コールマン風の口髭を蓄えた背の高い男だ。その男が中にいる小さな子供を抱きかかえ、更にもう一人の女の子の手を引いて車から降りしてやる。

「その子達の出国記録の方は、うまく処理しておいた。安心してくれ。KGBの奴らには絶対に悟られないやり方だ」

先に降りたイタリア人の方が、口髭の男に説明した。

「うん。世話をかけたな」

「何を言っているんだ。すべて僕のせいだ。本当にすまないと思っている」

「済んだことだ。もう、それ以上言うな」

「本当にこれでもいいのか、慎一郎。イタリアに留まっていれば、警察の総力を挙げて守ってやれるが？」

「いや、やはりそれはまずい。欧州圏のここではロシア系やドイツ系の人間は目立たないし、しかも、ここは東側と陸続きで近い。奴らは目立たずに自由に動き回れる。現に、マ

リエッタの時もそうだった。その点、西洋人が少ない日本なら万が一、居場所が知られたとしても奴らは目立って動きがとりにくい。特に、都会でない地方ではな」

「そうだな。やはり、おまえの言う通りかもしれないな」

「それに、日本の茨城県はいつの王国だ。外国人が不穏な動きを見せれば、すぐにあいつの耳に届く」

二人の視線は、タラップの脇で待つ三人の日本人のうちの一人の大男に注がれた。

「工藤か……。確かに、彼は日本のマフィアだからな」

「はは……。それを言うなら、彼の実家が、と言ってやれ。それについては、本人もかなり気にしているんだ」

親友の話になり、慎一郎と呼ばれた口髭の男は少しだけ笑顔を見せた。

その工藤という男には、熊のような厳つい風体とは反対に人をふと安心させる、そういう不思議な魅力があった。

「はは……。そうだったな。では、計画通りだ」

二人は小さく笑いながら、足早にタラップの方に向かう。

「みんな、待たせたな。わざわざこんな遠方まですまない」

二人の子供を連れて近衛慎一郎が、待っていた三人に小さく頭を下げた。

「わはは……。何を言っているんだ。水臭いぞ、慎ちゃん。それに、俺は旅行会社をやっているからな。ヨーロッパの往復なんぞは日常茶飯事さ。特に、今度冬季オリンピックがあるユーゴのサラエボは、ここからは目と鼻の先だ。もう、この辺にはすっかり慣れっこさ。なっ、三上？」

「ああ、工藤の言う通りだ。お安い御用さ。気にするな、近衛！」

隣りの三上恵造の方も、笑って答えた。

「ケン君ですね？」

三上夫人が、慎一郎が抱えた小さな方の子供を見て嬉しそうに尋ねた。

「はい。今日から、あなたの子です。よろしくお願いします」

そう言って、寝入っているその子を夫人に手渡した。

「まあ、可愛い寝顔なこと！」

大事そうに受け取ると、三上夫人は満面の笑みを浮かべて夫と顔を見合わせた。

「工藤。三上、奥さん。久しぶりに会えたのが、こんな形で……。とにかく、この子達をよろしく頼む」

イタリア人の男のその言葉を、慎一郎が三人に通訳してやる。

「いいってことよ、ジオ。俺は、北茨城の菊枝叔母さんのところにその子を届けるだけだし、当の叔母さんはアリッサちゃんの世話ができることになって、とても喜んでいるよ。それに、子供のいない三上のところなんかは、ほれ、見ろ。この通り大喜びさ」

子供の寝顔を夢中になって覗きこんでいる三上夫妻の様子を笑顔で見ながら、工藤辰夫が大きな手でOKマークを作って返した。

「ありがとう、工藤。そう言ってもらえると、少しは救われる」

ジオと呼ばれたイタリア人の男が、三人に向かって日本式に深々と頭を下げた。

慎一郎が、手を引いていた女の子の目の前にしゃがみ込んだ。

「アリッサ。お父さんは、しばらくこちらに残るが、日本の菊枝叔母さんのところでもいい

子にして待っているんだぞ」

そう言って、娘のおでこにキスをしてやった。

「うん、わかった。でも、パパ。なるべく早く迎えに来てね」

「ああ、約束する」

言いながら、慎一郎はアリッサを強く抱きしめた。

正直なところ、その約束はいつ果たせるかわからなかった。

「そろそろ、行かないと」

ジオが、一同に声をかけた。

「さあ、アリッサちゃん。辰夫おじさんが抱っこしてあげよう！」

アリッサは嬉しそうに工藤に抱えられた。

眠っているケンは三上夫人に抱かれ、夫の恵造と共にタラップを登り始めた。

「じゃあな、慎ちゃん」

工藤もそれに続く。

「あとは頼んだぞ、辰夫」

「おう、まかせておけ！」

再び工藤が、OKマークを作って返した。

その間、アリッサは工藤の大きな背中越しにずっと父親に向かって手を振っていた。

やがて、扉が閉められ、タラップが外された。

定刻を少し遅れた機は、すぐに離陸の準備に入った。やがてそれは、うす暗くなったミラノの空に飛び立っていった。

「これで、まずはひと安心だ」

消えゆく飛行機を見上げながら、ジオが胸をなでおろした。

「ああ、いろいろとありがとう」

「そんな風に礼を言われると、かえって辛くなる。…ところで、これから君の方はどうする？」

「ブレシアに戻って、いつもと変わりなく生活するだけさ」

慎一郎は、何事もなかったようにあっさりと言った。

「危ないかもしれないぞ」

「心配するな。それに、しばらくはマリエッタのそばに居てやりたいんだ」

「そうか、そうだな…。よし、だったら警護を付けよう」

「おいおい、そんなものは必要ない」

「そうはいかないさ。僕の気のすむようにやらせてくれ。何しろ、奴らは何をしでかすかわからないからな」

「仕方がないな。好きなようにしろ」

「じゃあ、そうさせてもらう。まあ、とにかくここを出よう。グラッパを呷りたい気分だ。付き合ってもらうぞ、慎一郎」

「うん。悪くない」

二人は車に戻ると、空港を後にした。

三、解放

五年後―。

ミラノから東へ七十キロ程のところにブレシアがある。その郊外のアルプス山系が見渡せる丘の上に、その墓地はあった。

「メリー・クリスマス。マリエッタ：」

近衛慎一郎が、マリエッタ・リッチーニ・コノエと記された白い墓標に語りかけた。

慎一郎は妻の墓標の前に花束とワインを捧げ、六回目の二人だけのクリスマス時間の経過していた。モンテス・パッシート・ロッソという地元産の赤ワインは、彼女が大好きな銘柄だった。

慎一郎は、二人が愛を育んだ日々を思いを馳せた。広がるアルプスの山々、静かな森の中の湖畔…。周囲に見渡せるすべてが美しい思い出だった。それから彼は、日本に避難させた二人の子供達の近況を墓前の彼女に報告した。二人は日本に居て安全であり、何不自由なく明るく育っている。

そこから五十メートルほど離れた墓地内の道沿いに停めてあるセダンの中で、一人の男が待機していた。黒いサングラスをかけたがっしりとした体格の男だ。そこへ、無線連絡が入った。それを聞くや否や、サングラスの男は慎一郎の元へ小走りに向かった。

「スイニョーレ・近衛。緊急事態です！」

そして、彼は慎一郎にその連絡の内容を伝える。

二人は、すぐさま車に戻り墓地を後にした。

ブレシアの中心部の北側にある「バロン」という名の銃のプロショップの前でその車は停まった。店の入口の鍵を開けた慎一郎は、他のものには目もくれず、店内の一角に置かれたテレビのスイッチを入れる。

ゴルバチョフが大統領辞任の原稿を読む姿が映し出された。二人は、その画面に見入った。合間に、この半年間にソ連で起こった象徴的な映像が織り込まれる。その中には、KGBの創設者であるジェルジンスキーの銅像がモスクワ市民によって引き倒されるシーンもあった。

ニュースの内容が一巡すると二人は握手を交わした。

慎一郎が棚からウイスキーを取り出し、グラスをふたつ用意する。警察官であるサングラスをかけた男も、今回だけはそれを固辞しなかった。

「長い間、ありがとう。これで、君の警護の任務は終了だ」

慎一郎が、労をねぎらった。

「どういたしました。この五年間、あなたにもお子さん達にも、何も起こらなくてよかったですね」

警察官の男がサングラスを外して笑顔で言った。

「ああ、本当に…」

二人はグラスを合わせて乾杯した。

「これであなたも、表舞台に立つことができますね」

「そうだな。そうかもしれない…」

そう言うと、慎一郎は旨そうにグラスを呷り、再びテレビのニュース映像に目をやった。

その様子を見た警察官は、つくづく安堵した。そして、思った。初対面の時から感じていたのだが、どう見ても慎一郎は日本人には見えない。外見上に東洋系の特徴はまるでなかった。自分と同じイタリア系に見える。だが、かと言ってイタリア人らしくもない。自分を積極的に表に出す気質は彼にはないのだ。その正反対である。彼は、どちらかと言えば寡黙である。必要以上に自分を出さない。そう言った点では、日本人のそれなのかもしれない。

そして、警察官は自分の上司のジオヴァネッティが事あるごとに言っていたのを思い出していた。近衛慎一郎は、実は世界最高峰の射撃の腕前を持つ男だと。不世出の世界の射撃界の宝であると。だから、何年かけても守る価値のある人物なのだ。

四・風雲急

昭和十六年、春―。

その鉄砲工場は、滋賀県の坂田郡国友村にあった。

この日も、工員の田代幸吉は一生懸命にその金属部品を研磨していた。

軍用銃の機関部に当たる部品だ。このところ、にわかになんか忙しくなっていた。軍部からの注文が急激に増えてきていたのだ。中国での戦闘が拡大化するのかもしれないと、内心幸吉は感じていた。世間にとっては、満州や東南アジアでの出来事は新聞やラヂオを通しての対岸の火事にすぎない。だが、武器を提供する自分達にとっては、よりそれを肌で感じる立場にいるのだ。

「おーい、田代」

社長の奥村の声だった。

声の方を見た幸吉は、思わず身構えた。奥村と一緒にいる二人の男の出で立ちに対してだ。一人は軍服姿だった。しかも陸軍ではなく海軍のだ。もう一人は、黒いソフト帽に仕立ての良さそうな黒いコートを羽織った大柄な体格の男だった。

「田代幸吉さんですね？」

黒いコートの男が、帽子をとって挨拶した。

五十歳半ばくらいの品のよさそうな顔つきだった。

「は、はい。そうです…」

「私は、外務省の児玉洋之助と申します」

物腰も柔らかかった。

「わ、私に何か？」

「はい。急なことで、誠に申し訳ありませんが…。私と一緒に、しばらく旅をしていただくこととなります。その説明にまいりました」

「えっ、何故ですか？」

あまりにも急な話に、幸吉は動転した。

そうなるなという方がおかしかった。

「それは、あなたの鉄砲職人としての腕を見込んでのお願いです。奥村社長も含めて、この地方のどなたに伺っても、若手の中で銃を造る技術は、あなたが一番であるというお話

しですので、それをお国の為に役立てていただきたいのです」

「そ、そんなことはありません。この国友には、私なんかよりもずっと腕の立つ職工さんが大勢いらっしやいます。ねっ、社長？」

幸吉が奥村に同意を求めると。

「確かに、おまえと同じように腕の立つ者は何人かいるが、彼らはみな年寄りだ。お役人さんがおっしゃる通り、若い衆の中では、おまえが一番だ」

奥村は事実を語るしかなかった。

「はい。私も他のご同業の方から同じように伺っております」

児玉が、にこやかに言った。

「何故、若手でなければならぬのですか？」

「それは、後ほど説明させていただきます」

「で、この私に一体何をしろと？」

「それについても、後ほど車中でゆっくりとご説明しましょう…。取り急ぎ、旅の支度にかかってください」

「えっ、今すぐにですか？」

「はい。急かして申し訳ありませんが、今すぐにです」

それについては、児玉はきっぱりと言った。

幸吉は、工場の裏手にある自分の住居に戻ると、急ぎ支度をして、工場の前に停めてあった黒塗りの車に乗り込んだ。助手席には、さっきの軍人が座っていた。運転席にいるのも軍人だった。

車が走り出した。

幸吉は、旅行の荷の入ったカバンを抱きしめて体を硬直させていた。不安と緊張とで、どうにかなりそうだった。

「ははは…。まあ、緊張するなという方が無理な注文なのでしょうが、どうか落ち着いてください。別に、あなたを誘拐してどうしようというわけではありませんから。これは、れっきとしたお国の為の任務なのです。本件については、奥村社長も十分に理解をされて、あなたの出向に同意を下さいました」

隣りに座る児玉が、にこやかに説明した。

「何の為の出向ですか？ 任務とは何のことですか？ …それに、この車は、何処へ向かっているのですか？」

幸吉の質問が、止まらなくなった。

「ははは…。とにかく、落ち着いてください。順を追って説明しましょう。まず、この車の行き先ですが…。神戸です」

「こ、神戸…。何故ですか？」

「まだ、それは最終目的地ではありません。そこから、船に乗っていただきます」

「船…。で、どこまで…？」

「イタリアのジェノヴァです」

児玉から出た地名は、あまりにも幸吉の想像を超えたものだった。

「ええっ、イタリア？」

幸吉の驚きの声が、車内に響き渡った。

「一体、イタリアに何なのですか？」
絞り出すように、幸吉が訊ねた。

頭の中が、ぐるぐると回っていた。

「驚かれるのも無理はありません！」

予想通りのその驚きの反応に、児玉は同調するようにゆっくりと頷きながら、少し間をおいた。

「田代さんは、日独伊三国同盟のことは御存じでしょうか？」

「は、はい……。まあ、名前くらいなら……」

その名称は、最近新聞の記事やラヂオのニュースでも頻繁に流れていた。

他の列強国に比べて有益な植民地のほとんどない三国は、共通の利害を持っていた。また、対ソ連、対アメリカ、対国際連盟という個別の共通した利害も手伝って、協調関係を強化してきていた。そして、ついに正式な同盟関係になったのであった。

「その同盟の一環として、三国が互いの持つ様々な技術や情報を提供し合うことになったのです。無論、礼義として学ぶ方の国が相手の国に行かなくてはなりません」

「は、はい。そうなると、私の場合は……」

「ええ。お察しの通り、銃の製造や開発の技術の習得です」

「なるほど。それで、イタリアに……」

それで始めて、幸吉は納得がいった。

確かに、イタリアの銃の製造技術は世界の中でも最高峰と言われていたからだ。

「ははは……。どうやら、納得していただけたようですね？」

児玉も、幸吉の落ち着いた様子を見て安心したようだった。

半日後、無事船に乗り込んだ幸吉は、同じ理由で日本中から若者が集められ、乗船していたことを知った。

業種は様々だった。ある者は、通信技術を、ある者は航空技術の習得を担っていた。

一か月を超える船旅は苛酷であった。体調を崩す者も大勢いた。児玉洋之助が、熟練した年配者を採用せずに年齢の若い者を選んだ理由がそれであった。その行程は、体力の劣る年配者にはあまりにも過酷であったろう。児玉は、以前ベルリンオリンピックの日本選手団に随行した際に、それを間近で見知っていたのだった。

ジェノヴァの港に何とか到着した幸吉ら一行は、そこでドイツ組とイタリア組の二つに分かれることになった。そのほとんどはドイツ組で、幸吉の入るイタリア組は少数であった。

幸吉は、現地のイタリア大使館の職員に連れられて、イタリア北部に位置するブレシアという町へ渡った。多くの歴史ある銃工房がひしめくそこは、イタリアの銃造りの聖地と言われていた。

時代は、風雲急を告げていた。

五・王座奪回

昭和二十九年――

イタリア・北東部、クレモナ市。

その市街近郊にヴィザッティ商会はあった。

創業から二百年近い老舗であるその材木商店には、二つの大戦の戦火を逃れた二棟の大きな倉庫があった。

一つは、地元クレモナで盛んなバイオリンの製作用の材木倉庫である。そして、もう一つが、銃の製作用の材木倉庫である。これも、隣町のブレシアで盛んな銃造りの需要がある。銃の場合、それらの木材は銃床の部分に使われるのだ。

その中に、ガリアーノ・ロッシーニとシーザー・カブリーニの姿があった。

時間をかけて倉庫内を見て回った二人は、ある木材の前で立ち止まっていた。

「やっばり、これしかないな」

シーザーが確信を持ったように言った。

「クルミか…」

ロッシーニが木材につけてある名札を読んで言った。

「うん。それも、ただのクルミじゃない。フランス・クルミだよ。アメリカ産のもあるが、やはり、フランス産の方が遥かにいいんだよ」

「なるほど、値段も全然違うな」

名札の値段を見比べて、ロッシーニが頷いた。

「見た目はさほど変わらないようだが、性能的には、どの辺に差があるんだ？」

「クルミは、他のカエデ、サクラ、ブナなどに比べて軽くて、その割には堅い」

「軽い割には堅いのか？」

「うん。そうだよ。だから、扱いやすくて、衝撃に強いんだ。その点は両者ともほとんど変わらない。決定的に違うのは、粘りと変形率なんだよ」

「粘りと変形率？」

「うん。クルミの持つ大きな長所は、粘りがあるということなんだ。それが、銃を撃った時の反動を吸収してくれるんだ。フランス産のものは、その点が優れている」

「なるほど…。で、もう一つの変形率ってのは、どういう長所なんだ？」

「温度や湿度によって起こる歪みや変形が少ないということだよ」

「それは、射撃にそんなに大きな影響を与えることになるのか？」

「勿論、おおありだよ。とても大事なことなんだ。もし、木の部分が歪んで変形してしまふと、それは銃全体に影響するからね。だんだん狂いが生じてくる。つまり、最終的には銃の命中精度に関わってくるというわけなんだよ。その点、よく寝かせたフランスのクルミにはそれがほとんどない。特に、君のような最上級者クラスの射撃手になると、その僅かな差が、命取りになってくるはずだ」

銃の名職人であるシーザーの説明には、強い説得力があった。

「なるほど、そうなのか。であれば、シーザー。今回造る銃は、絶対にこのフランス産のクルミを使ってくれ！」

ロッシーニが、哀願するように言った。

「勿論、そのつもりだ。とにかく、今回開発する銃は、あらゆる部分に最高の素材を使って完璧なものに仕上げるつもりだよ。このところ、ウインチェスターやレミントン、ブローニングといったアメリカ製の銃が、やたらと幅を利かせて来ているからな。イタリアの

銃が、やはり最高峰なんだということを、再び世界に証明してやるんだ」

シーザーが、力強く宣言した。

第二次大戦が終結し、1952年に再開したヘルシンキでの夏季オリンピックにおいても、クレイ射撃の強国であるイタリア勢はメダルの獲得を逃していた。その大きな要因の一つは、アメリカ製の銃の台頭だった。

もともとヨーロッパにおいては、狩猟用として普及していた散弾式銃であったが、アメリカにおいては、対人兵器としての独自の発展があった。それは、独立戦争や南北戦争の時代に遡る。そして、その後の二つの世界大戦において、その性能は更に進歩することとなったのである。腕のいいイタリアの銃職人達が、散弾式銃の外側の装飾、つまり彫刻の芸術性の方に心血を注いでいる間に、アメリカは、銃そのものの性能の向上の方に力を注いでいたのである。

優秀な銃職人のシーザーは、ファーマス社という小さな銃工房を立ち上げ、イタリアの銃の復権に燃えていた。片や、ガリアーノ・ロッシーニは、その選手として志を同じにしていた。

以前は、ビリヤードの選手だったロッシーニは、その才能を買われてクレイ射撃競技に転向していた。ビリヤード競技に必要な精神力や集中力、更に、的を捕える間合いと角度の考え方は、基本的にはクレイ射撃においても同じ素養であった。そして、どんどん腕を上げていった彼は、今では実力は世界一と内外から認められるところまでできていた。彼は、来たるメルボルン・オリンピックでのメダルを確実にする為にも、最新性能の銃の登場を必要としていたのだ。

日本で生まれた初孫の為にも、彼は何としても勝ちたかった。

四ヶ月後―。

ロッシーニは、ブレシアにあるシーザーの工房・ファーマス社を訪れた。そこで、一挺の最新型の銃と対面した。

天才銃職人・シーザー・カブリーニの会心の作品だった。

「どうだ、ガリアーノ。美しい銃だろう」

「ああ。確かに、他の銃とはかなり雰囲気が違うな。何か、柔らかい感じと言おうか…。とにかく、美しい…。まるで、工芸品を見ているようだ」

手渡されたその銃は、従前の散弾式銃に比べて随所に曲線が使われていた。それが、銃床に使われるニスで輝くクルミ材の木目の美しさと見事に調和していた。

「うん。そうなんだ。銃造りとは、木と金属が織りなす、総合芸術のことなのだよ」

シーザーが誇らしげにそう言って、胸を張った。

まさに、アメリカ人の造る機能性重視のものとは一線を画する、これぞイタリアの誇るクラフトマン・ワークなのだと言わんばかりであった。

「その点については、認めるよ、シーザー。銃の制作者としての君を心から尊敬している。君は、まちがいなくイタリアを代表する銃職人だと思う。そんな君と組んで、僕は幸運だと思っっている。今回の銃の製作にも、本当に感謝しているよ」

親友に改めて敬意を表し、労をねぎらってから、ロッシーニは核心に入った。

「だが、僕は競技者だ。マホガニーのガラスケースに飾る工芸品を求めているのではないぞ。肝心の中身の性能の方は向上しているんだろうな？」

「当然だ。格段に進歩しているよ。この銃は、確実にアメリカやカナダ、スウェーデンのチームの選手達が使うものよりも優れている」

シーザーが、自信に満ちた顔できっぱりと言いつ切る。そして、
「これでもし負けたとしたら、それはおまえの腕の問題だぞ。ははは…」
と、余裕で笑った。

「ははは…。そこまで言うのなら安心だ。だが、そんな風に言われてしまうと、嬉しいんだか、辛いんだか」

ロツシーニは、困ったように笑って返した。

「まあ、それほど、この銃に自信があるってことさ」

「であれば、シーザー。この銃なら、メダルは狙えるんだな？」

「勿論だ。狙えるどころか、おまえが普段の実力さえ出してくれば、確実に一番輝いているメダルが獲れるはずだ」

「そうか。だったら、そっちの方は、まかせておけ」

「うん、頼むぞ。ガリアーノ」

二人は、固い握手を交わした。

そして、二年後のメルボルン・オリンピック会場―。

はたして、表彰台には二本のイタリア国旗がはためいていた。

銅メダルは、アレサンドロ・シセリ。そして、金メダルは、ガリアーノ・ロツシーニだった。

六．天賦の才

平成二十三年、二月―。

千葉県、富津市―。

東京湾横断道路を木更津側に渡り、そこから海沿いを南に三十分程走った所にその射撃場があった。

三上謙作は、親友の浅尾和孝と共に射撃台に並んでプレーしていた。

二人ともここで撃つのは初めてだった。

今までの二人は、福島県東白川郡の山の中にある射撃場を使っていた。他の射撃場に比べて競技射撃をする利用者が少ないので、秘密練習にはもってこいの場所だったからだ。だが、今回だけは前々から二人の話題になっていたこの射撃場を選んだ。

今回の射撃練習は特別だった。和孝が近々開催される試合で引退をするからだ。

和孝は、競技者として最後になる試合へ向けての最終調整に入っていた。日本選手権を七年連続で制覇している最中のまだ三十歳前の若い彼が、余力を十分すぎるほど残しながら引退をしなければならぬには理由があった。国会議員をしている父の義和が、政府の要職に就いた為だ。そのおかげで、予定より早く福岡の実家で営む会社の経営を本格的に継がなければならないのだ。

この八年間、和孝は大きな大会に臨む時には必ず謙作に練習のパートナーになってもらっていた。同い年の二人は、父親同士が若い頃からの親友だということもあって、子供の

頃から仲が良かった。だが、和孝が謙作を練習のパートナーに選んでいるのは、ただ単に仲が良いという理由からだけではなかった。謙作の射撃の力量が並外れて優れているからだった。彼のおかげで、和孝は常に最高レベルの競い合いの中で練習をすることができていた。ある意味、それは競技会の決勝戦と同じレベルと言ってもよかった。それどころか、それよりも上と言っても、決して言い過ぎではなかった。

だが、それ程の力量を持ちながら謙作の方はクレール射撃の選手ではなかった。彼は、サーファアの道を選んでいたので。サーフィンの方でも、謙作は非凡な才覚を持っていた。学生時代から着々と腕を上げ、今では常にプロのトーナメントで優勝を狙えるところまでできていた。

謙作はクレール射撃に才能があることも、時々それをやっていることも父の恵造には秘密にしていた。三上恵造は三上銃器製造会社、通称MJ社のオーナーである。江戸後期から代々続いている日本には数少ない銃の製造会社である。恵造は、謙作にも自分のように会社を継いで欲しいと願っていた。だが、まったくその気のない息子の謙作は、父に無用な期待感を持たせない為にずっと隠してきているのだった。決して射撃が嫌いなわけではない。むしろ、大好きであった。ひよっとしたら、サーフィンよりも好きかなのも知れなかった。だが、謙作はその気持ちをずっと封印してきていた。

射撃を終えた二人は、自販機で各々の飲み物を買うと、クラブハウスには入らずにその裏の丘の上に腰掛けて休憩に入った。

そこから、海が一望できるだからだ。

「最高の気分だなー」

「うん。来てよかったよ。現役のうちにここに来て撃ちたいと思っていた」

二人は、海の景色を満喫していた。

普段の射撃練習では決して味わえない雰囲気だった。

通常、日本の多くの射撃場は山の中に造られ、削った山の斜面にバックストップに向かって撃つことになる。つまり、目の前には常に巨大な山の壁が存在するのだ。だが、ここはそれだけではなかった。正面に小さなバックストップはあるものの、側面は海に向かって開けていた。この上ない開放感と爽快感を味わうことができるのだ。

以前から二人はこの射撃場に来てみたいと話していた。

それぞれに飲み物を手にしながら、二人はその爽快感に浸っていた。目の前には、内房の海が広がっている。

「いい記念になったよな」

コーラを飲みながら、晴れ晴れとした気分です謙作が言った。

「うん。アクアライン（東京湾横断道路）ができたおかげで、東京からすぐだったしね。数年前には考えられなかったことだよ」

「まったく。前にこの話した時には、随分遠くに感じられていたもんな」

「そういえば、謙作は前から「決まった女性」ができたらずここへ連れて来るといっていたけど、覚えてる？」

和孝は以前、恋人ができたらずここへ連れて来てあげたいと謙作が言ったのを覚えていた。結局、先に結婚したのは奥手と揶揄されていた和孝の方であった。

「ああ、勿論、覚えてるよ」

「で、それは実現したの？」

「ははは…。残念ながら、それはまだだ」

「本当に？ あれから随分たっているけど」

「本当だよ。結局ここに来てまでも、相変わらず下手くそなおまえの練習に付き合う破目になってるよ。ははは…」

「ははは…。こいつ、言ったな」

和孝はチェリオを飲みながら半分困ったように笑った。

今や、日本選手権を七年連続で制覇している自分に対して、下手くそという悪態をつける実力を、実際に謙作は持っているからだ。

「だけど、それは認めるよ。結婚は僕の方が先になったけど、銃の方はついに君にかなわなかったよ…」

和孝は半ば冗談、半ばふてくされ気味に返した。

「ははは…。今日は、あっさりと認めるんだな」

結婚の事はともかく、銃の方のそれは本心でもあった。

和孝はいつも謙作の恵まれた資質を羨ましく思っていた。二人が射撃をした時の結果は、ほとんどいつも互角であった。だが、言いかえれば、それは和孝の方が劣っているという証明でもあった。猛練習を積んでいる和孝に対して、謙作の方はほとんどやっていないからだ。つまり、和孝が真の意味で彼に勝利するということは、過去八年間一度もなかったのだ。

謙作には生まれつきの資質が備わっていた。いわゆる天賦の才である。平凡な人間がそれに打ち勝つには、練習と研究を重ねて行くしかなかった。そして、いつしか彼に勝利することが和孝の目標になっていた。実際それは、日本選手権のタイトルを取ることでよりも困難だった。だが、結果的に和孝にとってそれが射撃の道に精進することへの原動力になっていた。

同じクレー射撃の競技者であった和孝の父もそうだった。かつて父にも、越えられない大きな存在がいた。相手はやはり、天賦の才に恵まれたプレーヤーだった。しかも、それは同じように父の古くからの友人であった。その男の名は、近衛慎一郎Ⅱ通称・男爵である。だが、その男爵がいたおかげで父はあらゆる研鑽を重ね、やがては日本の頂点に立つことができた。世界に認められる所にまで、登りつめることができたのだった。

「ははは…。どうした、和孝。真剣な顔をして…？」

そんな和孝の気持ちを知る由もなく、謙作は憎らしいほどさっぱりとしていた。

「謙作は、本当に銃の世界に入るつもりはないのか？ この世界には定年もないし、他のスポーツのように年齢がいつてしまえば体力的に引退ということもない。三十歳前のおまえが、今から始めても何のハンデもないんだから…」

「なんだ、俺のオヤジじゃあるまいに、おまえまでそんなことを言い出して…。今のところ、それはまったく考えていないよ」

「だって、どう考えても、もったいないよ。そこまでの腕を持ちながら、本格的にやらないなんて。おそらく、謙作なら世界の頂点だって夢ではないよ」

「そうだな。そうかもしれない…。まあ、この海の水が全部消えてしまえば、サーフィンを足で洗うしかないだろうけどな」

「そのくらい、可能性が低いってことか？」

「まあ、そういうことだ。ははは……」

そう言っただけで笑いながら、謙作は再び目の前の海原に目をやった。

一瞬、彼の顔から笑顔が消えた。

彼は自問していた。本当にそれでいいのか、と。

この時、海はまだ穏やかだった。

七・大震災

イギリス、ロンドンー。

夏季オリンピック開催を翌年に控えたロンドンの郊外にある名門射撃場オークリー・コートクラブハウスは、ざわめきと嬌声に包まれていた。

中央のソファにはその絶対王者が鎮座し、それを囲むように幾重もの人の輪ができていた。報道や雑誌の記者だけではない。一般のファンもいる。試合を終えたばかりの同じクレー射撃の選手さえもいる。皆が、彼と言葉を交わそうと集まって来る。

誰もが彼を愛し、尊敬していた。国籍も様々だ。ファンは、彼のトレードマークであるコールマン風の口髭を模したブランドの銃にサインをせがむ。選手達は自分の射撃のアドバイスを受ける。

このロンドンだけではない。世界中のどこの会場においても見られる光景だった。それは、今のクレー射撃界の縮図でもあった。すべてが、彼を中心に回っていると言っても過言ではなかった。

彼の名は、近衛慎一郎。名前は日本式だが、イタリア人だとも言われている。

彼は、前人未到の世界選手権八連覇を遂げた唯一無二の絶対的王者だ。人々は、彼のことを最大の賞賛と尊敬の意を込めて「バロン＝男爵」と呼ぶ。

今日の試合も男爵は万全だった。だが、人々の関心はもはやその試合の勝ち負けにはなかった。あとどれくらい、彼の雄姿が見られるのかにあった。十七年間無敗の絶対的王者だ。文字通り、不世出の偉大なプレイヤーだ。今後、これ程の人物は後にも先にも出現することはないだろう。その男爵が、近々引退するらしいという噂話が実しやかに広がっていたのだ。きっかけは、アメリカのある雑誌のインタビューでの彼のひと言だった。次のドイツで行われる世界選手権に出場するかどうかはわからないと語ったのだ。そろそろ自分分は、クレー射撃を「支援する側」に力を入れていくつもりだと。

彼がそう決断した直接の理由は語られていない。ただ、力が衰えたからではないことは間違いない。現に、今日の試合でもそうだった。依然として、非の打ちどころのない完璧な射撃だった。むしろ、その神業はますます円熟味を増していた。揺るぎないものだった。それだけに、引退については様々な憶測を呼んでいた。何年待ってもライバルらしいライバルが出てこないの、モチベーションの維持が難しくなったという説もある。あるいは、近々孫ができるから世界中を転々とする生活から足を洗って、母国に落ち着きたいのだという説もあった。

今日も、彼は誰かれの区別なく訪れる者へ気さくに接していた。嫌な顔ひとつせず、優

しい笑顔で応対する。男爵と言葉を交わしたい者の列は後を絶たないが、それを傍らに寄りそう女性秘書が手際よく捌いていた。淡いブロンド髪の若い女性は、通訳も兼ねた男爵の個人秘書だった。

そこへ、競技の関係者の一人が早足に歩み寄り、その女性秘書に声をかけた。

伝言を聞き終わると、彼女は談笑中の相手に詫びを入れて男爵に耳打ちをした。話を聞くうちに彼の顔色は変わり、すぐさま席を立った。その関係者に案内されて、大型テレビのある倶楽部の一室に入る。すでに、協会の関係者達などが食い入るようにその画面に見入っていた。

「だ、男爵。あなたの祖国が大変なことに…」

彼に気付いた関係者が、うろたえたように言った。

男爵は目を疑った。

津波が、街全体を飲み込んでいた。

家屋や車が、まるで浮草のように流されていた。街全体が火の海になっている場面もある。

「これは、事実なのか。本物の映像なのか。パニック映画ではないのか？」

悲痛な男爵の問いかけに、関係者達は辛そうに首を横に振った。

テレビ画面には、彼の故郷で起こった東日本大震災の様子が、刻々と映し出されていた。

八・決断の時

三上謙作は、大洗の海岸に立ちつくしていた。

彼の長い髪が、なびいていた。

三月の潮風はまだ冷たかった。だが、あたりの景色がそのことを忘れさせていた。

もはや、そこは海岸の体をなしていなかった。自分の知っている景色とはまるで変わってしまった。

皮肉なことだった。自分が愛した波が、東北は元よりこの茨城の海岸線までも完膚なきまでに破壊してしまったのだ。テレビやインターネットから見る映像では、とても事実として受け入れられなかった。居ても立つてもいられなくなりなり、千葉県の一宮町からここまでやって来たのだ。

震災からまだ三日目の今は、海岸線の道路は勿論のこと、高速道路や国道も使えない。方々を閉鎖された道を必死にくぐりぬけて、なんとかここまでたどりついた。そして、およそ現実とは思えないその惨状を自身の目で見た今、やっと事実として認識することができた。認識できたというより、その悲惨な光景を、事実として受け入れなければならぬと自分に言い聞かせたといった方が正しかった。

そして謙作は、サーフボードを置く時が来たのだと悟った。

それを自分が決断しなくとも、目の前の現実がそうさせていた。物理的にも、精神的にもだ。自分が育った大洗の浜の変わり果てた姿を見せつけられ、彼はそう思わざるを得なかった。

「謙ちゃんん！」

一人の若者が、手を振りながら堤防の向こうから走ってくる。

田代雄太だ。

雄太は、まるで小さな子供が親にするように、走る勢いそのまま謙作に抱きついてきた。

「謙ちゃん！」

なかなか離れようとしなない。

きつと、想像もできないくらいに怖い思いをし、不安な時間を送ってきたのだろう。

「わかった、わかった…。わかったから、雄太…。とにかく、話を聞かせてくれ」

謙作は雄太を引き離すと、一緒にその場に座った。

「おまえが、メールでくれた情報を見ていて、居てもたつてもいられなくなって、来てしまったよ」

二人は、パソコンのメールで情報交換をしていた。

「でも、よくここまで来れたね。道路、大変だっただろう？」

「ああ。どこもかしこも通れないんで、苦労したよ」

「うん。謙ちゃんの途中のメールを見ていて、苛立っているのがよくわかってたよ」

「それと、ガソリンが大変なことになるそうだ。営業しているスタンドは、どこも長蛇の列だよ」

「謙ちゃんの車は大丈夫なの？」

「実家の方まで行けば補給ができるから、当面は大丈夫だと思う」

謙作の実家は、ここからそう遠くないところにあった。

「俺よりも雄太の方が、大変だっただろう？」

「うん。正直、大変だった。とにかく、あの時は、津波警報のサイレンの大きな音がずっと鳴りつ放しさ…。本当に怖かったよ」

雄太の実家は、大洗の隣のひたちなか市にあった。その時の様子は、ネットの配信映像を見て謙作も良く知っていた。町中にけたたましく流れ続けるあのサイレンの音は、嫌がおうにもその場の緊張感を伝えてきていた。だが、実際にその場にいた雄太の受けた衝撃はその比ではなかったろう。

「そうか、大変だったな。…それにしても、酷いもんだな」

雄太の話聞いて、謙作は改めて海岸に目をやった。

「うん、酷い…。そっちの、千葉の外房の方はどうなの？」

「かなりやられた。でも、相対的にこっちはほどは酷くないと思う。まだ、全容はわからないけどね」

この大洗海岸に近い茨城県内で生まれ育った謙作だったが、大学を卒業してプロのサーファーになったのを機に、千葉県の一宮町に居を移していた。地元の茨城県にも、サーフィンスポットは何か所もあるのだが、職業としてやっていくのには千葉の外房の方が何かと都合がよかったのだ。それに、今の居住先の一宮町は、ワールドクラスの波のスポットであることも理由の一つだった。

「そうか、そっちも…。茨城は、とにかく酷いダメージだよ。ここなんかまだ、ましな方かもしれない。北の方に行けば行くほど酷くなっているようだよ」

「北茨城のあたりか？ 日立や高萩もか？」

「うん、ほとんど壊滅的だよ。謙ちゃんの大好きな川尻や高萩のポイントなんかも、メチ

ヤメチャらしいよ」

茨城県の北部にある川尻や高萩は、一宮に劣らぬサーフ・ポイントで、謙作は上級者になつてからは、地元の大洗よりもそちらの方に行くことが多かった。北茨城には父の親友の工藤辰夫の実家があり、そこを拠点にすることができたからだ。

「そうか、辰夫おじさんの実家のあたりは、もつと酷いのか？」

「うん…」

謙作は、自分の第二の家ともいえる工藤辰夫の実家の状況を思い、心を痛めた。

しばらく、二人は黙って荒れ果てたその海岸を眺めていた。まだ、現実のものとは思えなかった。とても、受け入れられるものではなかった。瓦礫の山だった。あらゆるものが散乱していた。数えきれない程の漁船が陸地に乗り上げ、ひっくり返り、方々に点在している。船着き場には、いたるところに大きな亀裂が入り、完全にその機能を失っている。市場や魚の加工用の大きな建物はその骨組みしか残していない。向こうでは、沈没した船をワイヤーで引き上げる作業が行われている。

高校一年の頃から、謙作はここで毎日のようにサーフィンに明け暮れた。泣いたこともあった。死にかけてこともあった。謙作にとっての、文字通り青春を過ごした浜辺だった。それが、無惨な姿に変わり果ててしまっていた。

謙作は、その光景をすっかりと目に焼き付け、一旦、実家に戻ることにした。まだ連絡がつかない実家や父の工場の状況が心配だった。父の工場は、ここから二十五キロほど内陸にある友部という町にあった。東日本にはひとつしかない散弾式銃を製造する工場だった。実家や工場は山間部にあるので、津波の心配はないが、地震でどれだけ被害を受けたのが気がかりだった。今回の大震災の被害は海沿いに留まらず、深く山間部にまで及んでおり、家屋は元より倒壊した工場も相当数あると聞いていた。事実、屋根が潰れ、死者を出した大手の自動車部品工場も近くにあった。

謙作は、一緒に行きたいと言う雄太を乗せて、友部へと向かった。雄太自身が、そこに勤めており、彼の祖父の田代幸吉も、そのすぐそばに住んでいるからだ。

「じいちゃんも、工場も、何ともなければいいけど」

「まあ、最悪のことはないと思うよ。もし、酷い何かがあれば、ニュースやネットで流れると思うから」

「工場の機械や工具は大丈夫かなあ？」

助手席の雄太が不安気に呟いた。

「そうだな。それは心配だな…」

謙作には雄太の気持ち痛み程わかっていた。

彼は、幼い頃から工具を玩具代わりにしてきたような若者だったからだ。

「それに、ここまで酷いことになってしまうと、会社の業績は、しばらくは落ち込んだりうかも。こんな状況の中で、呑気にクレー射撃をやるうという人はいないもんなあ」

「まあ、多少の影響はあるだろうけど…」

「多少の影響ぐらいですむかな？」

「それは、あとで親父や恭介さんに訊いてみればいいさ。だけど、それほど酷い影響にはならないと思うよ」

「本当に？」

「ああ、たぶん…」

「どうして、わかるの？」

「MJの販売の主力は、国内ではなくて、海外だからさ」

「あつ、そうか…。謙ちゃんは、本当に頭がいいなあ！」

雄太にとって謙作は、子供の頃から憧れの存在だった。

「ははは…。おまえも会社の人間になったんだから、そのくらいのことはすぐに思いつくようになれ。技術屋馬鹿にはなるなよ」

そして、口うるさい兄貴分でもあった。

「わかったよー。そっちの方も、一生懸命に勉強するよ」

雄太がほっぺたを膨らませた。

「ところで、謙ちゃんはまだクレー射撃の方はやってないの？」

「ああ、やってないよ」

「もう、そんなにキツパリと言ってくれちゃって…。早くやってよ。僕の方は、もうMJの社員になっているんだからね」

「わかった、わかった。その話は、この震災の騒ぎが落ち着いてからにしよう」

「うん、そうだね…」

雄太が、再び膨らみかけたほっぺたを元に戻した。

二人には幼い頃からの約束があった。謙作がクレー射撃の選手になり、その銃を雄太が造るという約束だ。謙作がサーフィンの道を選んだ時にさえ、雄太はいずれ必ず謙作はクレーの道に戻ると信じていた。その気持ちは今も変わっていないかった。

友部の実家は、普通なら車で三十分ほどの距離だ。友部と大洗は高速道路で繋がれているからだ。普段なら、何でもない距離だ。だが、今は当然それは使えず、二時間以上をかけることになった。

九．王者の娘

謙作達は、ガソリンの残量の事を心配しながら、田畑や山間部を縫うように抜け、やっとの思いで工場にたどりついた。

車は、MJ（三上銃器製造）と書かれた看板のあるゲートを入れて行く。

「建物は、大丈夫みたいだね」

「うん、よかった」

工場の建物そのものは、二棟とも無事だった。

謙作達は、とりあえずホッとして車を駐車スペースに停め、建物の中へ入って行く。

工場の中の方も、一見したところそれ程の被害は受けていないようだった。いくつかの棚が倒れて、部品等が散乱しているのは見受けられるが、工作機械などに致命的な損傷はないようだった。片付けに来ている何人かの工員が彼に気づいた。

「あれ、謙作さん。まさか、千葉から来られたんですか？」

「ええ。何とか、たどり着きました」

「よく、来られましたね。社長も喜びますよ」

「親父達は元気ですか？」

「はい。奥さんも皆元気ですよ」

「よかった。社員の方で、怪我人は？」

「大丈夫です。皆、無事ですよ」

「そうですか、それはよかったです」

「じいちゃんも、大丈夫ですか？」

「続けて、雄太が訊く。」

「勿論ですよ、雄太君。相談役達も、そろって元気です」

相談役の田代幸吉を筆頭に、この工場内の工房には、日本を代表する銃造りの名匠が数人いた。仮に、この国で銃が一般社会に認知されていけば、間違いなく無形文化財に指定されるであろう職工達だ。彼らこそは、会社の財産だった。

「そうですか、よかったです」

二人は、それぞれに胸をなでおろした。

「ところで、親父はどこにいますか？」

謙作が訊いた。

「二階の事務室にいらつしやいますよ」

謙作と雄太は、二階へあがって行った。事務室には、父の恵造の他に玉木夫妻が来ていた。

「おう、謙作じゃないか！」

三上恵造は元気だった。

「お父さん、ただいま。元気そうで、安心したよ」

「ああ、おまえの方も無事でよかった。おまえは千葉の海沿いで暮しているから、心配していたぞ」

「うん。北部の海沿いはかなりやられたけど、僕のいる一宮はそこまではやられなかったから……」

親子は互いの無事を喜び合った。

「恭介さん、お久しぶりです」

それから、謙作は恭介に挨拶をした。

「うん、謙作君。しばらく」

玉木夫妻が会釈した。

謙作より八歳年上の玉木恭介は、MJ社と提携関係にある以前の勤め先の時代に、この工場に出勤していたことがあった。それ以来、父の恵造は何かと恭介を頼りにしていた。現在は、MJ社の社外取締役という肩書になっているが、いずれはMJ社そのものをまかせたいと恵造は考えていた。息子の謙作がプロ・サーファーの道を選んでしまったからだ。

恭介は、学生時代はヨット競技の有名な選手で、同じく学生時代にヨットをやっていた謙作にとっては、ヒーロー的な存在だった。謙作は、そんな彼を兄のように慕っていた。

「謙作君、無事でよかったわ」

恭介の妻の亜里沙が嬉しそうに声をかけた。

「お久しぶりです。そういえば、地震の時、お腹の子は大丈夫でしたか？」

「ええ、おかげさまで。あの時は、さすがに慌てたけど」

心配そうに訊ねる謙作に、彼女はふくよかなお腹を撫でながら答えた。

彼女は、自分の父親に風貌の似た謙作が好きだった。そして、謙作の方も彼女のことを幼い頃からずっと姉のように慕っていた。

亜里沙は、通称「男爵」と呼ばれるクレー射撃界の伝説的世界王者・近衛慎一郎の娘である。父・恵造の古くからの友人である男爵もまた、恭介と同様にMJ社の専任アドバイザーであった。そして、亜里沙は恭介と共に父の東京の事務所を手伝っていた。お似合いの二人は、謙作の憧れのカップルだった。

「それにしても、謙作。よく帰って来れたな。一宮からだろう？」

恵造が驚いたように訊く。

「うん、そうだよ。途中、通行の閉鎖が多くて大変だったよ。でも、みんな無事でよかった。安心したよ。実家の方も大丈夫だった？」

「ああ、多少、壊れたものや倒れたものがあるが、母さんも皆無事だよ。見ての通り、工場の方もほとんどやられなくて済んだ」

恵造はむしろ、海に近い雄太の実家の方が心配だった。

「それよりも、雄太君の家の方は大丈夫でしたか？」

「はい、おかげさまで、僕の家そのものは……。ただ、海岸線は、ひたちなか市も相当やられています」

「ライフラインはどうですか？」

「電気は早々と復旧しましたが、水と都市ガスは駄目です。水は、配給が始まりました。

まあ、何とか生活はできています」

「そうですか……。それは大変ですね。僕でできることがあったら、遠慮なく言ってくださいいね。君はうちの家族同然なんですからね」

「はい。ありがとうございます、社長」

田代雄太は、MJ社の職工として銃造りの修業を始めていた。

「まあ、漁業に携わっている方々はこれから大変なことになるな。福島の原発のこともあるし……。漁業だけでは済まないかもしれない。この先、どうなっていくのやら……」

恵造がため息混じりに言った。

それは、そこにいる全員の気持でもあった。

それからの五人の話は、当然のごとくその話題で尽きることがなかった。

一時間程して、亜里沙が用意したコーヒーを出したところで、やっと話が一段落した。その間、皆に一切の笑顔はなかった。笑って話せるような場面はどこにもなかった。それは、このMJ社の会議室の中だけに限ったことではない。今の日本中のどこでも同じ状況であった。テレビをつけてもそうだ。震災や津波の報道関係以外はCMすら流れない。勿論、バラエティ番組のような笑いを誘う内容の番組も一切ない。日本中が緊張と不安と悲しみに包まれているのだ。

「どうですか、玉木さん。気分転換に撃ちにも行きますかね？ どうせ今日は、お客さんも来ないでしょうから」

コーヒーをすすりながら、恵造が提案した。

「いいですねえ、大賛成です！」

重い話題と議論で、少々疲れ気味になっていたせいか、恭介も喜んで同意した。

「謙作も、たまにはどうだい？」
恵造がダメもとで声をかけた。

「いいね、そうしよう」

普段はあまり乗る気でない謙作も、さすがに今回は同意した。

「へー、珍しいな。謙ちゃんも、今日は射撃をやるんだ」

雄太も一緒になって喜んでる。

まだ十八歳の雄太は、皆と違って未成年である為に撃つことはできない。だが、久しぶりに、謙作が撃とうという気になってくれたことが嬉しかったのだ。

十・蛙の子

工場から一キロ程山に入ったところに、MJ社の経営するクレー射撃場があった。

一同はそこへ移動した。幸い、射撃場のクラブハウスも震災の影響は受けずにすんでいたが、さすがに撃ちに来ている客は一人もいなかった。

「坊ちゃん、よく来られましたね」

射撃場をまかされている岡島が笑顔で迎えた。

謙作を幼い頃から知っているMJ社の古参の社員だった。彼は銃の製造の方ではなく、もっぱらこちらの射撃場の管理の方に携わっていた。

「岡島さん、元氣そうで良かった。久しぶりに撃ちに来たよ」

そう言って、謙作が彼にウインクをする。

それに対して、岡島は皆に見えないように、そっと手でVサインを作って返した。

一同はしばらく談笑し、そして射撃の準備を始めた。勿論、未成年の雄太と身重の亜里沙を除いてだ。

「恭介さん。私とこの子は、いつもの場所に行っていますね」

亜里沙がお腹を指差しながら、恭介にはほ笑んだ。

「ああ、それはいい考えだ。後で、迎えに行くよ。ころばないように、気をつけて」

恭介も嬉しそうだった。

彼女がお腹をかばいながら、ゆっくりと射撃場とは反対の方向に歩いて行った。

「あれ、亜里沙さんはどこへ行くんですか？いつもの場所って？」

そのやりとりを見ていた雄太が、不思議そうに恭介に訊ねた。

恭介は、ただ笑うだけだった。

「あらかじめ言っておくが、おまえは邪魔をするなよ」

恭介に代わって、謙作が説明をする。

「すぐそこに小さな湖があるだろう。亜里沙さんは、そこへ行くんだよ。そこは恭介さんと亜里沙さんが出会って、愛を育んだ場所なんだよ。人に荒らされていないとても静かな湖だ。だから、胎教には持ってこいの場所ってわけなんだ」

二人の出会いに関心があった謙作は、その湖でのことを何度も聞いて知っていた。

「へえー、ロマンチックだなあ。それにしても、謙ちゃんは、亜里沙さん達のことは何でも知っているな」

「まあ、たまたまだよ…。いいか、雄太。くれぐれも亜里沙さんの邪魔をするなよ」
「わかっているよ」

岡島がクレール発射のコントロール・ルームであるプラー室に入り、準備が完了すると、三人が射撃を開始した。

通常クレール射撃は、一回のラウンドにつき二十五回の射撃が行われる。つまり、二十五回クレールが発射され、それを二発以内の散弾で割るのだ。発射されるクレールは方角が定まっていない。正面の場合もあれば、左右どちらかの場合もある。更に、それぞれの角度や高低も定まっていない。そして、それらをすべて割った場合が二十五点満点ということになる。ただし、パーフェクトの満点を取ることは、例え練習であっても、滅多にあるものではない。上級者であつてもだ。

最初のラウンドが終わった時、電光得点板の結果を見た恵造と恭介は、謙作の出した得点に驚いた。

「おいおい、謙作。おまえ、凄いな！いつの間にそんなに腕を上げたんだ？」

「驚いたよ、謙作君！」

上級者の恵造は、二十点。中級の恭介は、十七点。二人共まずまずだ。だが、それに対して謙作がたたき出したのは、二十四点だった。

「うん、まあまあだね」

二人の驚きの反応をよそに、謙作のそれはいたって平静だった。

「まあまああつて、謙ちゃん。二十四点だぞ！」

免許を持っていない雄太でさえ、その難しさは理解している。

「まだ、一ラウンドだよ。さあ、次、行きましよう」

呆気にとられていた恵造と恭介は、謙作のその言葉に引きずられるように次の射撃に入つた。

謙作は今、自分の中に新しく芽生えて来た気持を試そうとしていた。

正確に言うと、それは長年封印してきた気持であつた。彼は、たった数十分間で、自分の人生の転換の可能性を見極めようとしていた。

二度目のラウンドが終わつて、得点結果を見た恵造と恭介は更に驚いた。謙作の出した得点は、再び二十四点だった。

謙作は、やめようとしなかつた。恵造と恭介は、いったん休憩をとると告げた。通常は、一ラウンド後でも休憩を入れるものだ。人間の集中力はそこまで高くはできていない。それ程、クレール射撃とは高い緊張感と集中力が要求されるものなのだ。

謙作が一人で三度目を始めた。

一同は、固唾を呑んでそれを見守つた。辺りは張り詰めた空気に包まれていた。もはや、彼のそれは気分転換や遊戯という領域を超えていた。今の謙作は、異様な程の集中力で満ちていた。まさに、鬼気迫るものがあつた。

そして十数分後、彼のその射撃の結果に一同は声を発することすらできなかった。電光得点板には二十五個のすべてのランプが並んで点灯していた。

しばらくして、謙作はやつと銃を解放した。だが、射撃台からは出ようとしなかつた。何かを思うように、ずつと遠くの山の彼方を見ていた。海で鍛え抜かれた大きな背中だった。

「おまえは、一体…」

微動だにしない息子の後姿を見て、恵造がやっと言だけ絞り出した。

衝撃の結果に、そこにいる誰もが驚きを隠せなかった。たった一人、プラー室の岡島を除いては。

岡島だけは、謙作の本当の実力を知っていた。二十年間、ずっと陰で見続けて来ているからだ。

謙作が子供の頃は、父の恵造は絶対に彼を銃に近づけなかった。暴発事故を恐れてだ。だが、血は争えなかった。謙作は、父の目を盗んでは、クレーを撃ち続けて来た。ある日、偶然そのことに気づき撃つのを止めさせようとした岡島は、逆に謙作の並々なぬ才能に驚かされてしまった。以来、彼は謙作の秘密練習に協力するようになっていた。謙作がそのことを恵造やMJの社員達に知られることなく今日まで来れたのは、ひとえに岡島の協力があつたからこそだった。

成人して、堂々と銃が持てるようになっても、謙作達は射撃の真の実力を周囲の皆に隠していた。恵造らがそばに居る時は、わざと手を抜いて酷い得点にして見せていた。どうしようもない程の下手くそを演じていた。そして、事あるごとに自分はクレー射撃が嫌いだと嘘もついた。そうしなければならぬ理由があつた。父の恵造は謙作に会社を継がせたいと思っていた。プロのサーファーになりたいと考えていた謙作は、それを諦めさせる為に芝居を打つ必要があつたのだ。

そんな謙作の類まれな才能と実力を知る岡島は、隠す協力をしてきたとはいえ、いつも残念に思っていた。埋もれたままにさせておくには、あまりにも惜しい才能だったからだ。

もし、謙作が大洗海岸の近くの高校に進学してヨットやサーフィンと出会わなければ、あのままクレー射撃の道を選んでいただろう。そして、間違いなく世界の頂点を争うレベルの選手になっていたはずだ。岡島は、それについては確固たる自信を持っていた。射撃をする謙作の姿に、ある人物の姿を重ね合わせて見ていたからだ。

そして、まさに今、三上恵造と玉木恭介も岡島と同じ人物のことを考えていた。

「三上さん。謙作君のあの射撃の姿は、まるで…」

「まるで…？」

「ええ…。まるで、お義父さんに瓜二つです」

「やっぱり、玉木さんもそう感じましたか…」

「はい…。一緒に並んで撃っていた先程は気づきませんでした。彼が一人で撃つのを見ていてすぐに…。あれはまさに義父さん、…男爵そのものです」

「まさにそうですね…。どうやら僕は、まんまとあいつに騙され続けていたようです。あんな撃ち方は始めて目にしました。そして、あれは昨日今日で身に付くものではない。何年も経験を積んだ者の射撃です。しかも、相当な上級者の…」

「驚きましたね。実戦経験さえ積みめば、謙作君は間違いなく世界のトップレベルになれるでしょう」

「はは…。そうですか。この数年間、世界のトップレベルのプレーヤー達を見続けてきた玉木さんがそう思われるのなら、間違いないのでしょうか」

恵造が、小さく笑って言った。

恭介は、その恵造の態度に妙な違和感を覚えた。笑ってはいるのだが、あまり嬉しそ

ではなかった。考えて見れば、あれ程口癖のように謙作に会社の後を継いで欲しいと願っていた恵造のほずであった。謙作の隠された射撃の腕前を知った今、もっと心から喜んでほしいはずであった。だが、どう見てもそのようには感じられなかった。

「かえるの…」

恵造が、何かをぼつんと呟いた。

頭の部分しか聞き取れなかったが、一瞬、恭介にはそれが「かえる…」と聞こえた。「帰る…」でも「変える…」でもなかった。発音からすると、動物の「蛙」に聞こえた。

「えっ。今、何とおっしゃったんですか？」

恭介が訊いてみた。

「い、いや…、何でもない。ただのひとりごとです」

そう言いながら、恵造は複雑な心境で射撃台に仁王立ちしたままの息子の後姿をじっと眺めていた。

そして今、その謙作は、ある決意を固めようとしていた。

十一・井の中の蛙

東京、銀座―。

その夜、三上謙作は六丁目にある洒落た造りのバーに入った。

「いらっしやいませ」

品のよさそうな年配のバーテンダーが、迎え入れてくれた。

めったに客の顔を見つめないそのバーテンダーが、この日は謙作のことをまじまじと見つめた。年齢こそ二十歳以上は違うだろうが、ある鼻肩の客と顔や容姿が、とてもよく似ていたからだ。

「失礼ですが、お客様の父様と待ち合わせをされているのですか？」

「いいえ、違います。確かに、人と待ち合わせはありますが、父ではありません」

「そうですか、それは大変失礼しました。私どものある常連のお客様ととてもよく似ていらっしやったものですから、つい勘違いをしまして…」

「それは、ひよつとして、男爵ですね」

「…はい。さようございます」

少しためらいつつも、彼は認めた。

「やっぱり…。実は最近、髪の毛を短くしてから、よくそれを言われるのです」

謙作は、サーフィンと決別する意味も込めて、長い間続けていた長髪をバツサリと短く切っていた。

「さようですか。私も、そのように感じてまして…」

客の顔で、その人となりを見抜くのを生業にしている彼が、長い人生で始めてそれを外していた。

その時、重厚な扉が勢いよく開き、彼が颯爽と入って来た。

男爵こと近衛慎一郎だ。

「やあ、謙作君。待たせたかね？」

「いいえ、時間ピッタリです」

「そうか、よかった。こっちに掛けたまえ」

彼は、迷わずカウンターの中央の椅子に座り、その隣りを指して言った。どうやら、そこが彼の指定席のようだった。

「そういえば、君はよくこの店のことを知っていたね？」

「はい、恭介さんから勧められました。男爵と話をするのなら、この店にしなさいと」
「うむ、そうか」

なるほど、という感じで彼が頷いた。

「謙作君は、ウイスキーでいいかね？」

「ええ、それで結構です」

「では、同じもので頼む」

慎一郎が、バーテンダーに言うと、

「かしこまりました」と、彼はにこやかに頷いた。

こうして並んで座ってみると、やはり二人はよく似ていると、年配のバーテンダーは心の中でそう思いながら用意を始める。やがて、慎一郎の前にウイスキーのセットが置かれる。

「お客様のグラスは、幸い震災の難を逃れましたよ」

そう言って、バーテンダーはダブルの水割りを注いだグラスを差し出した。
がっしりと分厚い造りのウイスキーグラスだった。

「そうか、助かった。長いこと使っているお気に入りのグラスなんでね……」

慎一郎は、手にしたそのバカラを眺めながら、しみじみと言った。

「この店も被害を受けたのかね？」

「ええ。グラス類を、少々やられました」

「そうか、それは災難だったね……」

慎一郎は、急遽予定を変更して、ロンドンから日本に戻ってきていた。

本来なら、ロンドンでプレ・オリンピックのイベントをもう一つこなし、その後は第二の故郷であるイタリアに滞在し、しばらくはそこを拠点に活動する予定だった。日本に戻るのは、娘の亜里沙が出産してからと考えていた。つまり、約三か月後だ。だが、今回の大震災により、すべてのスケジュールをキャンセルして帰国してきたのだ。突然キャンセルされたイベントの主催者達も、さすがに今回だけは皆、協力的だった。そして、心からの弔意を伝えて来ていた。

「ところで、謙作君。話とは何だね？」

慎一郎にそう訊かれた謙作は腹を決めて、ズバリとそれを言った。

「はい。イタリアの銃工房を、どこか紹介していただきたいのです」

「ほう……」

慎一郎は、グラスの手をとめて、謙作の方を向いた。

「それはかまわんが、いったいどうしてだね？」

「実は、銃の勉強を一からやり直したいと思ひまして……」

「銃の勉強を……？」

慎一郎が一瞬声を詰まらせた。

「…君は、サーフィンの世界で生きて行くのではなかったのかね？」

「はい。確かに、三月の十一日まではそのつもりでした」

「なるほど、そういうことか。確かに、サーフィンどころではないな。…失礼、決してサーフィンを見下して言ったわけではない」

「ええ、わかっています」

「銃の世界に戻ろうと思った理由はわかった。だが、君のお父さんの会社は、世界最高レベルの工房じゃないか。それを何故あえて、イタリアの工房に行こうと思うのかね？」

その問いかけに対して、謙作は勇気を持って答えた。

「生意気を承知で言いますが、男爵は若い時からイタリアで銃の修行を積んできてわかっているからこそ、そうやって父の会社の工房の良し悪しが語れるのだと思います。僕はまだ井の中の蛙です。MJの銃がどんなものなのかはわかっているかもしれませんが、それが他と比べてどうなのかまではわかっていないのです。イタリアの銃の何たるかを知って、始めて、MJの良し悪しがわかるのだと思います」

「ふふふ…。確かに、それは一理あるな…」

慎一郎は、久しぶりに人から物を言われた気がした。

以前の自分なら生意気を言うなど一喝して、目の前の若者の話を遮ってしまったかかもしれない。だが、今は不思議とそれが心地よかった。

こと銃に関しては、世界中の何びとといえども男爵に意見できる者はいない。あえて探すなら、イタリアで一人と日本に二人だ。日本の二人とは、MJ社の工房にいる名匠・田代幸吉と、謙作の父・三上恵造のことである。

「その話は、三上…、いや、お父さんには相談したのかね？」

「いいえ。実は、まだです」

「何故だね？」

「できるだけ父の力を借りずに頑張ってみたいと思ひまして」

それを聞いてから、慎一郎は黙り込んだ。

ゆつくりとウイスキーを呷ると、空のグラスを人差し指でバーテンダーの方に押し出す。すぐにおかわりが注がれる。慎一郎は、それをゆつくりと口にした。そして、再び、黙り込んだ。

しばらく考え込んだ後に、やっと口を開いた。

「なるほど、わかった。話を続けたまえ、謙作君」

何かを決断し終わったからなのか、慎一郎は笑顔だった。

「はい！」

安堵した謙作は、話を再開した。

「イタリアに行きたい理由は、三つ程あります。まず一つ目は、今の僕は純粋に一度外に出て学ぶ必要があると感じたからです。本当に修業をしようとするのであれば、生まれた時から慣れ親しんだMJという「ぬるま湯」に居続けたのでは駄目だと感じたからです。二つ目は、未だに強いシエアを誇るイタリアの銃の人気の秘密を知りたいからです。世界中で多くの人々に受け入れられている理由を肌で知りたいのです」

謙作は、目を輝かせながら話を続けた。

「今でこそ、父の会社の銃は世界のシエアのトップを競うまでになっています。ですが、

そうなっている理由の大半は、あの男爵が使っている銃だからということではないのでしょうか。つまり、世界中のあなたのファンが銃そのものの良し悪しよりも、口髭のマークに憧れて買っているのではないかとということです。もしそうであれば、仮に、あなたという最強で最高のブランド印をMJの銃から外してしまった時に、いったいどこまで世界に通用するのかわかりたいのです。それを客観的に判断する為には、どうしてもイタリアの銃を知る必要があります。このふたつの理由は、恭介さんの考えでもあり、アドバイスでもあります」

「ふふふ…。そうか、恭介君か…」

慎一郎が嬉しそうに小さく微笑んだ。

この時彼は、この二人のコンビが、これからの日本のクレー射撃界を背負っていくのではないかと予感していた。あるいは、世界をも担っていくのかもしれないと。

謙作は、自分の決意をまず最初に玉木恭介に相談していた。恭介がこの業界に入った時のことを何度か聞かされていたからだ。かつて、まったくの門外漢だった恭介は、すぐに新しい銃の開発に取り組みず、あえて遠回りの道を選んだ。MJ社に出向し、銃造りの一から修業したのだ。結果的に、その行為は恵造の、そしてついには男爵の信頼を得ることに繋がり、素晴らしい新作の銃の成功に結びついた。三人の信頼関係が、傑作を生み出したのだ。謙作は、恭介から同じアプローチを勧められた。最終的な謙作の目的が、銃造りではなく競技者になることであつてもだ。

「そうすれば、きっと君は君の銃に出会える」

その時に言われた恭介の言葉を、謙作は思い出していた。

「理由は、もう一つあるのだね？」

慎一郎は、それを早く聞きたがった。

「はい。三つ目の理由が、実は僕の最終目的です。イタリアの銃を知り、そして、それによってMJの銃を知った時、僕はそこで始めて自分にとって一番信頼できる銃に出会えることになると思います。そうしたら、撃つ方の修行に移りたいと思います」

すべてを言いきって、謙作はひと息ついた。

おかわりを差し出すバーテンダーのタイミングは絶妙だった。謙作は、それをゴクリと飲みほした。

「うむ、それでいい。その志は見上げたものだ。遠回りでも、それが正しい道だろう」

慎一郎は、謙作の説明に満足げだった。

「ただし、ひと言だけ言わせてもらおう」

「は、はい。何でしょうか？」

謙作は少しだけ緊張して訊いた。

「さつき君は、MJの銃から口髭のマークを外してしまつたら、という旨の話をしていたが…」

「ええ、しましたが」

「私のマークをつけて売るからには、それなりのレベルの銃だということだけは、保証しておこう」

「あ、はい。それは、勿論です。すみません。そう言う意味で言ったのでは…。あくまでも、あれは仮の比喻で…。もし、気分を悪くされたのなら謝ります」

謙作は、あわてて訂正した。

「ははは……。わかってるよ。上げ足を取るつもりはない。冗談だよ。念の為に言っておいただけだ。気にしなくていい」

慎一郎が気さくに笑った。

「確かに、君の言う通りだ。どんなに有名で、高価な銃であっても、それが君の射撃に合うとは限らないからな。君は、君に合う「銃探しの旅」に出ればいい」

「は、はい。あの……。それでは、協力していただけますか？」

謙作は、ホッとして訊いた。

「ああ、勿論だとも。君は私の古くからの日本の友人の息子だからな。しかも、私の義理の息子からの要請でもあるしな」

「もしかして、恭介さんからもこの件で連絡があったんですか？」

「ははは……。直接はないよ。だが、間接的にそうしてくれと言ってきているのさ」

慎一郎は五年ほど前、始めて自分の銃に信頼が持てなくなった時に、恭介に新しい銃の開発を相談したことがあった。その話をしたのがこの店だった。おそらく恭介は、その時のことを慎一郎に思い出させる為に、謙作にこの店を待ち合わせ場所に使うように仕向けたのだろう。

「ふふふ……。あいつめ」

慎一郎は、思い出し笑いをしながら美味しそうにウイスキーを呷った。

それから、彼は腕時計を見た。

「うむ、今ならもう起きてるだろう。そうと決まれば、善は急げだ。すぐに、現地に連絡してあげよう」

そう言うと、慎一郎は携帯を取り出し短縮番号を押した。

電話はすぐにつながったらしく、慎一郎が親しそうに話しを始めた。

イタリア語だった。以前から感じていたのだが、外国の言葉で話している時の男爵は、同じ日本人には見えなかった。謙作は、スポーツ専門誌か何かで読んだあるスポーツライターの言葉を思い出した。「男爵は東洋人には見えない。だが、西洋人でもない。男爵は男爵であり、それ以外の何者でもない。国連のような存在なのだ」と。

彼の存在は、国籍という概念を超越しているのだ。これが、国境を越えて世界に君臨し続ける人物の姿なのだ、と、謙作は改めて実感した。

そうこう考えているうちに、慎一郎の電話が終わった。

「これで、よし……。イタリアの方は大丈夫だよ。大きな工房ではないが、私が一目を置く、つまり私の最も薦めるところだ」

電話の相手は、慎一郎がこの世で意見を許す最後の一人の男、エミリオ・リッチーニであった。エミリオは慎一郎の義理の兄にあたる。つまり、亜里沙の叔父ということになる。だが、この時慎一郎はあえてその説明は謙作にはしなかった。

「さっそく、ありがとうございます」

「うむ。いつまで、現地で修業するつもりかわからないが、とりあえず長期間滞在ができるように、あとで組合の方にも連絡を入れておいてあげよう」

慎一郎の言う組合とは、イタリア職人組合のことだ。

若い頃から、イタリアの銃工房で腕を磨き、人生の半分以上をその国で過ごした彼は、

その会員の資格を持っていた。

「それから、ベレッタやペラッツイにも連絡を入れておいてあげよう。好きな時に好きなだけ見に行つて来ればいい」

「最高です！」

ベレッタとペラッツイとは、イタリアを代表する世界的な散弾銃のメーカーだった。

「最後に、もう一本電話だ……」

そう言つて、彼は再び短縮番号で誰かへ電話を入れた。

今度もイタリア語だった。その会話はさほど長くはかからなかった。

「これで、完了だ」

そう言つると、慎一郎は自分の携帯を切らずに謙作に渡した。

「この番号を君の携帯に登録しておきたまえ。私の個人秘書のラファエラ君のものだ」

「わかりました。でも、せっかく教わつても、僕はまだイタリア語が話せませんが……」

「ははは……大丈夫だよ。日本語が通じるイタリア人だ。向こうへ行つたら何かと不自由だろう。自分の秘書だと思つて遠慮なく何でも相談するといい。イタリア語以外の言語も堪能だ。それから、クレー射撃の腕前もなかなかのものだよ」

「そうですか。それは心強いです」

謙作は、安堵してその番号を登録した。

十二．旅立ち

「何か、凄い混みようだな」

その光景を見て、田代雄太が驚いて叫んだ。

成田空港の出国ゲートは、普段では見られない程多くの外国人でごった返していた。

「福島原発のせいだ……」

雄太と共に見送りに来た玉木恭介が嘆くように言った。

それは、今回の大震災で倒壊した福島原発の放射能漏れの影響によるものだった。それが実際のどのくらいの被害をもたらしているかは、まだ不明であった。だが、東北、関東に住む多くの在留外国人達は、念の為にいったん本国へ避難する道を選んでいった。

本来なら、そんな状況下でミラノ便のチケットも容易に入手できるものではなかったのだが、幸い男爵の計らいで事も無げに入手することができていた。ラファエラという彼の優秀な秘書が強力なコネを持っているということであった。

「それじゃあ、謙作君！」

恭介が右手を差し出した。

「向こうで勉強して何か掴んだら、是非、君の意見を聞かせてくれ。新しく造る銃のヒントにしたい」

握手を交わしながら、恭介が言った。

「はい。僕の意見で参考になることがあれば、喜んで」

「どんな些細なことでもいいんだ。その時は教えてくれ。君が考えている以上に、君には銃に対する特別な感覚があるようだからね」

恭介は、すでに謙作の持つある種の潜在能力に気づいていた。

始めて謙作の本気の射撃を目の当たりにし、そして、今までの経過をプーラーの岡島から聞かされた時、恭介はそれを確信したのだ。

「ははは…。恭介さん、僕を買いかぶりすぎですよ。潜在的な才能はこの雄太の方がずっとありますよ」

「うん、わかっている。何と言っても、あの田代さんのお孫さんだからな」

恭介もまた、田代門下の一人であった。

「だが、雄太君のそれは造る方だ。謙作君には、どうやら撃つ方の特別な才能があるようだ。わが社としては今後、撃ち手としての君の意見を参考にしたいんだ。その才能を、イタリアで磨いてきてくれ」

「わかりました。それよりも、何よりも亜里沙さんの無事の出産を祈っています。その時は必ず連絡をくださいね」

「うん、必ずするよ」

出産が間近の亜里沙は、さすがに今日の見送りには来られなかった。

「謙ちゃん。僕のことも忘れないでくれよ」

雄太が涙目で抱きついてきた。

「おいおい、みっともないからやめろよ。わかったから」

謙作は雄太を引き離すと、笑顔で慰めた。

「イタリアに行くと言っても、今までのように携帯やメールで連絡ができるんだから、千葉に居る時と変わらないさ」

それから、真剣な表情で言った。

「雄太。おまえやおまえの家が震災で大変な時に、俺だけ日本を発つのは、正直とても心苦しい。だが、わかってくれ。俺も、その震災のおかげで大きく人生の舵取りを変えることになったんだ」

「うん、わかっている」

「それに、おまえには俺との大事な約束があることを忘れるな」

「うん。それも、わかっている。一生懸命に腕を見抱いて、謙ちゃんの為に、いつか必ず世界最高の銃を造ってやるよ！」

それは、二人の子供の頃からの約束事であった。

そして、工業高校を卒業して、晴れてMJ社に入社した雄太は、今まさにその現実的な一歩を歩み始めていたのだ。

「そうだ。期待しているぞ。何かあった場合は、親父や辰夫おじさんを頼れ。いいな？」

辰夫おじさんとは、現茨城県知事の工藤辰夫のことである。

彼は、謙作の父恵造とは非常に親しい友人関係であった。同時に、男爵の親友であり、亜里沙の日本での父親代わりでもあった。

「うん、わかった」

「それに、僕達もついているよ」

恭介が、雄太の肩をポンポンと叩いた。

「はい。ありがとうございます」

雄太と恭介に見送られて、謙作が出国ゲートをくぐった。

そこに、自分の両親の姿はなかった。二人とも、今回の彼のイタリア修行には何故か乗り気ではなかったのだ。イタリア行き話を相談した時の父恵造の反応は、想像していたのとは逆だった。頭ごなしに反対こそしなかったものの、いきなり黙り込んでしまったのだ。それは、今まで見たことのないような困惑の表情であった。てっきり喜んでくれるものとはばかり思い込んでいた謙作はその理由を尋ねたが、満足のいくような答えは返ってこなかった。

謙作は言いようのない複雑な心境の中で、日本を発った。

十三・ 出迎えた者たち

アリタリア航空のミラノ行き直行便のジェットは、定刻通り現地時間の夜の六時過ぎにマルペンサ国際空港に到着した。

謙作はタクシーを拾って予約したホテルへ行くつもりであった。今夜はまずこのミラノに一泊し、目的地のブレシアへは翌日明るくなってから行く方が間違いないと判断したからだ。

だが、添乗員などいない謙作にとっては今夜のミラノのホテルですら、行くのにはひと苦労であった。イタリア語が分からないので、ネットで印刷したホテルの案内を運転手に見せて行くしかなかった。少々不安な手段ではあるが、それが一番確実だと皆からアドバイスを受けていた。下手なイタリア語や英語を使う方が、よほど危険だからだ。

イタリアは、世界一の有形世界遺産の数を誇り、言うまでもなく世界有数の観光国である。だがその反面、泥棒が多いことやマフィアの発祥の地としても知られているように、犯罪についても顕著であるということもまた事実である。そういったイタリアの危険な側面については、周囲の皆から散々話を聞かされていた。強盗などの凶悪犯罪が日常茶飯事なのだそう。あの男爵からも、その点については気をつけるようにアドバイスを受けていた。

謙作は日本を発つ前に、ネットでイタリアの犯罪について下調べをしていた。外務省発行の資料や、二〇一一年のイタリアの犯罪統計などを使って。そして、残念ながら犯罪の多さについても、世界有数の国であることが事実として確認できた。しかも、更に残念なことに、そのイタリア国内においてこのミラノが第一位なのだ。一人あたりの犯罪発生件数はあのローマよりも多く、ワースト・ワンなのだ。そういう状況下での、初めてのミラノ入りである。謙作でなくとも、不安にならないはずがなかった。

入国の手続きを終えて、空港の外へ向かう。

腹をくくってタクシー乗り場を探そうとした時だった。

「三上さんですね？」

日本語で誰かに声をかけられた。

女性の声のようだった。声の方向に振り向いたが、そこには見たことのない若い西洋人の女性しか立っていなかった。

キツネに摘まれたようにあたりを見回す彼に、淡いブロンド髪のその美しい女性が笑みを浮かべながら再び声をかけてきた。

「三上謙作さんですよね？」

まちがいなく、その彼女は日本語で自分にそう言った。

「あ、はい。そうですか…？」

謙作は、緊張して答えた。

「ごめんなさい。驚かせてしまったようですね…」

相手がすぐに謝ってきた。

謙作は、知らず身構えていた。早速、詐欺か何かに巻き込まれるのかもしれないと警戒していた。相手が美しい女性なので、なおさらそう感じられた。

「お待ちしていました、謙作さん。私は、ラファエラです」

「ラファエラ…。ひよつとして、男爵の秘書の？」

謙作は、意表を突かれた。

「はい、そうです」

「驚きました。迎えに来てくれるとは、聞いていなかったものですから…」

「そうですか…。確かに空港の迎えまではボスから頼まれてはいませんでした。ですが、ここは英語圏ではないので、謙作さんに不自由や不安があるといけないと思って、念の為に私の独断で来てみました」

「そうだったんですか」

「それに、ミラノは外国人の方から見れば、ファッションや食文化などでオシャレなイメージがあるかもしれませんが、実は犯罪がとて多い都市なのです。それもあって、心配で来てみました」

ラファエラは、完璧な日本語で説明した。

謙作はそのやりとりだけで、あの男爵がこの女性を個人秘書に選んだ理由が分かったやうな気がした。

「ありがとうございます。実は、ここが犯罪が多いことは事前に見聞きして知っていて、内心とても不安でした。ですから、初対面のあなたに声をかけられた時、ひよつとしたら、何かの詐欺かもしれないと勘違いをして緊張してしまいました」

「そうだったのですか。それでは、驚くのも無理ありませんね。そうやって謙作さんを緊張させてしまうようなこの街の現状については、本当にお恥ずかしい限りです。ミラノを代表してお詫びします」

彼女は、あたかも自分がこの大都市の代表者であるかのように詫びた。

「いやいや。何も、あなたが謝ることは…」

「そうですね…」

そう言って、ラファエラがはにかんだ。

「外に車があります。よろしければ、ホテルまでお送りしますが…」

「ありがたい。是非お願いします」

彼女の車は、空港の正面玄関の目の前に停められていた。空港の外は日が暮れかかり薄暗くなっていたが、その真っ赤なルノーのスポーツタイプの車はよく目立っていた。

彼女が近づくと、その車を守っていた空港の職員らしき男が、まるで高級ホテルのドアマンのように運転席のドアを開けて彼女をエスコートしてくれた。

車は轟音を響かせてミラノの中心街へ向かった。

「本当に、助かります」

助手席の謙作が礼を言った。

「どういたしました。勝手にこんなことをして、ご迷惑でなければいいのですが」

「とんでもない。実は、ホテルへ行くタクシーに乗るのにも不安だったくらいですから。とても助かっています」

「それを聞いて安心しました。急に仕事の方が暇になってしまい、時間にも余裕ができたものですか」

「とうとう？」

「本来なら今頃は、ボスと一緒にイタリアを拠点にヨーロッパでのスケジュールをこなしているはずだったのです。ところが、あの東日本大震災のおかげですべての仕事をキャンセルすることになってしまいました」

「ああ、そうか。そうだったんですか。あの震災はあなたの仕事にも影響を…」

「ええ。少なくともアリッサさんが子供を産む予定までの数か月間は、それこそスケジュールがぎっしりでしたから」

「アリッサさん…、誰のことですか？」

「あら、ごめんなさい。発音が悪かったようですね。亜里沙さんのことです。ボスの娘さんの…」

ラファエラが焦ったように訂正した。

「ああ、なあんだ。そうか…」

彼女のそんな態度を気にとめるでもなく、謙作は納得していた。

「そういえば、入国ゲートの人波の中で、よく僕がわかりましたね？」

柄が大きく彫の深い顔立ちの謙作の外見は、東洋人的な特徴がまったくないからだ。

「ボスが、会ってみればすぐにわかると言っていましたから。…事実、その通りでした」

「へえー、そうですか…」

彼女の答えだけは、要領を得なかった。

「ところで、謙作さん。夕飯はどうされますか？」

「夕飯かあ…。言われてみれば、少しお腹が空いてきました」

「では、よろしければ私の家で食べませんか？」

「えっ、あなたの…。いいんですか？」

「はい。お嫌でなければ」

「とんでもない。喜んで！」

「よかった。では、このまま家に向かいますね。実は、私の両親もあなたに会いたがっているのです」

「えっ、ラファエラさんのご両親が、僕に？」

「はい、そうです」

「一体、何故ですか？」

「私の父と母は、あなたのご両親と知り合いだからです」

謙作は驚いた。

「えっ、僕の両親と…？ ラファエラさん。失礼ですが、あなたのご両親はどなたなんですか？」

「私の父は、ルキアーノ・ジオヴァネッティです」

「ジオヴァネッティ…って、ひよつとして、あのオリンピックを連覇した？」

ラファエラの父ルキアーノ・ジオヴァネッティは、モスクワとロサンゼルスの大大会で唯一クレー射撃のオリンピックピック連覇の偉業を果たした伝説的な人物である。その名前はさすがに謙作もよく知っていた。

「ええ、そうです。父は国際射撃連盟の理事をしていますから…。同じ連盟の理事でいらつしやる謙作さんのお父様とは親交が深いと聞いています」

「なるほど、そうだったんですか…。言われてみれば、確かに父は頻繁にイタリアに行っていますね。でも、そういうことなら父親同士なら分かりますが、僕の母の方もご存知なんでしょうか？」

「はい、古くからの知り合いということですよ。私も詳しくは知らないのですが、おそらくボスを通じての友人関係だと思います。若い頃の両親が謙作さんのご両親と一緒に写っている写真も見たことがありますから」

「へー、そうなんだ。まったく知らなかった…」

「謙作さんは、私の両親達と自分のご両親との交流のことは、何もご存じないようですね？」

「はい、まったくの初耳です。僕の親達はイタリアでのことなんかは一度も話したことがありませんから」

父の恵造が、イタリアへ仕事関係でよく行くことは知っていたものの、現地で誰と何をしているのかまでは、一度も聞いたことがなかった。勿論、その話の中にジオヴァネッティのジの字も出てきたことはなかったのだ。まして、母までもが、交流があったなどということは驚きだった。

「そうなのですか…」

そう呟くように言った後、彼女はしゃべらなくなった。

ラファエラの自宅は、ミラノの中心のドウオモから一キロも離れていないマジェンタ通りにある高級住宅街にあった。門の脇には警察官のような服装の男が立っており、彼女の車を見るなり胸の無線機で誰かと話をする。それから頑丈そうな鉄柵の門を開いて、会釈をしながら中へ通してくれた。

石畳のアプローチを進み、屋敷の前の小さなロータリーの途中に車を停める。

「えっ。ここが、ラファエラさんのお宅ですか？」

「ええ、そうですよ」

「凄い豪邸ですね…？」

「ありがとうございます」

その大きな石造りの邸宅は、正面の入口ゲートからは想像がつかない程の奥行きと広がりがあった。建物の玄関の前にも、門にいたのと同じ制服の男が立っていて彼女に会釈をする。

「この警備員さん達は？」

この状況で、訊かぬ方がおかしかった。

「この人達は警備員ではなく、本物の警察官なのですよ」

「えっ、何故ですか。何か事件でもあったんですか？」

「ほほほ…。驚かせてしまつてごめんなさい。私達のことは、何もご存知なかったのですよね」

それを聞いた彼女が笑いながら説明した。

「実は、父はこのミラノの知事をしているのです」

「ええっ、本当ですか？」

驚かされることばかりであった。

「ええ。もう、随分長いことやっているのですよ」

「なるほど、それで…」

それを聞いて、不可能な状況下でミラノ便の航空券が事も無げに入手できたこと、空港の正面玄関で職員が彼女に手厚く応対したこと、すべての説明がついた。彼女が、ミラノの犯罪状況について代表して陳謝したのも、決して大げさなことではなかったのだ。

「そうか。そういうえば、辰夫おじさんが…」

更に謙作は、茨城県の知事をやっている工藤辰夫が、親しい友人がイタリアのどこかの大都市の知事をやっている、その間柄から友好都市関係を結んだという話を思い出した。それが、ミラノであり、ジオヴァネッティだったのだ。

「それにしても、嚴重な警備ですね」

「ええ。実は、先日狙撃騒ぎがあったばかりですし…」

「狙撃って、お父さんが狙われたんですか？」

謙作が焦って訊ねた。

「はい。幸い弾は外れたので、何ともありませんでしたが」

「で、犯人は捕まったのですか？」

「いいえ、残念ながら」

話の内容の割には、ばかに落ち着いた答え方であった。

「そんな状況で、大丈夫なんですか？」

「ほほほ…。確かに普通の状況ではないかもしれませんが、それをいちいち気にして生活をしていたら、ミラノの知事は務まりませんわ」

ラファエラは、まるで他人事のように平然と笑った。

「それにしても…」

「父の役職上、犯人を特定するのは難しいのです。知事クラスの政治家には、常にそういう危険が付きまとうのです。それでも、マフィアとの絡みの多いイタリア南部の政治家さん達に比べたら、まだましな方なのですよ」

「なるほど、確かにそう言われてみれば…」

入国早々、謙作はこの国の裏の一面を垣間見た気がした。

そして、事あるごとに言われている、日本というのは抜きん出て平和な国なのだという話を現実的に思い知ることになった。

「そうなのです。あなたが育った日本では考えられない話なのですが、これもこの国の姿なのです。それに、父は知事になる以前は、長く警察関係の仕事にいましたから、なおさら犯人の対象範囲が広すぎて特定ができないのです」

ルキアーノ・ジオヴァネッティは、もともととは国家警察の中の機関フィアンメ・オーロ（体育部局）に所属するクレール射撃の選手であった。並外れた資質を持っていた彼は、オ

リンピック連覇という大偉業を成し遂げ、国民的英雄になった。警察機構を登りつめた彼は退官後、望まれて故郷であるミラノに戻り、圧倒的な人気で知事の職に選ばれたのだ。

玄関に入ると、ジオヴァネッティと妻のエリザベッタが謙作を出迎えた。

「おお……」

二人は声にならない感動の嗚咽を漏らしながら、しばらくの間まじまじと謙作の顔を見つめていた。

「は、はじめまして。三上謙作です」

どうしていいかわからない謙作は、とにかく覚えたてのイタリア語で名乗った。

「勿論、わかっているさ。よく来た！」

そう言うなり、ジオヴァネッティが抱擁してきた。

謙作は驚いた。感情の表現がオーバーなイタリア人だということを差し引いても、熱烈な歓迎の仕方であった。長い抱擁だった。彼はずっとそうしながら、「よく来た」と何度も繰り返し言っていた。イタリア語だから、彼が何を言っているのかは謙作には分からない。だが、耳元で聞こえる言葉の節々に、ケンという自分の愛称が何度か聞こえたような気がした。

ようやくジオヴァネッティから解放されると、続いてエリザベッタが抱擁してきた。

「ご両親はお変わりありませんか？」

エリザベッタの言葉をラファエラが通訳する。

「はい、二人共元気にしています」

「それは、何よりです」

彼女は涙ぐんでいるようだった。

「とにかく、謙作君。夕食をとりながら、ゆっくり話を聞かせてくれ」

ジオヴァネッティの言葉で、一同はダイニングへ向かった。

十四・ミラノの夜空

「そうか。やはり、君は銃の道に目覚めたのか。やはり……」

ジオヴァネッティは感慨深げのようだった。

「はい。やれるところまで、やってみようと思います」

「私がローマに留まらずに、このミラノに戻って来た理由はいろいろある。だが、一番の理由は、やはり銃の為なのだよ」

「といますと？」

「ミラノは、ロンバルディア県の県都だからだよ」

父のその言葉を通訳してから、ラファエラが補足した。

「謙作さんが、これから修業をするブレシアという街は、同じそのロンバルディア県の中に位置しているのです」

「そうなんですか」

その様子を見て、ジオヴァネッティが頷きながら話を続ける。

「ブレシアこそわが国が誇る銃造りの故郷であり、私の原点でもあるんだ。だから、この地で暮らし、この地の発展の為に尽くそうと思ったのだよ」

「あなたの原点？」

「そうだ。まだ若い頃、私はそこで二人の男と運命的な出会いをした。後に親友となる二人の男とだ。その二人が、私のクレー射撃を開花させたのだよ。一人は、君がこれから世話になる銃造りの天才エミリオ・リッチーニだ」

「僕がお世話になる、銃工房のオーナーで、男爵の義理のお兄さんにあたる方ですね」

「そうだ。彼の造る銃に出会えたおかげで、私の射撃のスキルが向上できたのだ。そして、もう一人が近衛慎一郎。すなわち、その男爵だ。彼に出会えなければ、今の私はなかったと思う。すべての面での私の目標となった男だ」

「そうだったんですか…」

謙作は、オリンピックを連覇した英雄をして、そこまで言わしめる近衛慎一郎という男の底知れぬ奥深さを痛感していた。

「だから、その男爵の親友である君の父上、三上恵造とも当然のように仲良くなったというわけだよ」

「ということは、父とはクレー射撃連盟の理事になる前から知り合いだったということですか？」

「勿論だよ。まだ、君が生まれるずっと前のことだよ。我々皆が、二十代そこそこの若い頃の話さ」

やはり、さっきのラファエラの話は事実であった。

「そんな前から…。知りませんでした」

「そうか。恵造達は、その当時のことを謙作君には話していないんだな…」

ラファエラから、謙作のその返答を通訳されたジオヴァネッティは、哀しそうな顔で呟いた。

「あなた、それ以上はもうおやめになった方がよろしいわよ」

エリザベッタが彼に釘を刺すように言った。

ラファエラは、その二人のやりとりを謙作には訳さなかった。

「ラファエラさん。お二人は今、何とおっしゃったんですか？」

異変に気づいた謙作が、それを聞こうとすると、

「いえ、いいんですの。単なる夫婦間の話ですわ」

と、彼女が茶を濁した。

そうではないと、謙作は感じていた。ジオヴァネッティの発言の中に、確かに恵造と言う自分の父の名前が入っていたからだ。

そんな謙作の空気を察してか、ジオヴァネッティが包み込むような笑顔で彼に言った。「というわけで、幸い今の私にはそこそこの力がある。イタリアに居るうちは、私を父親だと思って何でも相談してきなさい。どんなことでも遠慮せずに来てきていいのだよ」

「はい。ありがとうございます」

「その代わりと言っては何だが、ひとつだけ頼みがある」

「はい、何でしょうか？」

「君がイタリアに居るうちに、一度でもいいから一緒に射撃をしたいのだが。どうだね？」

「それは勿論、喜んで。伝説のチャンピオンとご一緒できるとは、光栄の限りです。こちらからお願いたいたいくらいです！」

謙作の目が、この日一番に輝いた。

「それは、良かった。だが、今の私は君が期待するほどの腕前ではないがね」

「はい、それでもいいです。是非お願いします！」

「ははは…、謙作君。それでもいい、とは、少々言葉が過ぎるぞ。今の私の言葉は謙遜に決まっているだろう」

「あつ、どうも。それは、大変失礼しました」

それを端に食卓が笑いに包まれ、それから笑いが絶えることがなかった。

ジオヴァネッティは、終始機嫌が良かった。大笑いを繰り返しながら旨そうに酒を飲み、クレ―射撃談議に花を咲かせた。酒が進むと、ミラノやブレシアでの昔話に移って行き、若き日の男爵やリッチーニとの友情の日々を熱く語った。

そのうちに、彼はいびきをかき始めた。

「あらあら、あなた。風邪をひきますよ。明日も公務があるというのに…」

エリザベッタが、足元のおぼつかない夫を手助けしながら席を立たせた。

「ラファエラ。私はこの人を寝室に連れて行くから、あなたは謙作さんを部屋に案内してさしあげて」

結局この日は、夫妻の強い勧めもあつて謙作はこの屋敷に泊ることになっていた。

「はい、お母さん」

「じゃあ、謙作さん。ごゆっくりね」

「はい。おやすみなさい」

夫妻が去り、ダイニングには謙作とラファエラの二人だけになっていた。

「酔い醒ましに夜風に当たりませんか？」

そう言って、ラファエラがテラスに誘った。

星が煌めく美しい夜空だった。

謙作は魔法にかかったような錯覚を覚えた。彼女の淡い金色の髪がその星空に溶け込み、より美しさを引き立たせていた。

「今日は、ここに来て下さって、ありがとうございます」

というラファエラの言葉に、

「いや、とんでもない。礼を言わなければならないのは僕の方です」

と、謙作が恐縮する。

「いいえ、お誘いしたのは私の方なのですから。両親に会ってくださって、心から感謝しているのです」

「そう言ってもらえると…」

「あんなに楽しそうな父の姿を見るのは久しぶりです」

「そうですか。いつもはもっと物静かなんですか？」

「いいえ、物静かとまでは…。人と接するのが多い仕事ですから、基本的には普段も明るく楽しい人です。でも、あそこまで陽気には…。間違いなく、謙作さんに会えたおかげですよ」

「えっ、僕に会えたから？」

「ええ、間違いありません」

「でも、何でだろう？」

「きつと、ずっとかかえていた何かか吹っ切れたのでしょうか。私にはそう思えるのです」
そう言い切ったラファエラは、すぐに後悔した。

酔いが普段以上に自分の口を軽くしているようだった。

「吹っ切れたって…。何か心当たりがあるんですか？」

当然、謙作がその話に興味を示した。

「い、いえ。具体的には、何の根拠もありませんが…。ただ、そんな気がしたというだけです」

「ふーん…」

謙作は、釈然としなかった。

父や自分の昔のことで、言いにくい何かがあるのは間違いなさそうだった。漠然とだが、昔、自分の両親とラファエラの両親との間に何かがあったのだろうということは想像ができた。自分を迎え入れた時の玄関での抱擁の仕方からも、食事の席で最初に見せた困惑した様子からもそう思えた。だが、ここでそれを必要以上に追い求めるのはやめようと思った。自分はそんなことを知る為にイタリアまで来たわけではなかった。

「ところで、ラファエラさんは何故、男爵の秘書になったんですか？」

謙作は、自分の方から話題を変えた。

「私は、以前は父の手伝いをしていましたの。知事の個人秘書のようなものです。ですが、四年ほど前にボスの秘書をしていた亜里沙さんが結婚されて、それでその後任になったのです」

「そうだったんですか。でも、よく引き受けましたね。お父さんの下で働くのに比べたら、色々大変なんじゃないませんか？」

「いいえ、まったく。だって、私の方からお願ひしたのですから」

「本当に？」

「ええ。私は、父の影響で以前まではクレー射撃の選手をしていましたから、他の方と同様に男爵にはずっと憧れていましたので…。それに、子供の頃から男爵の素晴らしさを父から聞かされ続けてきましたから…。亜里沙さんが辞めると聞いて、すぐに日本語の猛勉強をしました。彼女にも随分教えてもらいましたわ」

「へえ…」

謙作はイタリアに来ていながら、大好きな亜里沙の名前がラファエラの口から何度も出てくるのが嬉しかった。

「それにしても、まだ若いのに、よくきっぱりとクレーの選手を辞められましたね。悔いはなかったんですか？」

逆にこれから選手を目指そうとしている謙作にとっては、ラファエラがクレー射撃の選手から身を引いた理由に興味があった。

「そうですね…」

少し考えてから、彼女は答えた。

「まったく悔いがないと言えば、嘘になってしまいます。ただ、ちょうどその時期に、続けるか辞めるかで迷っていたのです」

ラファエラは、嘯みしめるように話を続けた。

「当時、私には二人のライバルがいました。一人は、ウクライナの方で、もう一人が、日本の平沼朋佳さんです。おそらく平沼さんのことは謙作さんも御存知ではないかと？」

「ええ。勿論、よく知っています。僕の親友の奥さんになった人ですから。今は、浅尾と言う名字になっています」

謙作の親友、浅尾和孝の結婚相手は、旧姓を平沼と言った。当時、平沼朋佳は日本の女子クレール射撃界のヒロインであった。

「やはり、ご存知でしたか。そういえば、彼女の御主人の浅尾さんもクレール射撃の日本チャンピオンで、そのお父様もそうだったと伺っています」

「そうですね。平沼さんやお父さんは間違いなく偉大な選手でしたが、まあ、あいつの場合には下手くそな割には、一応何年か連続して日本チャンピオンになっていましたね。ははは：」

謙作が笑って答えた。

「ほほほ：。そんな言い方ができるくらいに親しいお友達なのですね」

「ははは：。まあ、そんなところです」

謙作は心から笑っていた。

そして、嬉しさのあまり軽口まで叩いていた。今、自分がいるところが、イタリアだということをお忘れ去るほどだった。そして、亜里沙に続いて親友の浅尾和孝や彼の奥さんの名前が出てきたことよって、謙作はますますラファエラに親近感を持った。

「世間は、本当に狭いものですね」

「ええ、まったく：。あいつも最近引退して、今は国会議員をやっているお父さんの会社を手伝っています。お父さんの浅尾義和氏は、誰からも尊敬される人格者です。そして、奥さんになった旧姓・平沼さんも素晴らしい女性です。ところで、話が途中でしましたが、ラファエラさんは何故引退を決められたんですか？」

「一番の理由は、ライバルがいなくなって、目標を失ったからです」

「ラファエラさんは、平沼さんともライバル関係にあったって話でしたね：？」

「ええ。私達三人は、とてもよいライバル関係であり、そして、仲良しでしたの。大きな大会の時は、必ずと言っていい程この三人が優勝を競っていました。とても良い切磋琢磨の関係でした。そんな時、平沼さんが急に引退するということになってしまったのです」

「浅尾との結婚の為にですね？」

「はい、そうなのです。それを聞いた途端に、私も一気に目標を失い、やる気を失ってしまったのです。それは、もう一人のウクライナの彼女も同じでした」

「なるほど、そういう理由だったんですか：」

「謙作さんは、もともとサーフィンの選手だったと伺っていますが、クレール射撃の方はされていたのですか？」

「ええ、多少は：。まあ、遊び程度ですが。きちんと正式にはやっていませんでした。選手であったこともないし、勿論、試合なんかに出たことはありません」

「本当ですか？」

「ええ、本当なんです」

「勿体ないわ。クレールをやるには、これ以上ない環境にいらしたのに：」

「今思えば、そうですね」

「以前は、本格的にやろうと思うほどは、クレーには興味がわかかなかったのですか？」

「い、いや。それは…」

一瞬、ためらってから、謙作が続けた。

「実は、心の底ではクレーが大好きだったんです。やりたくて、やりたくて仕方ありませんでした。ひよっとしたら…、いや、間違いなく、サーフィンよりもクレーの方が好きでした！」

この時、謙作は今まで蓋をしてきた心の奥底にあつた気持ちを吐き出した。自分でも驚くほどに、一気に吐き出した。

「そんなに…、そんなに好きだったのなら、何故、本格的になさらなかったのですか？」

ラファエラが少し戸惑って訊いた。

「…それが、僕にも、よくわからないんです」

その気持ちを吐き出した謙作自身も、戸惑っていた。

「ただ、深くクレー射撃にはかかわってはいけなさと、子供の頃から思い込んできたんです。何故かと聞かれても、その理由は自分でもよくわからないんです」

戸惑いながらも、謙作は自分の気持ちの変化を自身でたどりながら話を続けた。

「ついこの間まで、そうやって、見えない何かに自分の心の底の感情を押さえつけられてきました。今思えば、そんな中途半端な気持ちでやっていたわけですから、サーフィンの方は中途半端な成績しかあげてられませんでした。そこへ、あの東日本大震災が起こったんです。あの時に、すべてが吹っ切れたんです。海と決別して、本当に自分のやりたい道に進もうと…」

ラファエラの何気ない質問は、謙作の人生を左右する程の大きな話にまで発展してしまっていた。そして彼女は、これ以上ここでこの話を続けるのは好ましくないと考えた。今の謙作の話の原因が、自分の両親が隠している何かと関係があるのではないかと直感的に感じはじめていたからだ。

「そうだったのですか…。ところで、サーフィンは、若い頃からされていたのですか？」

「最初はヨットをやっていました。そのあとがサーフィンです」

「両方ともマリンスポーツなのですね。いいですねー」

彼女が羨ましそうに言った。

「ラファエラさんは、マリンスポーツが好きなんですか？」

「いいえ。特別にマリンスポーツが好きとかではなくて、海が好きなのです。このミラノの街は大好きなのですが、内陸部ですから小さい頃から海には縁がなかったのです。それに、やっていったスポーツはクレー射撃ですから、これも海には縁がありませんでしたし…」

「確かに、射撃場はたいがい山の中か内陸部にありますからね」

「ええ、そうなのです」

「でも、日本には海に面した射撃場があるんですよ」

「本当ですか？」

「ええ。千葉県というところにあります。規模は小さいですが、一応国際規格ですよ」

「千葉県…、成田空港のある県ですよ？」

「ええ。その射撃場は成田のような内陸部ではなくて、海沿いにある富津市という所にあ

るんです」

「いいですねー。行ってみたいわ」

「ははは…。機会があれば、いつか行きましょう」

「約束ですよ！」

「はい！」

二人は、夜空の向こうに海の景色を思い描いていた。

十五・入社試験

ラファエラが運転する真っ赤なスポーツタイプのルノーが、リッチーニ社の銃工房の構内に停まった。ミラノにある彼女の実家から、一時間ほどで到着した。

慣れた様子で事務所棟に入った彼女は、受付に向かう。

「こんにちは、ラファエラさん」

受付嬢が応対する。

「こんにちは。エミリオおじさんは？」

「社長は、工房のB棟にいらっしやいますよ」

「ありがとうございます。あ、そうそう。こちらが、今日からここでお世話になる三上さんよ」

「三上謙作です。宜しくお願いします」

謙作が受付嬢と片言のイタリア語で挨拶を交わし、それから、ラファエラに案内されてB棟に向かう。すれ違うすべての社員が、彼女に会釈をしていく。

「顔見知りの方が多いんですね」

謙作が感心する。

「ええ。ここは、父に連れられて、子供の頃から出入りしていますから。それに成人してからはこの契約選手でしたし…」

「ああ、そうか…」

謙作は、彼女がクレール射撃の選手だったことを思い出した。

棟の中に入った時、謙作はその内部の雰囲気にかされた。それは、およそ銃の製作工房とは思えないような綺麗で洒落た造りであった。何かの芳香剤だろうか、何とも言えないいい香りが場内に漂っていた。MJ社の工房が、機械油の臭いが漂っているような雑然とした金属加工の製造工場だとすれば、リッチーニ社のそれは、まさに現代美術の作品を制作する工房であった。いたるところに観葉植物が置かれ、壁や柱、職工の作業場を仕切るパーテーションに至るまで美しい赤茶色の木目材に統一されていた。耳を澄ますと優雅なクラシック音楽が流れている。

謙作は、始めから強烈なパンチを食らったような気がした。他の追隨を許さないイタリアの銃造りの一端を見せられた気がした。こういう環境の中から芸術的な作品が生み出されるのだ。彼らにとっての銃造りは、美術工芸品の制作と同じ感覚なのだ。

「ほほほ…、いらしたわ」

いくつも並ぶパーテーションのその一角にラファエラが立ち止った。

他の作業場と変わらないその場所で、他の作業員と同じような目立たない出立ちで、年

配の男が万力に固定された金属部品をしきりに研磨していた。もし、彼女のそのひと言がなければ、謙作はその場をそのまま通り過ぎていただろう。

「エミリオおじさん！」

「うん？…やあ、ラファエラ」

エミリオが作業の手を止め、拡大鏡をはずした。

「連れて来たわよ」

そう言っ、謙作へ視線を促す。

「う、嘘、だろ？」

謙作の顔を見たエミリオは、そう言っ、絶句した。

「今日から、宜しくお願ひします」

エミリオの過剰とも思える反応に驚きながら謙作が挨拶をすると、彼がいきなり抱擁してきた。長い抱擁だった。昨夜のジオヴァネッティの時と同じであった。

長い抱擁が終わると、エミリオは今度は謙作の両肩をつかんだまま彼の顔を見つめた。何かを観察しているかのように正面からまじまじと見つめる。それから、やっ、と口を開いた。

「謙作。今から、ファーマスに出かけるぞ」

「えっ、ファーマス？」

「ファーマス社のことです。ここと同じ銃の製造会社で、エミリオやうちのボスが若い頃に修行した工房です」

ラファエラが説明した。

「君達、ちよつと手伝ってくれ」

エミリオが作業用のエプロンを脱ぎ、入口の方向に歩き始めた。

謙作達は、慌てて彼の後を追う。

三人はA棟に移動し、鉄格子で仕切られ厳重に施錠された銃の保管庫へ入る。エミリオは何やらぶつぶつと呟きながら、何十挺と並んだ散弾銃の中から四挺を選び出し、ケースに入れる。そのうち二挺を謙作に、一挺をラファエラに持たせた。自分も一挺持ち、散弾の実包をカバンに詰める。

「では、まいろうか」

言うや否や、建物の外へ足早に向かう。

三人を乗せた真っ赤なルノーは、ファーマス社へ向かった。

そこは車で五分ほどの近場にあった。ファーマスの工房も、洗練された外観の建物だった。だが、エミリオは社の棟には寄らずに工房群の裏手にある試験用の射撃場へ直接向かった。そこは、ファーマス社とリッチーニ社が共同で使用している試験場であった。

「謙作。これから、君の入社試験をやる」

「えっ？ は、はい…」

「今から、この四挺の銃を撃つんだ。好きなように撃つていい」

「はい。わかりました」

「ラファエラ。すまんが、君はプラーを頼む」

「はい、おじさま。設定はどのくらいにします？」

「うん。一番上でいい」

「えっ、一番上って？」

「一番難易度の高い奴のことだよ」

「それで、かまわないのですか？」

「ああ、かまわんよ」

「で、でも。彼は、まだ…」

「いいから、それで頼むよ」

イタリア語のわからない謙作には、二人のそのやりとりの内容はわからない。

エミリオに念を押されたラファエラが、首をひねりながらプーラー室へ向かった。準備が整うと、全面がガラス張りの室内から彼女がOKのサインを出す。

「どれでもいいから、撃つてみたまえ」

エミリオにジェスチャーでそう促されて、謙作は四挺のうちの二挺を手にした。

四挺はそれぞれ少しずつ形が違っていたが、共通して言えるのは、どの銃もとても美しい形をしているということだった。性能の良し悪しの真偽はともかく、それは散弾を発射する道具と言うよりは、美術工芸品だと思った。

謙作が最初の銃をかかえて、射撃の動作に入った。

「はっ！」という彼の掛け声とともに、正面方向にクレールが打ち出される。

一発目は当たらなかった。だが、その直後に追うように発射された二発目の散弾が、逃げ行くクレールを仕留めた。

クレール射撃用の散弾銃には、通常二発の散弾が装てんされている。つまり、クレール射撃競技は、一回につき二発の弾を使って行われるのだ。一発目を初矢。二発目を二の矢と呼ぶ。初矢を外しても、二の矢で仕留めればいいのである。

しばらくは、正面方向へのクレールの発射が続く。その次からは、謙作は、事も無げにその五枚のすべてを初矢で粉碎した。しかも、的はクレールの芯を外していなかった。オレンジ色のクレールは、三十メートル先の空中で撃ち出された散弾によって次々と粉々に砕かれていった。続けて、発射された左右の十枚も、難なくすべてを粉碎する。

「よし、次はこれだ」

エミリオが無表情のまま、二番目の銃を謙作に手渡す。

二回目も一回目と同じように、一番始めは、外したが、すぐに二の矢でカバーした。そして、同じようにその次からは、すべてを初矢で仕留めた。正面方向が続いた後、次に左右に飛ぶ。謙作は、これも難なくすべてを粉碎する。

「よし、三挺目だ」

次の銃を謙作に手渡すと、エミリオはプーラー室の中のラファエラに正面と左右を無作為に混ぜて発射するように手で合図する。

右、左、正面、左と、ランダムにクレールが打ち出される。謙作は、これも最初以外は、すべてを初矢で粉碎した。

「す、凄いわ！」

プーラー室の中で、思わずラファエラが叫んでいた。

だが、一方のエミリオは、まるで当たり前のものを見ているかのように表情ひとつ変えていなかった。

「よし、最後だ」

四挺目の銃でも、同様だった。

結局、謙作は一度目は二の矢に頼ったものの、結果的には打ち出されたすべてのクレールを粉砕した。

「謙作さん。あなたは、本当に…」

プーラー室から走り出て来たラファエラが、声を詰まらせた。

「…本当に、選手じゃなかったのですか？」

「はい、本当です」

そう自然体で答える謙作には、まったく気が負いがなかった。

「いいえ、選手でもこんな射撃は無理だわ。だって、今の発射の設定が一番難しいレベルだったのですから。それを、六十枚のクレールをすべて…。上級者でも全部クリアするのは無理なはずですよ。それなのに、あなたは…」

その難しさは、S級のクレール射撃の選手であった彼女自身が一番よくわかっていた。

「ははは…。だったら、この素晴らしい銃のおかげかもしれないな」

興奮するラファエラに対して、困った謙作は、その場逃れに言った。

「でも、初めて手にした銃で…。そんなことは常識では…」

「もういいんだ、ラファエラ」

エミリオが、興奮のおさまらない彼女をいさめた。

「わかっている。ここまでは、想定していたことだ」

彼は、謙作の驚異的な結果を目の当たりにしても落ち着き払っていた。

「それよりも、ラファエラ。これから僕と謙作が行なう会話のやりとりを、できるだけ正確に通訳してくれ」

「わかりました」

彼女は、努めて普段の冷静さを取り戻すよう心掛けた。

「見事だよ、謙作」

「ありがとうございます」

「ところで、僕の作品（銃）はどうだった？」

「素晴らしいです。とてもいい銃だと思います」

「そうか、ありがとうございます。それは嬉しいが、社交辞令でなく本心を聞きたいんだ」

「勿論、本心です。お世辞でも何でもありません。本当に素晴らしい銃だと思います。ただ…」

そう言いかけて、謙作は言葉を停めた。

その雰囲気はラファエラの通訳を通さずも、エミリオには伝わっていた。

「やはり、何かあるのだね？」

エミリオの顔つきが変わった。

「ええ…」

「遠慮なく、言いたまえ」

「はい…。では、はっきり言います。実は、その素晴らしいさが最後まで長続きしないのです。最初のうちはいいのですが、撃って行くうちに、ある違和感に疲れを覚えるのです」

「その違和感とは？」

「ほんの僅かにですが、自分の気持ちのすべてが伝わりきれない部分があるのです。この

表現が正しいかはわかりませんが、例えて言うなら、ミクロの世界のズレを感じるのです」
それを通訳されたエミリオの顔が、みるみるうちに驚きの表情に変化していった。

「なるほど…。それは、四挺ともかね？」

エミリオは、慎重に言葉を選びながら質問した。

「はい、とても残念なのですが。この四挺のすべてがそうでした」

それを聞いたエミリオが真剣な眼差しで訊いた。

「実は、君が指摘した通り、その四挺の銃にはそれぞれに違った微妙な癖がある。普通の人間にはわからないミクロの癖だ。君はそれを具体的にすべて言えるかね？」

「はい。おそらく、言えると思います。…まずひとつ目の銃は、僅かですが右方向にブレてきます。二つ目の銃は少し下にブレます。三つ目は同じく左に。そして、四つ目は同じく上にです…」

「君は、それぞれの癖を一発目で気づいたのだね？」

「はい、気づきました。ですから、すぐに二の矢で修正をかけました」

「ふふふっ…」

謙作の答えを聞いたエミリオが、突然笑い始めた。

「わははは…！」

それは、どんどん大きくなり、止まらなくなった。

謙作とラファエラが、あつげにとられてそれを見守っていた。

十六・ 古都にて

京都、東寺―。

田代雄太と祖父の幸吉が、南門から近い境内の一角にある茶屋で休んでいた。

赤い大きな野点傘のかかった長椅子に腰かけて、境内の景色を眺めながら甘酒をすすっていた。

長閑なひと時だった。

二人は、国友町の帰りのついでに立ち寄ったこの京都で早足の名所観光を済ませて、最後の休憩をしていた。ここを出たら、すぐ近くにある京都駅から新幹線に乗って東京方面に戻るつもりであった。

滋賀県にある国友町は、田代幸吉の故郷であった。

六十年前、もしあの時M J社の先代社長である三上則夫の訪問を受けなければ、おそらく一生を過ごしていたであろう故郷だ。

御年八十五歳になる幸吉は、足腰の自由がきくうちに先祖の供養を考え、孫の雄太を同行させたのだ。雄太が、自分の跡をついで銃職人を目指すことになったのも理由の一つであった。子供達は、別の道を選んでいった。だが、孫の雄太は銃造りの道を選んでくれたのだ。そして、彼にはその素養があった。

「いい眺めだわい…」

しみじみと言いながら、幸吉が甘酒をすすった。

「うん、ここに寄ってよかったね」

広々とした境内の中には庭園があり、そこには最大の見ものである五重塔がそびえ立つ。その高い塔と庭園の木々とのコントラストが素晴らしかった。当然のように、二人の視線はその塔に釘付けになっていた。

ところが、その視界が急に遮られてしまった。

すぐそばの南門から入ってきた団体客の一行が、茶屋の前で立ち止まったのだ。

一旦は迷惑だと思った雄太であったが、すぐに気持ちが変わった。五重塔の説明をするその一行の女性ツアーガイドの声が、よく通る声だったからだ。すぐそばに座る雄太は、期せずしてこの塔の解説と一緒に聞くことができたのだ。

まず、塔の高さが五十五メートルであり、それは日本の古塔としては最も高いのだということが分かった。

最初に建てられたのは八六二年だったそうだが、四回の焼失を経験し、現在の塔は一六四四年に江戸時代に再建されたものとのことだ。木造である以上、焼失に対してはどうしようもないが、地震にはめっぽう強いとのことだった。これは、他の五重塔にも共通しているが、塔の中心部に何やら特殊な工法を施すことに起因するらしい。しかも、驚いたことに古よりのこの工法は現代の最先端の建築物にも応用されているというのだ。ガイドの説明が、応用されているその現代建築の具体的な事例の話に及んだ時、客達は大きな歓声を上げて驚き、頷いていた。

一行達が去って、再び五重塔の雄姿が現れた。

その時、田代幸吉は驚いた。

今度は、雄太がその場に立ちつくしていた。

その視線は、五重塔の方に真っすぐに向きながら、ピクリとも動かない。

「おい、どうした。雄太？」

尋常でない雄太の様子を見て、幸吉が訊いた。

だが、返事は帰ってこない。まったく、耳に入っていないようだった。

「おい。大丈夫か、雄太？」

何度目かに、やっと雄太が反応を示した。

「ああ、大丈夫だ。すまん、じいちゃん」

「いきなり、どうしたんじや？」

「いや、いいんだ。それよりも、早く茨城に帰ろう」

そう言うなり、雄太は出口の方にすたすたと歩き始めた。

残った甘酒を頼張ると、幸吉があわててそのあとを追った。

滑り込んだ新幹線の中でも、雄太は無口だった。何かを必死に考えているようだった。というよりも、ぶつぶつと何やら呟き続けるそのさまは、まるで何かに憑りつかれたような様子だった。

上野駅から常磐線に乗り継いで、自宅に着いたのは夜の七時過ぎであった。

雄太は、夕飯もとらずに自分の部屋に向かい、パソコンを開いた。そして、インターネットでその関連記事を探し、読みふけた。必要な箇所を印刷し、メモを取っていく。夜を徹したその作業が終わった時、雄太はそのまま死んだように眠り込んでしまった。

十七・店内での攻防

ミラノの中心部―。

モンテナポレオーネ通りの街かどにあるオープン・カフェ。

休日の謙作とラファエラは、そのオープン・エア席でランチをとっていた。とても天気良かったからだ。

テーブル席のすぐ横の石畳の道を歩行者が行き交う。その横の路上にはラファエラの赤いスポーツタイプのルノーが停めてあった。

「どう、謙作。本場ミラノのピザの味は？」

「うん。勿論、旨いよ。ブレシアから七十キロ走って来た甲斐はあるね」

晴天の陽ざしを受けた謙作の表情は明るく見えた。

「よかったー」

彼のその様子を見て、ラファエラは少し安心した。

「ミラノのピザはパン生地が薄い割に、モツアレラチーズをタップリ使っているのよ」
彼女は、努めて明るく振る舞っていた。

このところのエミリオの工房での謙作は、塞ぎがちに見えた。実際、彼が銃の試射をしている時、明らかにイライラしている場面を何度か目撃していたのだ。それとなく理由を聞いてみたが、彼からきちんとした答は返ってこなかった。少なくとも、今の彼には気分転換が必要だと感じた。そこで、少し離れてはいたが、まったく街の雰囲気が違うミラノまで引っ張り出したのだ。

大切な目的を果たせたラファエラは、もう一つの目的に移ることができた。

「ねえ、謙作。ちょっと、あそこの店を覗いてみたいんだけど」

彼女は、道の向かいにあるブルガリ・ショップを指さした。

父親のジオヴァネッティの誕生日が近づいていたからだ。

「覗いてこいよ。僕はもう少しここで日光浴しているからさ」

「うん。じゃあ、少しだけ。待っていてね」

ラファエラは嬉しそうに、席を立った。8メートルの石畳の道路を渡ればすぐにブルガリ・ショップの入り口だ。

一人になった謙作は、のんびりとその通りの洒落た雰囲気味わっていた。ブレシアでは味わえない世界的な大都会の雰囲気だった。

人通りの賑やかなこの道を通行する車はほとんどない。この通りは、世界でも有数のファッションナブルなエリアである。その歩行者達も洗練された出で立ちの人種ばかりである。街角には、流行のファッションに身を包んだ女性がいる。ショートヘアの黒髪にサンングラスがよく似合っている。いわゆるミラノ・セレブ達が好んで集まる通りなのだ。従って、有名なブランド店が軒を連ねている。

だから、その場違いな車は嫌でも謙作の目に入ってきた。

この通りの雰囲気にな釣り合いな錆びだらけの汚れた商業用のバンが、歩行者達を押し分けるように向かって来たからだ。そしてそのバンは、ピッタリとブルガリ・ショップの前で停まった。

謙作は、嫌な予感を覚えた。

そして、それは当たってしまった。

停まるや否や、車の運転席と助手席から男が降り立った。目出し帽をかぶりながら、ブルガリ・ショップに走り入る。アツと言う間の出来事だったので、通行人も誰もそのことに気づかない。

だが、それを見逃さなかった謙作の動作は、驚くほど機敏だった。すぐに、脇に停めてあるルノーのトランクから散弾銃を取り出す。弾ケースの中の散弾を驚づかみにしてポケットにねじ込む。更に二弾を手際良く銃に込めると、上着の内側に銃を隠しながら８メートルの道路を走り渡る。

その二十数秒の間、謙作は何も考えなかった。謙作は、本能的にそういう行動を起こしていた。無謀であるとかそういったことを考える暇などはなかった。脳が発する命令はただ一つだけであった。ラファエラを守れ、ただそれだけだ。

ブルガリ・ショップのドアを蹴り開けて、瞬時に店内の状況を見極める。

店員はカウンター内に二人、その外に一人。客は五人。イタリア系二人と東洋系二人、そしてラファエラだ。押し入った男二人に短銃で脅されて、皆が店の奥にまとめられようとしているところだった。

「謙作っ！」

散弾銃をかまえ入り口付近に仁王立ちした謙作に向かって、ラファエラが叫んだ。気づいた男達があわてて短銃を謙作に向ける。

「ラファエラ。すまないが、こいつらに通訳してくれ！」

謙作が、散弾銃の銃口を男達に向けながら静かな口調で言った。

「心配しなくていい。僕は、君達の敵ではない。取引がしたいんだ」

ラファエラが、震えながらそれを男達に伝える。

「頑張つて、ラファエラ。もっと、大きな声ではっきりと伝えてくれ！」

謙作にそう促されて、彼女がもう一度同じ言葉を今度は、はっきりと男達に伝える。

目出し帽の男達に反応があった。

「そのまま動かずに、話を聞いてくれ。申し訳ないが、ツキがなかったと思って、今日はこのまま帰ってくれ！」

謙作の視線と銃口が男達を捉えたまま、話が続いた。

「僕は銃の名手だ。もし、君達が変な動きをしたら、二秒以内に君達二人の膝を確実に打ち抜く…。膝を粉々にされれば、死ぬほどの苦痛だ。そして、歩くことさえできずに逃げられなくされた君達は駆けつけてきた警官に捕まり、その後は、辛い刑務所暮らしが待っている」

そして、謙作の銃口が男達の膝付近に向けられた。

「だが、僕はヒーローになるつもりはない。たまたまミラノ警察のトップに知り合いがいる。だから、今回の件はなかったことにできる。君達を捕まえないと約束できる」

その場逃れの作り話ではなかった。謙作は、常日頃ジオヴァネッティに言われている言葉を思い出していた。いつでも自分の力を貸すという、その言葉を。

「だから、運がなかったと思って、今回は、このまま引き取ってくれ。約束する。警察を呼ぶような野暮なことは絶対にしない」

謙作の条件を聞いた男達は顔見合わせた。

彼の言葉に、真実でなければ伝わらない説得力を感じ取ったからだ。

「どうする？」と、小声で一方が訊く。

もう一方は、即答した。

「接近戦では、俺達の短銃よりもあいつの散弾銃の方が圧倒的に有利だ。リスクが大きすぎる。退散だ。外に出るまでおまへは銃を下ろすな」

もう一方は、そう指示すると自分の銃をポケットにしまった。

「信じていいんだな？」

ラファエラを通じて、その男の言葉が謙作に伝わる。

謙作は、黙って男に頷いて見せた。

それを確認するや否や、男達は一目散に店の外に走り出た。

急発進のタイヤの摩擦音を上げながら、汚れたバンが走り去った。

それを見届けると、謙作はラファエラの元へ走り寄った。

「大丈夫か、ラファエラ？」

「謙作っ！」と、声をあげながら、ラファエラが抱きついてきた。

「君は、よくやってくれたよ。どこも怪我をしていないか？」

その問いかけに何度も頷きながら、彼女は謙作にしがみついていた。そのまま、いつまでも離れようとしなかった。

十八・面会

その日の午後、田代雄太は東京の丸の内の一角にある巨大なオフィス・ビルの打ち合わせ室にいた。

生まれて初めて訪れる大都会のオフィスの街の雰囲気は圧倒され、心臓の高鳴りは治まらなかった。大きなビルの広い打合せ室だった。見たこともないような素晴らしいデザインの内装だった。

当然だった。ここは、日本を代表する建築設計事務所の打合せ室である。

延々と壁に並べて掛けてあるこの事務所の作品群の写真パネルは、どれもテレビや雑誌の中で見たことがあるものばかりであった。中でも目を引くのは、やはり完成直後の東京スカイツリーの数々の写真パネルと二百分の一のスケールの模型であった。雄太は、受付嬢に案内された打合せ用のテーブル席から立ち上がって、食い入るようにそれらを眺めていた。

「田代さんですか？」

後ろから声をかけられた。

「はい、そうです」

三十代くらいの男だった。首からかけているネームプレートの名前を見て、それがきのう電話で話した男だと分かった。

「きのうは、お電話でも…。想像していたよりも若い方ですね。ははは…」

そう言っ、気さくな笑顔を浮かべながら男が名刺を渡してくれた。

大岡吉道という名だった。大岡は、想像していたよりもラフな出で立ちであった。加え

て、彼の気さくな雰囲気は雄太の不安感を少し楽にしてくれていた。とはいっても、大岡を含めてここに勤める社員は皆、建設業界のエリート中のエリートであることには間違いないかった。

「田代雄太と申します」

雄太は、運が良かった。差し出すべき自分の名刺を持っていたからだ。祖父の幸吉と故郷の国友町を訪問する際に、挨拶用に作らされたのだ。これで、何とか格好がついた。

「忙しい中、突然に申し訳ありません」

雄太は、精一杯の詫びを入れた。

「ははは…、本当ですよ。僕の時間単価は高いですからね」

「やっぱり…。あの、ちなみにそれはいくら位なんですか？」

「僕の時間単価のことですか？」

「はい」

雄太は、超一流の技術者が、どの位の費用で働いているのかが聞きたくなった。

「ははは…。そうですねえ、ざっと一時間当たりに換算すると、一万円くらいでしょうかね」

「ええっ。そうすると、一日を八時間で計算すると…、は、八万円ですか？」

雄太が、目をぱちくりさせていった。

「ええ、そのくらいにはなりますね。もつとも、八時間で済むことは滅多にありませんけどね。今も、大きな仕事を押し付けられて、ふうふう言ってるやっていますよ」

「大岡さんが扱う仕事と言ったら、やっぱり凄い建築物なんでしょうね？」

「ええ、間違いなく。せいとも国家的な規模のプロジェクトですよ。いや、世界的と言った方が正しいかな。ははは…」

偉ぶるわけでもなく、大岡はさらりとそう言って笑った。

「まあ、僕の自慢話はこのくらいにして、そろそろ本題に入りましょう。実は、僕は今日のように簡単に人には会わないのです。通常はお断りしています。もう次のプロジェクトに入っていますし、会社からも強くそのように言われていますので…」

「は、はあ…」

「スカイツリーの構造を担当していたこの三年間は、マスコミや雑誌の取材だけでも相当な数でしたからね。おそらく、大なり小なりで百社は超えていたと思います。最近、やつと落ち着いては来ましたが…」

「そうなんですか。本当に、すみません」

雄太は、見るからに申し訳なさそうに詫びた。

実際、勢い余ってとんでもない相手に面会を求めてしまったと悔いた。

「いやいや、そういう意味で言ったわけではないんです。それほど状況にもかかわらず、田代さんには会ってみたくなくなった、ということを強調したかったのです。どうか、高慢な奴だと勘違いしないでください。一時間ぐらいなら何とかお話ができますから」

「本当ですか？」

「ええ、本当です」

「いい、一万円ですよ…？」

「ははは…、どうか、もうその話は忘れてください。嘘ではありませんが、冗談で言った

ことですから」

大岡は、笑顔で続けた。

「実は、あなたの所属している会社にとっても興味を持ったのです。失礼ながらきのこの電話の最中に、あなたと話をしながら、パソコンのネットでああなたの会社を調べていたのです。悪く思わないでくださいね。取材を受けることが多くなつてから、そういう癖をつけていたのです。それで驚きました。MJという会社が、競技用の散弾式銃の売り上げが世界のトップクラスなのだということがわかりました。隠れた世界一の会社と言いうのはわが国ではよくあることですが、まさか銃の分野にもそれがあつたというのには、正直驚きでした。それから…」

ここで、大岡は一旦話の呼吸を置いた。

「それから、あなたの言葉にグツと来たのです」

「僕の言葉に…、ですか？」

「ええ、そうです。あなたは、話の最後に「世界一の銃を造る為だ」と、おっしゃいました」

「ははは…。言ったかもしれませんね」

雄太は照れた。

覚えてはいないが、たぶんそう言ったのだろう。話の熱がこもった時によく出てしまう言葉だからだ。

「それで、世界一のスカイツリーを手掛けた僕としては、放っておけない気持ちになりました」

「そ、そうですか。ありがとうございます！」

雄太は感謝した。

なにはともあれ、熱意だけは伝わっていたようだった。

「さっそくですが、田代さん。きのこの話の続きを聞かせて下さい」

「は、はい。ええと、まだ一昨日のことなんです…。じいちゃん…、いや、祖父と一緒に京都の東寺に行つたんです。そこで見たのが…」

雄太は、そのいきさつを一生懸命に話した。

そして、そこから導かれた「ある閃き」について説明した。大岡は、親身になってその話に応えてくれた。そのうちに、逆に大岡の方からの質問が多くなつた。その時の二人にとって、一時間はあまりにも短かつた。

結局、二人の話は結論には遠く至らず、大岡が週末を利用して茨城のMJ社に訪問して話の続きを行うことになった。それは、大岡からのたつての希望でもあつた。

十九・和食店の店主

ラファエラの真つ赤なルノーが国道を南に降りて、ベルガモの市街に入った。

「あれ、ここで降りるの…、どこへ行くの？」

ラファエラに連れ出された助手席の謙作が、不思議そうに尋ねる。

ミラノまでは、まだ三十キロほどあるからだ。

「勿論、食事に行くのよ」

ラファエラが涼しい笑顔で答える。

「さつき君が言っていた連れて行きたいお店って、ミラノにあるんじゃないの？」

「いいえ、この街にあるのよ」

「そうか。よく行く店だと言っていたので、てっきりまた君の地元のミラノにあるのかと思っていたよ」

ベルガモという名の古くからあるこの街は、ちょうどブレンシアとミラノの中間あたりに位置していた。

「ほほほ…、まさか。さすがに、それはないわよ。この間、あんな事件に巻き込まれたというのに、またそのミラノに行くと思ったの？」

「うん。僕は、別にかまわないと思っていたけど…」

「まあ、あきれた。私もその気(け)はある方だけど、謙作のその凶太さには脱帽するわ。ほほほ…」

ラファエラは、すっかり立ち直っていた。

本来なら大事件に発展し、被害者の心に大きな傷となって残るかもしれない事件を、謙作の並外れた機転と勇気が、単なる笑い話の範囲に収めさせていた。ただ、その一件でこの二人の距離が以前にも増して近くなったのも事実であった。

しばらく走ると、車は街外れの一軒家の前で停まった。

慣れた様子で彼女は、入口へ向かう。

「えっ、ここは…？」

謙作が驚くのも無理はなかった。

目の前に現れたのは、左右に松の木を配した純日本風の木の造りの門だったからだ。

看板の代わりなのだろうか、表札をふた回りほど大きくしたような板に「横浜庵」とあった。

「和食の店なんだ…」

「ええ、そうよ」

門をくぐって中に入ると、更に驚かされた。

決して料亭のような手の込んだ重厚さではないものの、数寄屋造りの建物も竹林や梅の木を配した庭の造りも、完璧な純和風だったからだ。昨今の世界的な日本食ブームの状況を考えれば、取り立てて驚くことではなかったのかもしれない。今や「和食」は、独立したひとつの文化として世界に認められようとしていた。そして、そのムーヴメントは、寿司や天ぷらという和食の定番に留まっていなかった。それは、ミシュラン・ガイドで星の数が一番多い栄誉を得ている都市が、東京であることから伺える。今や、世界中の都市には様々な日本食の店が繁盛し次々と出現している。

だが、この店がよくある外国人による「日本風」のコピーでないことは、すぐに証明された。なぜならば、謙作自身が日本にいと錯覚してしまうほどの佇まいだったからだ。

「凄いな。完璧な日本家屋だ…」

それは、造型されたものではなく、生活の息吹を感じるものだった。

「驚いた？」

「うん。まるで、日本にいるようだ」

「このオーナーに会えば、もっと驚くわよ」

そう言うラファエラは、慣れたように玄関の引き戸を開けて建物の中に入る。玄関の中も、靴を脱いで上がる完全な日本式になっていた。

「呼んでくるから、ここで待っていてね」

彼女はそのまま靴を脱いで揃えると、すたすたと廊下の奥に入って行ってしまった。

「ちよ、ちよっと。君！」

取り残された謙作は、その場で躊躇していた。

どうしていいのかわからなかった。

すぐに、奥の方で女性同士の笑い声が聞こえた。

それから、彼女が現れた。一緒に隣にいるのは、七〇八十歳くらいの年配のイタリア女性だった。

「紹介するわ、謙作。このオーナーのロッシーニさんよ」

「はじめまして。三上謙作です」

と、謙作が拙いイタリア語で挨拶をすると、

「よく、いらつしやいましたね。カーリーナ・ロッシーニと申します」

年配のイタリア女性は、見事な日本語で返してきた。

ラファエラが言ったように、謙作は三たび驚かされた。

「日本語が話せるんですか？」

謙作が日本語でそう訊くと、ラファエラはカーリーナと顔を見合わせて笑った。

「うふふ…。謙作が驚くのも当たり前よね。実は、ロッシーニさんは昔、在日イタリア大使館で日本語の通訳をやっていたの」

「なあんだ、道理で…」

「ついでに言うと、ずっと私の日本語の先生をしていただいているのよ」

「そういうことか…」

それを聞いた謙作は、ラファエラ達の関係の親しさと、彼女の日本語が実践的で完璧な理由がわかった。

理由がわかった。

「ほほほ…。大使館勤めは随分と昔のことですけどね。そのお話はあとでゆくりと…」

さあ、お食事の用意ができていますよ」

通されたのも、和室だった。

個室というよりは居間のような造りで、二十畳ほどと広く、縁側を通して見事な庭を望むことができた。庭園と表現するほどの大きさではないが、手入れがよく行き届いたまっさしく日本の庭だった。

出された料理も、間違いなく日本の味そのものであった。

「旨い！」

そう叫んだきり、それからの謙作はろくに会話もせず、ただただ出てくる料理をむさぼった。

久しぶりの和食だったこともあっただろう。だが、それ以上にとにかく美味しかったのだ。それは、料亭や高級日本料理店出されるような手の込んだものではない。どちらかといえば、家庭料理に近かった。それが、かえってよかったのだ。脇目も振らずに、とはこういうことを言うのであろう。謙作は、二人の存在を忘れてしまったかのようにそれら

の料理を夢中で食べ続けた。

二人のイタリア女性は、自分の食事もそこにその光景を笑顔で見守っていた。

「ごちそうさまでした」

食べている最中は、せいぜい頷くことしかしなかった謙作が、やっとちゃんとした言葉を発した。

「ありがとうございます。こんなに旨い料理は、久しぶりです」

謙作は、胃も心も充分過ぎるほどに満たされていた。

「ほほほ…、それはよかったわ」

カリーナがにこやかに言った。

「料理を作ったのは、日本の方ですよね？」

「いいえ、私が作ったのですよ」

「ええっ、本当に？ …全部、あなたが作ったんですか？」

「ええ、そうですよ。料理人を雇って和食のレストランのようなことをやっていたのは昔のことで、今はここには、私一人しか住んでおりませんのよ」

「そうなんですか…。 ロッシーニさんは日本語だけではなくて、日本の料理も完璧にできるんですね？」

「ほほほ…、ありがとうございます」

「ロッシーニさんは、昔、日本で生活していたことがあるのよ」

ラファエラが説明した。

「そうなんだ。それで、こんなに…」

謙作は納得した。

実際に日本で生活したことのある人間にしか出せない料理、出せない味だった。

二十・協力者

この週末も、MJ社の工房には大岡吉道の姿があった。

このところの大岡は、会社の休みの日になると決まって東京の自宅から茨城県の友部にあるMJ社を訪れていた。もはやそれは、趣味の領域を超えていた。目的は無論、世界一の競技銃を開発する為である。

初めて田代雄太からそのアイデアを聞かされた時、大岡は驚愕させられた。

高さ634メートルを誇る東京スカイツリーの技術を、せいぜい1メートルほどの長さの散弾式銃に取り入れようというのだからだ。

だが、基本的な考え方については納得ができた。銃にとっての最大の敵は、発射時の振動だからだ。即ち、それは弾を撃ち出す為の火薬の爆発によるものだ。ある意味、理想の銃とはその発砲時の振動が限りなく少ないものということになる。言うまでもなく、その振動が撃ち手の狙いを狂わすからである。

祖父の田代幸吉と訪れた京都の東寺の五重塔の構造に関するツアーガイドの説明を横で聞いていた時に、雄太はそのアイデアを思いついたのだ。その技術を銃にも活かすことができないものなのかと。

その時、ガイドの説明で、応用されているその現代建築の具体的な事例として名前が挙がったのが、なんと、あの東京スカイツリーだった。これには、雄太も驚いた。帰宅するなり、その技術の内容とそれを設計した会社を調べた雄太は、ダメもとの気持ちでそれを設計した会社に電話を入れてみた。そして、運よくその設計者の大岡と出会うことができたのだ。

日本各地にある五重塔は日本独自の建築物である。そして、火事や台風による倒壊はあっても、地震による倒壊の例は残っていないのである。そのことは、十八年前の阪神淡路大震災の際に、兵庫県内にある十数塔の多重塔が一塔も倒壊しなかったことを見ても明らかであった。その理由は、古来からある独自の免震構造にあった。塔の中心を独立して貫く心柱（しんばしら）が、塔全体の揺れを抑えるという工法である。

そして、この免震技術を応用した東京スカイツリーも、二年前の東日本大震災においてもびくともしなかったのである。

大岡の参加は劇的な効果をもたらしていた。

元来、散弾銃の製作とは「手工業」である。即ち、一挺、一挺が銃職人の技と経験によって造られるのである。これは、洋の東西を問わない。あのイタリアでさえも例外ではない。

大岡は、そこに「工業科学」を取り入れたのである。

彼は、まず銃の発射時の振動のメカニズムの解明から取り組んだ。振動を分析する測定機材を知り合いの会社からMJ社の工房に取り寄せ、データの収集を始めた。工房の片隅には銃の発砲実験をするスペースがある。組み立てが完成した銃は、最後段階にそこで実際に実弾を詰めて発砲のテストをするのである。

MJ社の役員である玉木恭介も、門外漢の大岡のやり方にもろ手を挙げて賛同し、振動の測定用にそのスペースを提供してくれた。もともと他の製造会社の出身の玉木も、銃の製造に科学的なアプローチを加えてみたいと常々考えていたのだった。

「なるほど、振動の流れはこうなっているんですか！」

大岡が操るパソコンのモニターを見ながら、雄太が感嘆の声を上げた。

「うん。こうやって分析してみると、MJの造る銃の傾向は、かなりわかってきましたね。できれば、今度は外国製の銃の振動を調べてみたいのですが」

「そうですね。やりましょう。社長やじいちゃんに頼んでみます」

「できるだけ、たくさんお願いします。特に、優秀と言われている銃を集めてください。洋の東西を問わず、大手の自動車会社はライバル会社の新車が出ると、それを何台か買ってバラバラにして分析するといいます。僕達もそれに習いましょう」

「はい。知り合いのお客さんにも貸してもらえるように頼んでみます」

「うん、頼みます。試験サンプルは多ければ多いほど助かります」

「分析が終わったら、今度はどこを改良していけばいいのかが具体的にわかりますね」

「そうです。いよいよ、雄太君のアイデアの出番ですよ」

「スカイツリーの心柱工法の応用に入っていくんですね」

「うん、そうです。それに、スカイツリーの免震工法は実は、心柱だけではないのですよ」

「他にもあるんですか？」

「うん。下部には衝撃吸収ダンパーの工法も用いているのです。それについても応用の余

地がありそうです」

「衝撃吸収ダンパー……？」

「うん。これは、けっこう以前からある工法ですよ。そう難しく考えなくていいのです。衝撃を和らげるクッションみたいなものをかますのです」

「へー、それもなんか使えそうですね。是非、それも教えてください！」

「勿論ですよ！」

大岡は燃えていた。二人は、最強のコンビになろうとしていた。

二十一・抱えていた悩み

「こちらで、お茶にしましょう」

縁側でカリーナが声をかけた。

食後の茶も、当然のようにエスプレッソではなく日本茶であった。

「もうひとつ、謙作を驚かすことがあるのよ」

ラファエラが言った。

「ははは…、今度は何だい？ もう、何を聞いても驚かないと思うけどね」

満腹のお腹を撫でながら、謙作が笑った。

「どうかしらね…。ロッシーニさんのお父様は、私の父と同じように、クレー射撃のオリンピックの金メダリストなのよ」

「ええっ、本当に？」

やはり、謙作は驚いた。

「うふふ…。やっぱり驚いたわね」

ラファエラが微笑んだ。

「ということは、君のお父さんよりも前の大会だよね？」

ラファエラの父ルキアアーノ・ジオヴァネッティは、モスクワとロサンゼルスの大大会で連覇を果たしていた。

「ほほほ…、そうですね。私の父のガリアアーノが金メダルを獲ったのは、それよりもずっと、ずっと前のメルボルン・オリンピックです」

カリーナが笑いながら答えた。

「メルボルン大会ですか…」

正直なところ、謙作にはピンと来ていなかった。

モスクワやロサンゼルスの大会は何とか知識として持ち合わせてはいたが、自分が生まれるそれ以前の大会ということになると、ほとんどお手上げだった。

「ご存知ないのは、当然ですよ。何せ、一九五六年のことですから。ほほほ…」

「そんなに前ですか…」

「そうよ。だから、ガリアアーノさんには、私の父も個人的に随分とお世話になったのよ」
そうラファエラに説明された謙作は、彼女達の関係が想像以上に親密であることを悟った。

「そうか…。そうだよ。同じ金メダリストとしていろいろと相談事にも乗ってもらえた

「んだろうね…」

「ええ。金メダリストにしかない、私達にはわからない部分での共通の悩み事も、随分あったと思うわ」

「いいなあ…」

それを聞いた謙作が、思わず呟いた。

「ほほほ…。謙作さんも今、何かの悩みを抱えられているのですね？」

カリーナが柔らかい口調で、しかし謙作の心の内をきちんと見抜いて訊ねた。

「はい、実はそうなんです…」

謙作は、自分でも驚くほど素直にそう答えていた。

「それは、射撃のことなのですね？」

「はい、そうです」

「私でよければ、話してみてごらん下さい」

カリーナのその言葉には、不思議な安心感があつた。

「はい…。実は、最近気持ちよく撃てないんです。とても、イライラするんです。自分では制御できないほどに…」

謙作が、吐き出すように言った。

「まあ、それは問題ですね。射撃競技は、気持ちの安定が一番大切ですからね」

そう言つてカリーナは、ラファエラの方を見た。彼女は、そうなのだと思つて頷いて返した。

「とても困っています。以前は、まったくそういうことはなかったんですが…」

「原因に、何か心当たりがあるのですか？」

カリーナの問いかけに謙作はしばらく考えて、そして答えた。

「たぶん、あの時から始まったんだと思います。イタリアに着いてすぐに、リッチーニさんに入社試験だと称して銃の試し撃ちを頼まれた時です」

「リッチーニさんって、エミリオのことですね？」

「はい、そうです。あれ以来、銃を撃つ時に、常にその銃の癖の粗探しをするようになってしまったんだと思います」

「ということはつまり、純粋に射撃を楽しむことができなくなってしまったということですね？」

「そうなんですよ、ロッシーニさん！」

謙作は、つい大きな声で返してしまった。

「あ…。すみません。つい…」

「ほほほ…。いいですよ。続けてください」

「はい…。今の工房内での僕の仕事は、銃の最終チェックなんです。工房で完成した銃の試射をするんです。エミリオさんが言うには、それは、僕にしかできない仕事なんだそうです。ですから、与えられた銃の癖を探すのは、やらなくてはならない工房での僕の役割なんです。ですが、結局それは、チェックという名の粗探しになってしまっていたんです。エミリオさんが言うように、僕には普通の人のわからないレベルの銃の癖がわかってしまふんです…」

「つまり、今のあなたは大好きな銃に対して、無理やり粗を探さなければならぬという

自分自身にやりきれなさを感じていらっしやるのね？」

その通りだった。彼は、その二つの狭間で苦しんでいたのだ。

天才であるが故の悩みなのだ。

最近そのことに気づいたラファエラは、男爵とのスペインの同行を断って謙作の力になるろうと思った。だが、気分転換の為に訪れた先週のミラノでは思わぬ事態に巻き込まれてしまい、結果的に彼女の目的は、まだ道半ばの状態だったのだ。ラファエラは、妙案を思い立った。それが、ここへ連れて来ることだった。

「はい。きつと、そうなんだと思います。どんな銃にも大なり小なり癖はあると思います。

それは仕方ないことです。それは、わかってはいるんです。だから、僕もつと割り切った気持ちで対処すればいいのかもしれない。ですが、なかなかそれができないんです……」

「そして、イライラしてしまうのですね？」

「そうなんです……」

謙作は、肩を落としました。

「健作さんご自身は、どうすれば、解決できるのだと思いますか？」

「その最終的な答えは自分でもわかっているんです。自分に合う銃と出会えば、絶対にそういう気持ちにならないでしょう。それは間違いありません」

「確かに、おっしゃる通りでしょうね」

二人は、納得したように頷き合った。

「ええ。ですが、銃造りの修行中である今の僕は、そのことまでは考えてはいけないうんです。それを考えていいのは修行に目途がたって、本格的な射撃の修行の方に移ってからなんです」

謙作は、イタリア行きを男爵に相談し、自身が宣言した時のことを思い浮かべていた。

「ということは、銃造りの方の修行中の今は、嫌でも銃の癖探しの仕事と向き合わなくてはならないというわけですね……」

「そうなんです……」

しばらく、三人に沈黙が流れた。

「ラファエラさんは、何かいい考えがおありなの？」

カリーナが、訊いた。

「根本的な解決にはならないかもしれないけど……」

ラファエラが遠慮がちに言った。

「何でもいいから、おっしゃってみて」

「ええ、では……。今の謙作の癖探しの仕事は、仕方がないと思うの。修行の一環として自分の為にやっていることなのだから。でも、むしろそれを前向きに考えれば、きつと謙作にとってプラスになると思うの……。それを、きつと謙作が言った自分に合った銃と出会う為の「準備段階」だと思って受け入れればいいと思うのよ……」

「準備段階……。それは、どういう意味だい？」

「つまり、そうやって多くの癖のある銃を知れば知るほど、逆に、いずれ自分に合う銃がどんなものなのかがわかってくると思うのよ。そう考えれば、やっていることのすべてが決して無駄ではなく、意味のある行為だということになるわ」

「な、なるほど。そう考えればいいのか。確かに、一理あるな…」
謙作は、大きく頷いた。彼女の説明には、説得力があった。

「ほほほ…。やはり、訊いてみるものね。ラファエラさんのその発想は、とても素晴らしいわ」

カリリーナが彼女を称え、そして続けた。

「私からも、アドバイスをふたつほどさしあげましょう」

「ええ。是非、聞かせてください」

「まず一つ目は、あなただけのパートナーを作ることでしょ」

「僕だけのパートナー？」

「そうです。大業を成し遂げた偉大なプレーヤーには、必ず良きパートナー、つまり、偉大な銃の製作者が存在したのです。ラファエラさんのお父様のルキアーノ・ジオヴァネッティには、エミリオ・リッチーニがいました。私の父ガリアーノには、シーザー・カブリーニがいました。そして、あの男爵には、あなたのお父様であるスイニョーレ・三上がいえるようにです」

「えっ、父をご存じなのですか？」

意外な人物の名前が、意外な場面が出た。

「勿論ですよ。クレー射撃の世界にかかわる人間で、MJ社のスイニョーレ・三上と、彼の工房にいるマイスター・田代の名前を知らぬ者はいませんよ」

カリリーナは、当り前だと言わんばかりに言った。

「そ、それは、どうも…」

謙作は、自分の父と田代幸吉の想像していた以上の存在の大きさを、意外な形で認識することになった。父親の三上恵造が世界的銃製造会社・MJ社のオーナーであること、そして、それを支えているのが名匠と謳われる田代幸吉であることは、当然のごとく広く海外に知れ渡っているのだった。この時謙作は、そのことが客観的に分かっただけでも、日本を飛び出て良かったと思った。

「それで、謙作さんには、そのパートナーになりうる方はいらっしゃるのかしら？」

「そ、それは…」

そう訊かれた謙作は、すぐに田代雄太のことを思い浮かべた。

「はい。います！」

謙作は、きつぱりと言い切った。

「ちよつと、頼りない奴ですが、銃造りの感性は並外れています。きつと、隔世遺伝つてやつだと思います」

「隔世遺伝、といますと？」

「はい。今あなたがおっしゃったそのマイスター・田代の孫になります」

「まあ、それは素晴らしい」

「ええ。でも、それ以上にそう思えるのは、彼の世界一の銃を造るのだという熱い意気込みです」

「それは、何よりだわ。きつとその方は、あなたに合う銃を造ってくださいますよ」

カリリーナは彼のその話を聞いて、きつとそのパートナーが、謙作にとって最高の銃を造ることができる人間だと確信した。

「ま、まあ…。実際、あいつがどこまでそれを実現できるかはわかりませんが。ただ、熱意と血筋だけは間違いありません」

勢い余って雄太の話しを出してしまっただが、才能の豊かさはともかく、実際の彼の製作者としての力量は未知数であった。

「ほほほ…。では、その銃がいずれ完成するのを信じるとして、そうなる、それまでは例のイライラをどう解消していくかということになりますね」

「ま、まあ…。いつになるかは別として、そういうことになりますね」

「では、二つ目のアドバイスとして、私もそのイライラと上手に付き合う方法をお話ししましょう。あなたにとって参考になる方法かどうかは分かりませんが…」

「かまいません。とにかく聞かせてください」

「では…。以前ある知り合いが、謙作さんと同じくらいの年齢の時に同じ悩みを持っているたのです。その方は、クレー射撃の選手ではなくビリヤードの選手でした」

「あの玉突きビリヤードですか？」

「ええ。その方もかなりの腕前だったそうです。でも、修行中に使っているキューにイライラすることが続いて、ある日、自分の師匠にそのことを相談したのだそうです」

「その師匠さんからは、何かアドバイスがあったのですか？」

「はい。「キューと話をしろ」と、言われたそうです」

「キューと話を…、それだけですか？」

「ええ…。残念ながら、それだけだったそうです」

「それで、その方はどうされたのですか？」

「その言葉の意味を一生懸命に考えたそうです。でも、その時はとうとうそれを理解することはできませんでした。それで、その方は選手として生きることを諦め、その師匠の元を去ったそうです」

「そうだったんですか。そうすると、その話の続きがあるんですか？」

「ええ、勿論です。このまま終わってしまったのは、参考にはなりませんからね…。その方が、師匠の言葉の意味を理解できたのは、かなり後になってからだったのです。その後、彼は、正規の選手ではなくプロのビリヤード師になったのです。プロと言っても、どちらかといえばショー的な要素の強い見世物のようなものです。それだけではなく時には、酒場などを渡り歩いて「賭け」を専門にした裏稼業といった類のことにも手を染めていたのです」

「へー、何かギャング映画に出てきそうな感じですね」

「ほほほ…。そうですね。そういう場ですと、時として、使い慣れた自分のではないキューで勝負をしなければならぬ場面もあったそうです。その時に、彼は初めて以前師匠から言われた言葉の意味が理解できたそうです」

「それは…？」

「初めて使うキューを手にして勝負に臨んだ彼は、気が付いてみたら、必死にそのキューと会話をしていたそうです」

「知らないうちに、そのキューと話をしていた…？」

「そうなのです。窮地に追い込まれたその時に、彼は痛感したそうです。自分の使うパートナー＝キューが、いつも自分にとってベストなもの、良いコンディションであるとは限

らない。どんなキューにも癖や性格がある。その場合は、できるだけ心を通わせて、相手を知り、最善を引き出すしかないのだと…」

「そ、そうか…。つまり…」

そう言っただけ謙作は、生唾を飲み込んだ。

話の核心の部分が、うっすらと見えてきたからだ。そして、それは今の自分にとって、一番欠けていたものになるはずであった。

カリーナから、答えが告げられた。

「若い修行中の身であるうちは、相手を選ぶなどということですよ。謙虚な姿勢になって、自分から相手に歩み寄り、ということですよ。特に、若いうちから才能に恵まれた力のある人は、ともすればその才能を過信し、傲慢になりがちですよ」

「ううっ…」

知らず、謙作の口から小さな嗚咽が漏れていた。

カリーナは、かまわず続けた。

「戒めなければならないのは、自分の未熟さを認めずに、すべてを相手〓キューのせいにしてしまうことです。当時の彼の師匠は、自分の才能に溺れがちな若きその弟子に、それを伝えたかったのです」

「そ、そうか…」

それは、想像した通りの答えだった。

「つまり、未熟な今の自分は常に謙虚であれ、ということですよ。相手を許す、という心構えです。相手に接する時は、謙虚に、おおらかな気持ちで会話をするように接しなさい、ということですよ」

カリーナが言いきった。

「…その場合の「相手」とは、その方にとっては、キューであり、僕にとっては銃ということなんですよね…」

ため息をつくように謙作が言った。

「ほほほ…。当てはめれば、そういうことになるかもしれませんがね」

「ロッシーニさん」

謙作の目の色が変わっていた。

「はい？」

彼女は優しく微笑んで返した。

「目が覚めました。僕は…、僕は、傲慢になっていました。自分の射撃に自信を持ちすぎて、すべてを銃のせいにしていました！」

「まあ、随分と物分かりがいいこと…。ほほほ…」

カリーナは、笑ってその場を和らげた。

「あくまでも、これは参考意見ですよ。そういうこともあったということです。だからといって、すべて今のあなたが悪いという意味でも、こうした方がいいということでもありません」

「は、はい」

「あなたは、あなたなりのやり方で問題を克服して行けばいいのです」

「わかりました」

実った稲穂のようにこうべを垂れた謙作は、しばらくして、ふと思いついたように訊ねた。

「…ちなみに、クレー射撃の世界でそんな風に銃と会話ができる人が実際にいるのでしょうか。できた人などいたのでしょうか？」

「ええ。一人だけいました」

「それはやはり、お父上のガリアーノさんですか？」

「いいえ。残念ながら、父はそこまでは至りませんでした。ついでに言うと、失礼ながら、ラファエラのお父様でもその領域にはいけませんでした。それができたのは、この半世紀間でただ一人だけです。…それが誰だか、もうおわかりでしょうか？」

「男爵、ですね：？」

「ええ、彼だけです」

出るべき人物の名が、出るべきところへ出た。

「やはり、あの人は特別なんだ：」

噛みしめるように、謙作が言った。

「ほほほ…。勿論、彼は特別です。それは世界中の誰もが認めていることでしょう。ですが、だからといって、あなたにもそうできる可能性はあるのですよ」

そう言ったカリーナに対して謙作は、

「いやあ、僕なんかは、とてもそんな…」

と、苦笑いをする。

「いいえ、ありますよ。きつと！」

どういう根拠で言っているのかは定かではないが、カリーナが真顔で念押しをした。

「ははは…。ありがとうございます」

謙作は少し照れくさくなって、庭の方に目を移した。

「おおらかな気持ちになって、銃に話かけるのか：」

おもむろに立ち上がった彼は、縁側の端に座りなおして、庭に向かって両足をぶらつかせた。

「なんか、落ち着くなあ：」

庭の景色を眺めながら、謙作が呟くように言った。

そのうちに、彼の頭が左右にフラフラ揺れ始めた。大きく傾きかけた時、ラファエラが歩み寄って、彼の頭を座った自分の膝の上に乗せてやった。謙作は、そのままスーツと寝息を立て始めた。

「ほほほ…。寝てしまったのね？」

カリーナが、小声で笑った。

ラファエラは、カリーナの方に振りかえって、微笑んで頷いて見せた。幸せそうな笑顔だった。

「きつと、安心したのね」

「ええ…。単身で言葉の通じないイタリアに来て、相当ストレスもあったと思います」

「それに加えて、例の「癖探し」のイライラが続いていたのね？」

「はい。側で見ても、とても悩んでいるのがわかりました。だから、ついあなたに相談を…。でも、ここに連れてきて本当に良かった。ありがとうございます、ロッシーニ

さん…」

肩の荷を下ろしたようにそう言ったラファエラは、泣いているようにも見えた。

「札を言わなければならぬのは、私の方ですよ。絶妙のタイミングで彼をここに連れてきていただきました。ほほほ…、それにしても、本当に死んだように眠っているわ…」

そう言って、カーリーナも謙作の寝顔を覗いた。

「でも、ロッシーニさん。私、あなたに少し嫉妬してしまいました」

謙作の寝顔を眺めながら、ラファエラが言った。

「あら…。どうして？」

「だって、謙作は、悩んでいることを私には隠し続けていたのに、ロッシーニさんにはあんなにスラスラと胸の内を…」

「あら、まあ…。ほほほ…」

それを聞いたカーリーナが笑った。

しばらく笑ってから、ラファエラの顔を見据えて言った。

「ラファエラさん。嫉妬したのは、私の方なのよ」

「ええっ、それは何故ですか？」

「謙作があなたただけには黙っていたのは、あなたが彼にとって、大切な守るべき存在だからよ」

「そ、そうでしょうか…？」

「ほほほ…、間違いないわよ。私の愛した人もそうだったから、よくわかるの…。当時の私はまだ若すぎて、そのことに気付いてあげられなかったから、別れてしまったけど…。でも、後になってそのことがよくわかったのよ」

「隔世遺伝、ということなのですね…」

「ほほほ…、そういうことね」

奇しくも、同じように日本人の男性を愛してしまった二人のイタリア女性が、満足そうに深く眠る謙作の寝顔を母親のように見守っていた。

二十二 突然の棄権

カナダ、ケベック州にあるその射撃場は、広大な平原の中に造られていた。

この射撃場には、正面にバックストップはない。空に向かってのいわゆる撃ちっ放しの形式である。北米大陸やオーストラリアのには、このタイプのクレール射撃場が多く存在する。

そして、満席に埋まった観客席は、固唾をのんでその決勝戦の成り行きを見守っていた。その観客席もこの試合の為にわざわざ増設されたものであった。通常の試合ではこれ程の人は集まらない。男爵が出場するとわかった為に仮設のスタンドを併設する必要があったのだ。仮設の駐車場も増やされた。カナダ国内はもとより、全米中から観客がやって来るからである。

男爵が、クレール射撃の公式な試合に出場するのは、久しぶりのことであった。最近では、ほとんどのスケジュールを、母国の大震災の支援をする為のチャリティの大会の方に切り

替えていたからだ。引退の噂がささやかれ、いつそれが彼のラストマッチになるかもしれない状況にあつての公式戦の出場である。世界中のファンにとっては、見逃せない試合なのだ。

そして、今回も男爵の優勝は目前であった。

すでに第五ゲームも終盤に入っていた。この日も男爵は、九十九パーセント以上の命中率を誇っていた。無風の状態で彼が的を外すことはなかった。あるとすれば、突風などの自然現象があつた場合のみである。この試合でも、125点満点中、一発しか外していない。この決勝の対戦相手である地元カナダの選手に圧倒的な大差をつけての優勝は、確実に言つてよかつた。

だが、試合終了を目前にして、それは起こつた。

男爵が、次の射撃の為に競技用のベストのポケットから散弾を取り出した時のことだつた。取り出した二発の散弾を銃に込めようとした時、彼の動作がピタリと止まつた。そして、彼は審判員に中断の合図を送つた。

クレール射撃の競技では、プレー中に中断することは珍しくない。銃の不具合が生じたり、発射されたクレールそのものが被弾する前に割れていたりすることがあるからである。

しばらくして、彼は競技エリアから出て銃をラックに立てかけると、そのまま関係者席の方へ歩き出した。場内がざわつき始めた。

「どうかされましたか？」

女性秘書が、焦つて歩み寄る。

前回のバルセロナに続いて、今回も彼女が引き続きラファエラの代役をまかされていた。

「うむ。たいしたことではない。すまんが、会長をここへ呼んできてくれ」

彼女に耳打ちをされ、関係者席にいたカナダ・クレール射撃協会の会長が、あわてて席を立て男爵の元へ走り寄つた。その様子を見ていた場内が更にざわついた。

「男爵、いかがされました？」

「会長。大変申し訳ないが、この試合を棄権してもかまわないかね？」

「ええっ、棄・権…？」

会長はうるたえて訊きなおした。

「いつ、今からですか？」

「ええ。中途半端で申し訳ないが、この埋め合わせは考えますので…」

「そ、それは、あなたがどうしてもとおっしゃるのであれば…。ただ、あともう少しで勝利が目前というところなのに、どうしてなのですか？」

会長の疑問は、当然であつた。

「理由はまだ、申し上げられません。とにかくお願いするのみです」

「も、もしや。私どもの方に、何かいたらない点でも…？」

「いえ、それは断じてありません。別の個人的な理由です。その点は、どうかご安心ください」

「そ、そうですか。でしたら仕方がありません…。しかし…」

明らかに会長は当惑していた。

この世界で男爵がやらないと言ってしまったえば、それを他人が覆すことが絶対にできないことは、会長も充分すぎるほどわかっていた。

「せっかく、これだけの方が見に来て下さったのですから、何か外向け用の理由を考えなければなりませんね。プレス用にも、観客の皆さん用にも」

男爵こと近衛慎一郎は、会長のその気持ちを汲んだ。

「は、はい。そうしていただければ助かります」

「では、まず会長が先に状況を発表してください。その後、私が直接皆さんに説明をいたします」

「わ、わかりました：」

アナウンス用のマイクを手に会長が観覧席に向かって話し始めた。千五百人ほどの観客席が静まり返り、固唾をのんだ。

「今回の競技の運営責任者として、ご観覧の皆様にご説明をさせていただきます。ただいま、決勝戦を競技中のバロン・近衛選手よりこの競技の棄権の申し入れがあり、私はそれを受理いたしました」

それを聞いた場内が、当然のように騒然となった。

観客達は、いったい何が起こったのか、と口々に叫ぶ。

「皆さん、お気持ちわかりますが、どうか、ご静粛に……。その理由について、男爵ご本人から直接皆さんへの説明があります！」

慌てた会長が、それを叫ぶと、再び場内に静寂が戻った。

異様な静けさの中、慎一郎がマイクを手にした。

「こんにちは、皆さん。私は、荣誉あるこの競技に出場させていただいて、大変光栄に思っております。そして、これだけ多くの皆さんに見に来ていただいていることにも大変ありがたいと感謝しておりました。久しぶりの公式戦でしたので、当然、私もベストを尽くして競技に臨みました。しかし、残念ながら競技の途中に最善を尽くせない事態が発生し、途中棄権という決断をさせていただきました。断腸の思いではありますが、最善を尽くせない状況での射撃は、私の流儀に反します。その点をどうかご理解ください：」

場内が少しざわついた。納得できたような、できないような複雑な反応であった。並の選手が同じことを言えば、腹も立つ。だが、あの男爵がそう決断したのであれば、諦めるしかないというのが大半の反応であった。

慎一郎は、彼らのその反応を予想していた。そして、説明を続けた。

「もし：」

彼が口を開くと、再び静寂に戻る。

「もし、皆さんの中で希望される方がいらっしゃれば、の話ですが。お詫びのしるしとして、予定にはありませんでしたが、表彰式が終わった後にサイン会を行うことにいたします。勿論、無料です」

これを聞いた場内がこの日一番湧いた。

勿論、誰もが笑顔である。場内の空気は一転した。

「会長、こんなことしかできませんが、これでよろしいですか？」

そう言って、慎一郎が会長にマイクを返す。

「も、勿論です。よろしいどころか、皆、大喜びですよ！」
会長も興奮して喜んでいた。

「チャリテイ・マッチでもないのに、そこまでしていただいて！」
「いや、私のわがままの、せめてもの償いです」

一時間ほどのち、観客達との約束を時間をかけて丁寧に果たした慎一郎は、協会の関係者達との懇親会はキャンセルして、急ぎ空港へ向かった。

二十三、ある違和感

近衛慎一郎は、単身カナダからブレシアに戻った。

だが、自宅には行かずにそのまま同じ市内にあるベレッタ社の工場へ向かった。ベレッタ社は、世界でも屈指の銃器製造会社である。

慎一郎は事前にその社長に連絡を入れ、ある協力の依頼をしておいた。到着した彼は待ち受けていた社長とその秘書に案内され、工場内の目指す棟に入った。その棟の中に、彼が必要とする施設があった。

じきに、そこへエミリオ・リッチーニも合流してきた。

「慎一郎。急に、いったい何事だい？」

親友であり、義理の兄にもあたるエミリオは、慎一郎の顔を見るなり訊ねた。
事態が呑み込めず当惑していた。

「すまん、エミリオ。もうちょっとだけ待ってくれ」

そう言つて、慎一郎がやる彼を制止した。

しばらくして、別のベレッタ社の社員が何かの機械を抱えてやって来た。

「今回は、ご協力に感謝します。では、社長。しばらく、ここをお借りします」

慎一郎は社長達に礼を言つて、退室してもらった。

「急ですまなかつた。君にしか頼めないことなんだ」

二人だけになってから、慎一郎がエミリオに陳謝した。

「こんな所で、いったい何を始めようというんだ？」

あたりを見回しながら、改めてエミリオが訊いた。

室内には様々な測定器が置かれている。中央には、四方が分厚くて大きなガラス貼りのスペースがある。金庫のような厚みの扉の様子からして、四方のガラスは防弾性であると容易に想像がつく。そこは、試験室であった。それも、ただの試験室ではない。銃器の火薬の爆発を調べる為に造られた施設である。地面から一メートル辺りの高さのところでは銃器が固定できるような器具あり、その少し離れた脇にはスローペースローション対応の撮影機が置かれている。固定した銃の引き金も、撮影機の動作も、試験室の外から遠隔操作できるようになっているのがわかる。

ベレッタ社は軍事産業でもある。つまり、扱うのはクレー射撃などの散弾式銃には留まらず、様々な軍用の銃器も製造している。従つて、こういった開発用の実験施設についてもエミリオの工房やMJ社のような競技用銃の専門会社とは比べ物にならないほどの大がかりな設備を有しているのである。

「ちょっと、調べたいことができたんだが、ここでしかできないんだな」

「ふーん…。さっき、この社員に持って来させたその機械は何なんだ。何かの測定器のようだが…？」

「ははは…。これは、ただの重さをはかる計量機だよ。ただし、コンマ何グラムまで計れるデジタル式の奴だ」

「ふーん…。で、いったい何を始めようというんだい？」

エミリオの問いを受けて、慎一郎が持つてきた大きなカバンを開けた。随分と重そうだが中には十センチ角の同じ厚紙でできた箱がぎっしりと詰められていた。まだ開封していないそれは、全部で十五箱ほどある。

「これは、僕が昨日のカナダでの試合に持参した実包だ。すべて未使用のものだ」
箱の中身は散弾であった。

「うん、見ればわかる。それがどうしたんだ？」

「こいつを一緒に調べて欲しいんだ」

「そいつはかまわないが、何でだい？」

「それは、まだ僕にもわからない。とにかく頼む…」

「わからないって…。まあ、いい。で、何から始める？」

エミリオは来ていた上着を脱ぐと、脇に置いた。

慎一郎のその依頼が、いつものような単なる銃の試験でないことは、彼の様子から見て取れた。

「まずは、この計量機で弾の重さを調べたい」

「これを全部か？」

「そうだ。全部だ」

「見たところ、これは工場製品だから、重さは皆同じはずだけどな…。まあ、おまえがそう言うのなら計ってみるか…」

それぞれの箱の中には、真新しい散弾が隙間なく綺麗に並んで詰め込まれていた。ひと箱には25発ずつ入っている。

エミリオが、その箱の中から散弾を取り出して男爵に渡す。受け取った慎一郎は、それを計量機にかける。しばらくは、その地味な流れ作業が続いた。

四箱目の途中で、その作業が止まった。その一つの散弾の計量に慎一郎が時間をかけたからだ。入念に確認してから、慎一郎はその散弾を他のは違う台の上に乗せた。それからまた、同じ作業に戻った。十一番目の箱の途中で、再び作業が止まった。やはり、入念に確認し、別の台に二つ目が置かれた。そして、作業がまた再開する。

そうやって、三十分ほどかけて、十五箱全部の散弾のふるい分けが行われた。

「これで、全部だな…。慎一郎。そろそろ種明かしをしてくれよ」

三十分間、その単純作業にずっと黙って協力してきたエミリオが、しびれを切らせて言った。

「すまん。もう少しだ…」

そう言うと、慎一郎がポケットから取り出した一つの散弾を計量機にかけた。

「やはり…」

映し出されたデジタルの数字を見て彼が呟いた。

「やはり、って、何なんだ？」

エミリオが訊ねる

「うん。長いこと待たせてすまなかった。作業の理由を話すよ」
やっと、その理由が明かされる。

「昨日のカナダの試合の最中に、ある違和感を覚えたんだ。銃に弾を込める時のことだ。込めようとした二つの散弾のうちの一つに何かの違いを感じたんだ。それが、こいつだ」

慎一郎は、ポケットから取り出した方の散弾をエミリオに見せた。

「一見したところ、他の散弾との違いはないようだがなあ…？」

それを手にしたエミリオが首をかしげた。

「いや、やはり違っていたよ。通常、僕が試合で使う散弾は一つの重さが24グラムちようどのものだ。例外はない。皆同じだ」

そう言って、たくさんある方の散弾の中から一つを取って計量機に乗せて見せる。

そこには、24.00という数字が表れた。更にもう一つを同じ場所からとって、秤にかける。やはり、同じ数字だった。

「まあ、そうだろうな。それはこの僕が誰よりも知っている」

「うん。ところが、こっちの散弾は、ほんの僅かだが他の物よりも重いんだ。ほら…」
慎一郎が、ポケットから取り出した方の散弾を計量機に乗せて見せた。

28.74グラムの数字が映し出されていた。

「なるほど、確かに…」

「そして、これと同じように通常よりも不自然に重い散弾が、まだ他にもまぎれこんでいたんだよ」

慎一郎は、選別した二個の散弾に視線を移した。

「君がふるい分けたあれがそうなのか？」

エミリオの視線もそれに注がれる。

「ああ。見ていてくれ…」

一つ目を取って計量機に乗せて見る。

28.75という数字が表れた。更にもう一つは28.74グラムだった。

「なるほど。重さから察するに、この三つの散弾には中身に何かの共通点があるようだな…」

「うん。その何かを調べてもらう為に、君にここまで来てもらったんだ。この試験棟には何でもそろっているからな」

「なるほど、それでここだったのか…」

「そういうことだ。おそらく、僕の能力では解明できないと思う。世界最高峰と言われている君の力が必要なんだ」

「ふふふ…。身内にそう褒められても、ピンとこないね」

若かりし頃、共にシーザー・カブリーニのもとで銃の修業に励んだ二人であったが、慎一郎は銃の競技者の道に進み、エミリオはそのまま銃の製作者としての道を歩んでいた。

「とにかく、わかった。では、始めるとしよう」

エミリオが、テーブルの一つに陣取って、そこにルーペなどの必要な器具を集め始

めた。そして、すべてがそろろうと問題の三つの散弾をそこへ移した。一つは、慎一郎が試合で使おうとして止めたもの。二つは、ここでふるい分けされたそれと同じ重さのものだ。

「さて、おまえ達の正体を暴いてやるぞ…」

世界屈指の銃職人が仕事にかかった。

その背中から、独特のオーラが沸き出す。そうになると、もうなん人も声を掛けることはできない。答を待たされるのは、今度は慎一郎の方になった。

慎一郎は別の部屋に移ると、ベレッタの社員から机のスペースを一つ空けてもらい、パソコンに向かった。

最悪の事態を想定して、調べておくべきことがあったからだ。

二十四・悪魔の散弾

二時間後―。

別室で待つ慎一郎の元へ、エミリオが呼びにきた。

「終わったぞ、慎一郎。すぐに来てくれ…」

そう言うエミリオの顔は強張っていた。ただ事でないのは明らかであった。

試験室に戻っても、エミリオの顔は強張ったままだ。

「異質の散弾の数が、三つあってよかったよ。一つでも足りないと、実験ができなかったからな…」

「やはり、何か問題があったんだな？」

「あつたどころの騒ぎじゃない。大ありだよ」

「説明してくれ」

「これは、三つのうちの一つを分解したものだ。何か気づかんかね？」

金属製の盆の中に、バラバラに分解された散弾が置かれていた。プラスチックでできた筒のケースが開かれ、中の構造も断面がわかるようにカットされている。

「まず、中身の散弾そのものが違うな…」

慎一郎が、すぐにそれに気づく。

盆の中に散らばっている二百数十個の小さな金属の球体の粒、すなわち散弾そのものことである。通常ならそれは鉛製であるから黒々としているはずだ。だが、盆の中のそれは綺麗な銀色をしていた。

「うん、そうだ。鉛製ではない。別の金属だ。ここの設備では、それを特定できないが、おそらく、タングステンかクロム製だろう」

「何故、そんな金属なんだ？」

「問題の一点目は、そこなんだよ。何故、鉛ではなくて別の金属なのか…、だ。もしこれが、本当にタングステンかクロムの類であれば、恐ろしいことになる…」

「エミリオ、わかりやすく説明してくれ」

「鉛は鉄に負ける。だが、タングステンやクロムは、鉄を壊せる強度を持っているからだ」

「何が言いたいんだ？」

再度慎一郎に促されて、エミリオが今度は盆の中のプラスチック製の筒の内部の断面を見せた。

「これが、問題の二点目だ……。こっちはどうだ、慎一郎？」

慎一郎は、じつとそれを観察した。

「こっちは、普通のものの変わりないように見えるが……？」

見慣れた散弾の筒の内側のようだった。

「よく見てみる、慎一郎」

エミリオに言われて再度、慎一郎がそれを見た。そして、眉をひそめた。

「ワッズが見当たらないな？」

本来あるべき、筒の中で散弾と火薬を仕切るワッズの部分がなくなっていた。

「その通りだ。この散弾の内部は、ワッズがめぐり取られていたのだ。そして、その余白も含めて、中にはぎっしりと火薬が詰め込まれていた。しかもごく丁寧なことに、火薬と散弾がしっかりと混ぜあうようにしてあった。これが、何を意味するのか分かるか、慎一郎……？」

エミリオは、恐ろしい仮説をたてていた。そして、それを実証していた。

「まさか、これは……」

同じ仮説にたどり着いた慎一郎が、それを言おうとした時、

「今、君が想像している結論は、これを見れば証明できる」

と、言ってエミリオが、パソコンのモニターを映し出した。

「ついさっき、その試験室内でやってみた実験の映像だよ。スーパースローモーションでやっただ。見ている、慎一郎……」

エミリオが再生のキーを押し、映像が動き始めた。

厚い防弾ガラスにしきられた火薬試験室の中に、セットされた男爵の散弾式銃が映し出されている。普通なら、遠隔操作で引き金が引かれた後に、銃口から超スローモーションで散弾が飛び出す様子が見られるはずだった。

だが、この映像の中では、銃口から散弾が飛び出す様は映し出されなかった。引き金が引かれた後に映し出されたのは、銃の機関部が破裂する映像だった。つまり、銃の内部で爆発し、その勢いで打ち出された散弾は、銃口から真つすぐ前に飛び出すのではなく、銃の中央上部に放射状に飛び散ったのだ。そして、本来そこには射撃する人間の顔があるはずであった。

「やはり、こうなるのか……！」

冷静沈着を絵にかいたような慎一郎も、思わず息を吞まざるを得なかった。

「見た通りだ、慎一郎……。言うまでもないが、この散弾は意図的に撃つ人間を狙った仕掛けになっている。まぎれもなく、巧妙につくられた殺人兵器だよ。もし、カナダで君がそのことに気づかずに使っていたら、間違いなくあの世行きだったよ」

「殺人兵器……」

慎一郎が小さく頷いた。

「とんでもない細工だ。悪魔の散弾だよ。一体誰がこんな恐ろしいものを……。とにかく、それが証明された以上、すぐに警察に届けた方がいい」

「うむ…」

慎一郎は、即答せずに考え込んだ。そして、答えた。

「いや、その前に調べることもある」

「何を呑気なことを言っているんだ。君は、顔を吹き飛ばされるところだったんだぞ。これはれっきとした殺人未遂だぞ！」

エミリオが、興奮気味に言った。

「落ち着け、エミリオ。それは、僕もよくわかっている」

「じゃあ、何で？ …ひよつとして、犯人に心当たりがあるのか？」

「ないわけではない…。考えても見ろ。それだけの細工を考えたり、実際にできる人間といえ、おのずと該当者の範囲は絞られるだろう？」

「そ、そうか…。言われてみれば確かにそうだな。銃関係、…中でも散弾銃に詳しい人間しかいないな」

「ご推察の通りだ」

「だが、慎一郎。それにしても、何万人といるだろう。特に、君の場合は世界中の人間が相手だから、もつとかもしれない…」

「的は絞れるよ。いや、実はすでに絞れている」

「本当か？」

「ああ、本当だ…」

「そうだったのか。で、いったいその候補はどんな奴なんだ？」

「うん。それを確認する為に、ジオに相談することにした」

「なるほど。それは名案だな。警察に調べてもらうのと同じことだからな。いや、それ以上だ」

「そういうことだ。実は、さっき君の分析を待っている間に、別室で彼にメールを打っていたんだ。大至急で調べてくれるそうだ」

「そうか。だったら、その結果を待つしかないな」

それを聞いて安心したのか、エミリオの顔のこわばりが消えていった。

二人の共通の親友であるジオヴァネッティは、この県の最高権力者である。加えて彼は、長い間イタリアの警察機構の上層部にいた。該当者の身元の割り出しを頼むのには、これ以上頼りになる人物はいなかった。

「で、これからどうする？」

「ここで、このままジオからの返事を待つことにする。一応、誰かに狙われている身だということがわかったんでね。だとすれば、ここはかなり安全だ」

「そうだな。ここは会社の性質上、セキュリティが極めて高い場所だからな」

エミリオが、さらに安心した。

「ホッとしたら、急に喉が渴いたな」

「よし、秘書君にコーヒーのお代りを頼むでしょう」

慎一郎が、あらかじめ教えてもらっていた内線番号を押そうとすると、

「ちよつと待て、慎一郎。何か、甘い物と一緒に頼んでくれ。…そうだ、ケーキにしよう」

「おいおい、エミリオ。ここはホテルではないんだぞ」

「大丈夫だよ。君が欲しいと言えば、彼らはミラノにだって買いに行ってくれるさ。ははは…」

エミリオは、すっかりいつもの調子に戻っていた。

二十五、思い出の湖畔

ブレシア北部・イドロ湖畔―。

三上謙作のレンジ・ローバーが、道路沿いのくぼ地に停めてあった。

そこから短い森林帯を抜けるとすぐあたりは開け、湖が広がる。

ロンバルディア県ブレシアは、すぐ北側にあるアルプス山系に抱かれている。従って、周辺にはいくつもの湖が点在する。一番大きな湖はガルダ湖で、このあたりの州立公園の名称の由来にもなっている。イドロ湖は、そのすぐ近くにあるガルダ湖の百分の一にも満たないような小さな湖だった。だが、二人はこの湖をとても気に入っていた。

謙作は、湖畔の平地にビニールシートを敷いて寝そべていた。その傍らに座るラファエラが、その日の新聞をイタリア語と日本語で彼に読み聞かせていた。

謙作がこの地に来てから頻繁に行われてきたイタリア語の個人レッスンは、二人の関係の親密さと共に場所を変えていき、最近はこちらに落ち着いていた。男爵の秘書の仕事を休業してその時間を確保したラファエラの協力もあって、ここ最近の謙作のイタリア語の能力は飛躍的に上達していた。

ラファエラの携帯が鳴った。

「ハンナからだわ…」

電話は、彼女の友人のハンナ・コヴァリコフからだった。

「もしもし、…ええ、話せるわよ」

ラファエラは、ハンナからの電話だけは、謙作と一緒にの時でも出るようにしていた。

それを心得ている謙作は、彼女が用意してきた携帯ポットからコーヒーを注いで呑むことにする。経験上、すぐには終わらないことを知っているからだ。

ウクライナ人のハンナは、ラファエラの選手時代のライバルであり、同時に仲の良い友人だった。そして、最近では、男爵の個人秘書の代役をやらせてもらっていた。ラファエラが謙作の為に時間を作りたいと相談した時に、自分が代役をやらせてもいいと助け舟を出してくれたのだ。最近減ってきてはいたものの、その仕事ならみの電話は一日に何本もかかってきていた。男爵の個人秘書という仕事は、確認しなければならぬことが山のようにある激務なのだ。だが、ハンナもまたラファエラがそうであったように、彼の秘書になることを榮譽に感じ、やり甲斐を感じてくれていた。

「わかったわ、それじゃあ明日ね」

案の定、その電話もすぐには終わらず、五分ほどかかった。

「ハンナさん、何だって？」

「詳しくは言わなかったけれど、カナダで、もめ事があつたらしくて…。それで、休みが少し取れることになったので、気分転換にどこか空気のいい所に行きたいのですって。でも、いつボスに呼び戻されるかわからないので、できるだけ近場のどこかに、連れて行く

て欲しいんですって。彼女はイタリアにはまだ不慣れだから……」

「そうか。それだったら、できる限りのことをしてあげるといいよ」

謙作自身はまだ会ったことはないが、今回のハンナの手助けには感謝していた。

「ええ、そうさせていたたくわ。彼女に恩返しができるいいチャンスだから……」

「急な話だけど、どこか行くあてはあるの？」

「そうね。ここなんて、いいんじゃないかしら」

「ここに……、女の子二人で？」

「ほほほ……。確かにここは、恋人同士で来るのにはもってこいの場所だけど、女性同士でも充分に楽しめると思うわ」

「そうだな……。言われてみれば、そうかもしれないね。まあ、景色は間違いなく素晴らしいし、空気もいいから、気分転換にはもってこいかもしれないね」

「ええ、そう思うわ。ここは、若い頃のボスが奥さんと来ていた場所ですしね」

「ええっ。男爵が、奥さんとここに……？」

「そうよ。毎日のように来ていたそうよ」

「へえー、そうだったんだ……」

それを聞かされた謙作は驚いた。

ラファエラにこの場所を教えてくれたのは、男爵Ⅱ近衛慎一郎だったのだ。

「それに、ここは事務所からも近いし、景色だけではなくて奥に入れば軽い狩猟の方も楽しめるから」

「なるほど、そういうえばそうだね」

謙作は、彼女達がそろって世界ランキングを競うような散弾銃の名手であったことを忘れていた。

「軽い狩猟も楽しめるから、気分も爽快になれるか……。この辺なら、大型動物もいないから安全だしね。確かに、それは名案だよ」

このあたりの森林帯には、熊やイノシシのような危険な大型動物は生息していない。女性だけでも安心して鳥類や野うさぎなどの小動物の狩が楽しめるのだ。

「ケンは、明日はここに来る時間は作れないの？」

「そうだな、工房に行つてやらなければならないことがあるけど、なるべく早めに切り上げて、迎えにだけでも来るようにするよ。直接ハンナさんに会って、お礼を言えるいい機会だしね」

「ありがとう、ケン！」

ラファエラが、嬉しそうに抱きついた。

二十六・旧友たち

ベレッタ社の正面エントランスに、二台の車が横付けされた。

一台は黒塗りのリムジン車で、先導してきたもう一台は、やはり黒塗りで大型のワゴン車だ。

ベレッタ社の社長は、この日二人目の大物の急な訪問を受けて、再び玄関先で出迎

えに立っていた。世界的企業のトップである彼が、まして一日に二回も出迎えに立つことなどは極めて稀だった。

まず先にワゴン車から二名のSPが降りて周囲を伺う。それが終わるとリムジンの後部座席のドアを開けて、北イタリア最大の統治者である主人を降ろす。

「社長、急で申し訳ありませんな」

リムジンから降りたつたジオヴァネッティが謝意を述べる。

「いいえ、知事。ここは、セキュリティがしっかりとしております。どうか、ご安心ください」

「かたじけない。ところで、男爵達は？」

「はい、中でお待ちです」

ベレッタ社の社長は、これからここで何が始まるのかと、興味をもたずにはいられなかった。イタリアのクレー射撃界の主要人物が秘密裏に一堂に会しているのだ。やはり、男爵の引退に関する話なのかもしれない。ただし、これを口外することはできなかった。男爵や知事から固く念を押されていたからだ。社長は、それを厳守しようと改めて自分に言い聞かせた。

ジオヴァネッティがその部屋に通された。

「遅いぞ、ジオ」

駆けつけた彼に、さつそくエミリオが不平をぶつける。

「すまん、二人共。待たせたな」

待ちかねていた慎一郎とエミリオに笑顔で陳謝する。

三人の旧友達のフランクなやりとりは、今も三十年前とまったく変わっていないかった。

「気にするな、ジオ。こっちこそ無理を言っすまなかつた。公務に影響はなかったか？」

「ははは：、そんなことこそ気にするな。それに、犯罪撲滅は、今のこの国の最大の懸案事項でもあるからな」

「それは言える。このブレシアではそういうのではないにしても、ミラノなんかはおっかなくてかなわんぞ」

エミリオが、皮肉を込めて嘆いた。

「そうだな。確かに君の言う通りだ。知事の僕が狙われるのはともかく、この間はどうとう、娘まで犯罪に巻き込まれそうに：」

途中まで言いかけて、ジオヴァネッティはベレッタの社長の存在を思い出し、礼を言っ退室してもらった。社長は、余計なことは何も聞かずに、気持ちよく協力してくれた。

三人きりになってからのジオヴァネッティの表情は一変した。笑顔が消えていた。

「慎一郎。ミラノでラファエラが強盗事件に巻き込まれた時には、本当にケンに世話になった。：あの時、もしケンと一緒にいなければ、と思うとゾツとする。心から礼を言うよ」

「うん、何もなくてなによりだ。その後、ラファエラは、元気にしているのか？」

「おかげさまで、ケンがそばにいてくれることもあって、事件の後遺症もなく気

持ちは落ち着いているようだ。ただ、エリザベッタはあれ以来、ラファエラにもSPを付けてくれとうるさく言ってくる。それは、僕も同じ気持ちではあるが…」

「そうだな。付けた方がいいだろうな。それに、君の部下達は優秀だからな」

慎一郎は、以前ジオヴァネッティの部下に五年間、日常警護をしてもらっていたことを思い出していた。優秀な警護官だった。

「ありがとう。しかし、肝心のラファエラがそれを頑なに断るんだ。ケンが一緒だから大丈夫だな…」

「ふふふ…。ケンの奴も、今回の騒動で相当株をあげたようだな」

慎一郎が笑った。

「正確に言うと、更にしたという方が正しいよ。だから、ケンが一緒なら、という条件で僕もエリザベッタも承諾したんだ」

「ふふふ…。だったら、そうすればいい」

「おいおい、ジオ。そうなると、ケンはラファエラの専属ボディガードというわけか？」

エミリオが悪戯っぽい笑顔で訊いた。

「まあ、そういうことになるな。社長のおまえには無許可だったかな」

「ははは…。こいつは傑作だな。ただし、銃の修行にさしさわりが無い程度にしてもらわんとな。はっはは…」

エミリオが大笑いした。

だが、ジオヴァネッティは、普段とは違ってその笑いには参加してこなかった。それどころか、ますます真剣な顔つきになっていた。

慎一郎がそれを気にかけた。

「どうした、ジオ。浮かない顔つきだが…。ひょっとして、例の調査の件と何か関係があるのか？」

「ああ、おそらくある。とんでもないことがわかってきたぞ…」

「何なんだ、ジオ。そのとんでもないこと、というのは？　それが、ラファエラと何か関係があるっていうのか？」

エミリオが、真顔に戻って訊いた。

「それが、あるかもしれないんだ。しかも、ラファエラだけじゃない。僕達三人にも関係があるかもしれない…」

「三人って…。僕もかかわっているのか？」

「ああ…。おそらく、君もだ…。それで、君にもここで待ってもらったんだ」
ジオヴァネッティは、辛そうにそう言った。

「そうか…。どうやら、一番嫌な方向に向かっているようだな…」

慎一郎も苦虫をつぶしたような表情に変わった。

「おいおい、いったい何が始まるうとしているんだ…？」

二人のただならぬ様子に、エミリオがうろたえた。

「とにかく、最終確認を急がせているから、結論は明日まで待っていてくれ。その前に、君達のやった実験とやらを見せてくれ」

「例の悪魔の散弾か。せっかく、公務を削ってここまで来たんだから、見るのは別に

かまわんが……。ただし、気分が悪くなるぞ。あれは、僕達クレール射撃を愛する者への冒険以外の何物でもない」

エミリオがそれを思い出し、不機嫌そうに言った。

「うん。僕も気乗りはしないが、仕方がない。この目で見ておきたいんだ」

「よし、わかった。そこまで言うのなら、行くとしよう……」

三人の旧友が、その試験室に移動した。

二十七・散策

翌日。ガルダ州立公園。

イドロ湖から一キロほど北に入った山中にラファエラとハンナがいた。

「いい気分だわー！」

ハンナが嬉しそうに目をつぶって、大きく深呼吸をした。

「気に入ってくれた？」

「ええ、とても……。さっきの湖畔も良かったし、この森林帯も申し分ないわ！」

彼女のその言葉を聞いて、ラファエラは内心ホッした。ハンナは、この場所をとてても気に入ってくれたようだった。これで、せめてもの償いができたと思った。

スランプ状態の謙作を支える為には、まとまった時間が必要だった。男爵の個人秘書という世界中を飛び回る仕事との両立は不可能であった。それを相談した時に、ハンナは、自ら進んでその代役を申し出てくれた。以前からやってみたかったのだと言って、喜んで引き受けてくれた。そして、自分に代わってその職務を見事にこなしてくれていた。だが、男爵の個人秘書は見た目以上に激務である。定期的に、リフレッシュすることが不可欠であることは、ラファエラ自身が誰よりもわかっていた。

「やっぱり、たまにはこういう所の空気を吸わないとダメよね」

「ほほほ……、そうね。森林浴はいいわよね。でも、あなたの故郷にもこういう場所はたくさんあるのでしょ？」

「ええ、勿論あるわ。でも、一年の大半は寒い時期だから、こんなに伸び伸びと空気が景色を楽しめないのよ」

「そうかー」

「あとは、野鳥か小動物でも現れてくれたら、それを撃ってスカツとするんだけど……」

「ほほほ……、なかなかそう簡単には出て来てくれないわね」

二人は共に、狩猟用の散弾銃を手にしていった。だが、この日の主目的はあくまでも気分転換の為に山の中を散策することであった。もし、その範囲の中でチャンスがあれば狩猟の方も楽しもうというものだった。

そういった軽い狩猟なので、犬も連れてきていないし、狩猟用のベストも着用していない。狩猟用のベストは、全面が鮮やかなオレンジ色の蛍光色でできていて、仲間同士の誤射を防ぐ為のものである。実際に、こういった森林の中での人や犬への山中での誤射は、今でも後を絶たないのである。従って、本来なら着用が義務付けられているのだが、そんなものを着たらせつかくのピクニック気分が台なしになるというハンナからの強い要望で、

ラファエラもそれを承知していた。

「もう少しだけ奥へ入ってみて、それでも鳥達がいそうになかったら、湖畔に戻ってランチにしましょう。その頃には、ケンも合流して来るでしょうから」

「そうね、そうしましょう」

ラファエラに先導されてハンナが続いた。

二十八・調査結果

同じ頃――

ベレッタ社の正面エントランスに、再び二台の車が横付けされた。

社長は、前日に続き玄関先まで出迎えに立つ。

まず先にワゴン車から降りた二名のSPが周囲を伺う。手順は昨日とまったく変わらない。それが終わるとリムジンの後部座席のドアを開けて、主人が降りる。

「社長、連日のことで申し訳ありません」

リムジンから降りたたジオヴァアネッティが昨日と同じように陳謝する。

「いいえ、知事。毎日でもお使いください」

「重ね重ね、かたじけない。ところで、エミリオは？」

「はい。もうお越しになっていて、昨日と同じ部屋でお待ちです。…男爵は、御一緒では？」

「うん。彼は急に野暮用が入って、少し遅れて来るそうです」

「そうですか、わかりました。では、今日は私はここで失礼します」

社長は気を遣って、部屋までの案内を部下にまかせた。

「やあ、ジオ。今日は早く来たな」

ケーキの乗った皿を手にしたエミリオが、機嫌よく迎えた。

「何だい、エミリオ。昼間からケーキかい？」

その様子を見たジオヴァアネッティが、怪訝そうな顔で言った。

「うん。ここの秘書君は、なかなか気がきく娘さんでなあ。昨日出してもらったケーキを、僕が美味しいと言ったのをちゃんと覚えていてくれて、今日も同じ物を用意しておいてくれたんだ。さすがは、世界的企業の秘書だよ。実に優秀だ。だから、さっそくいただいている」

「そいつは、何よりだったな…」

ジオヴァアネッティが、あきれ顔でため息をついた。

「あれ…。そういえば、慎一郎は一緒じゃないのか？」

「うん。途中まで一緒だったが、ちよつと寄り道をしている」

「そうか。ところで、昨日の調査の結論は出たのか？」

「ああ、出た…」

「そうか。じゃあ、先に聞いておこうか」

「うん、是非聞いてくれ。その前に、その残りのケーキを片付けちまってくれ」

「わかったよ。やっぱり、悪い知らせになっているんだな？」

残りのケーキを頬張ったエミリオが、真顔に戻って訊いた。

「ああ。最悪だ……」

ジオヴァネッティが、持参した書類カバンからひとつのファイルを取り出しながら、敵しい顔つきで言った。

そして、ファイルの中の大判の写真をエミリオに渡す。

「あれ……。この綺麗なお嬢さんは、何なんだい？」

ジオヴァネッティが差し出した顔写真を見て、意表を突かれたエミリオが訊いた。出てくるのは、凶悪な殺人者の顔写真のほうであった。だが、そこには三十歳前くらいの若い黒髪のショートヘアの女性が写っていた。

「ハンナ・コヴァリコフだ。休養中のラファエラに代わって、今、慎一郎の個人秘書をやっている。ラファエラとは射撃競技の選手時代からの親しい友人だ。その関係で、秘書の代理を頼んだとのことだ」

確かに同じ彼女の顔写真の付いた履歴書のコピーも入っていた。男爵が彼女を採用した時のものの写しだ。

「何で、その彼女の資料を……。えっ、まさか……？」

「うん。お察しの通りだ。とにかく、説明しよう」

ジオヴァネッティの説明が始まった。

「ハンナ・コヴァリコフ。ウクライナ国籍の二十七歳。独身だ。職業は、ウクライナの銃器販売会社の社員ということになっている。三年前までは、その会社の契約選手として射撃の競技に出ていたわけだ。家族は、年金暮らしの母親が一人だけ。犯罪歴は特にない。まあ、ざっとこんなところだ……」

「で、その彼女が、例の悪魔の散弾を仕掛けた張本人だということのか？」

エミリオはまだ、懐疑的であった。

「それは、間違いないと思う」

「何で、そこまできっぱりと言い切れるんだ？」

「昨日、君と慎一郎が話したように、犯人はまず、散弾にあれだけの細工を施すことができる知識と技術を持つ人間だ。その時点で、かなり限定することができる。絞り込むことができた。それでも対象者はまだたくさんいる。だが、その中であの時、慎一郎の散弾のケースに触れることができた人間は、彼女一人しかいなかったんだよ。

慎一郎は、日常の銃や弾（たま）の管理には人一倍神経を使っている。そんな彼だからこそ、そう断言できたんだ」

ジオヴァネッティが、再度きっぱりと言い切った。

「そうか。君がそう言うのなら、間違いないのだろう。確かに慎一郎の銃や弾の管理は細心の中にも細心だから……。ただ、それで犯行が証明されたとしても、その動機は何なんだ？ 君や慎一郎には、その心当たりでもあるのか？」

「まさにそこなんだよ、エミリオ。相手が特定できても、その動機がわからなかったんだ。それで、時間をかけて調べていたというわけだよ。今から続きを話す……。だがその前に、その結論に至ったもうひとつの話を先にさせてくれ」

「うん。言ってみてくれ」

「以前、僕が狙撃されたことを覚えているだろうか？」

「ああ…、下手くそな誰かが狙ったあの事件か？」

「真面目に聞けよ、エミリオ…。実は、あの事件で世間に公表されていないなかった点がひとつあるんだ」

「それは？」

「あの時僕を狙った弾（たま）は、ライフルのものではなかったんだ」

「ライフルのものではなかった…？」

エミリオが首をひねった。

「だってあれは、かなり遠方からの狙撃だったからこそ、犯人の目撃もできなかったわけだろう。であれば、ライフルを使わなければ無理な話だろう…？」

と、いいかけたエミリオが、

「さてよ…。サボットなら…？」

と、呟くように言った。

「さすがだな、エミリオ。その通りだ。サボット弾だったんだ」

通常、散弾銃に使われる弾はプラスチック製の筒のケースの中に金属球、即ち散弾が詰められている。だが、中には、筒のケースの中に一つしか弾の入っていないタイプも存在するのだ。それをスラッグ弾という。そのスラッグ弾は二種類あり、そのうちの一つがサボットである。この弾の特徴は、散弾銃での発砲でありながら、距離を飛ばすことが出来るというものである。従って、その形状も散弾のように丸い球ではなく、ライフル弾のように細長い。ただし、それであっても発射距離や命中精度の面から見ると所詮は散弾銃用の弾であり、ライフルのそれには遠く及ばないのである。

「なるほど。サボット弾を使えば、確かに百メートルは離れた所から狙えるな。だけど…」

再び、エミリオが首をひねる。

「それにしても、何でライフルではなく、わざわざ散弾銃を使わなければならないんだ。人に見つからない距離での狙撃を確実にするなら、ライフルを使った方が比較にならないほど有利はずだが…」

「うん、当時は僕もそう思ったんだ。君と同じ疑問を持っていたよ。しかし、結局あの時は、そんなところまでは深く追求しないで捜査を終えてしまったんだ」

「だが、今になって考えて見れば、その疑問点に「意味」を感じたんだな？」

エミリオが訊いた。

「そうなんだ。後になって冷静に考えてみれば、あれは、プロのやる仕事ではない。本気で相手を殺そうとする者の仕業ではないと思っただ。射撃の腕はあっても、人を殺すやり方を知らない人間の仕業だよ。人を殺すことに躊躇している人間と言いつてもいい。何故なら、撃ったのはそれ一発だけで、その後はない。本気で仕留めようという意志がそこまで強くなかったからだ。人を殺すことに迷いがあつたからだよ。根っからの犯罪者ではないということなんだよ。そして、あの時の狙撃者は、ライフルが扱えない人間だったのではないかと考えられた。つまり、散弾銃しか扱えない人間だったのではないかと考えたんだ」

ジオヴァネッティの分析には、長く警察機構に在籍した者ならではの洞察力があつた。

「殺しは素人だが、散弾銃の扱いだけには慣れてる人物、か…」
エミリオが呟いた。

「そうだ。そして、その人物はやはりハンナしかいないと思う」

「おいおい、ジオ。あの狙撃事件も、彼女の仕業だというのか？」

ジオヴァネッティのその推測に、エミリオは驚いた。

「そうだ。そう考えれば、すべての辻褄が合うんだ。恐ろしいほど、ピッタリとな…」
そう言ったジオヴァネッティの顔が強張った。

「さっきの散弾に細工した犯人が、ハンナだということ君の説明には納得できるが、何で、君の狙撃の方まで彼女だということになるんだ？」

「それは、今回の彼女の身辺調査から導き出された結果だよ…。実は、インター・ポールや他からのデータを引っ張って来ても、表面上はさっき話した以上のことは出てこないのだ。つまり、彼女の身上に偽りはなく、犯罪歴など一度もないごく普通の真面目な一市民なんだよ」

「何だよ、ジオ。それでは、話が矛盾しているじゃないか」

「本題はここからだよ。確かにこの身辺調査の内容に嘘はない。ただし、何かひとつだけ抜けていることに気がつかないか？」

「…そういえば、父親のことが載っていないな？」

資料を手しながら、エミリオがそのことに気づいた。

「そこなんだよ、エミリオ。彼女の今のコヴァリコフという姓は母方のものなんだ。十年以上前に父親が亡くなってから、彼女は母方の姓を名乗っているんだ」

「その父親は、何で亡くなったんだ？」

「自殺だよ」

「自殺、か…」

「ああ。そして、その父親の名前を知った時、僕は今までに味わったことのない衝撃を受けたんだ…！」

ジオヴァネッティが、見たこともないような悲痛の表情になった。

二十九・復讐の連鎖

「パキッ」

踏んだ小枝が折れる音がした。

一瞬、ハンナは身構えた。だが、前を歩くラファエラは気づいていない。

ハンナは、内心ほっとした。普段なら犯さないミスだった。狩猟の時は、自分の足元には注意を払う。小枝が折れるようならちよっとした不自然な音を出してしまえば、目標の鳥や動物達にすぐに気づかれてしまうからだ。だが、今の彼女には、そこまで気を配る余裕はなかった。それらを遥かに超えた行為に集中しているからだ。誤射に見せかけるには、もう少しラファエラとの距離を取る必要があった。あともう少し彼女から離れなくてはならない。

やがて、ハンナは歩く速度を落としながら銃をかまえた。その銃口は、15メートル

ルほど前を歩くラファエラの背中に向けられていた。ラファエラは、まったくそのことに気づかない。後方をハンナに任せているので、彼女は前方にしか注意を向けていないからだ。十分な距離に広がった。ハンナは、頭の中で計算していた。樹木が鬱蒼としていないこの平地なら、ラファエラを確実に仕留められる。それに、今の彼女には森林の中でも識別できる狩猟用のベストを着用させていない。これなら後々、事故という事で旨く処理できる。

チャンスは、今しかなかった。自分の父親を死に追いやった憎むべき娘への復讐を果たすのだ。

もともとは、この娘に非があるわけではない。父を死に追いやった直接の仇は、この娘の父親と男爵だ。

だが、その二人に直接手を下すのは困難だった。

一度狙撃をしくじり、更に警護が厳重になってしまったジオヴァネッティには、もはや素人の自分では手を出すことは叶わなくなってしまった。そして、常人離れた男爵の隙のなさには、手も足も出せないことがわかった。絶対の自信を持って仕掛けたあの改造弾ですら見破られてしまったのだ。

だから、代わりにこの娘に責任を取ってもらう。隙だらけのこの娘になら、実現は可能だった。そうすれば、結果的にはジオヴァネッティ達に死ぬほど以上の苦しみを与えることになるのだ。

考えてみれば、この娘も悪かったのだ。ある意味、これは自分で播いた種でもあるのだ。始めは、ここまでやるつもりはなかった。彼女がクレー射撃の競技で自分に負かされてさえいれば、死んだ父にも申し訳けがたっていた。それで、復讐は済んでいたのかもしれないのだ。だが、そうはならなかった。

父から学んだ自分の射撃は無敵だと思っていた。事実、国内では負け知らずであった。だが、国際試合では、何度対戦してもこの娘に勝つことはできなかった。大会で優勝するのは、いつもこの娘か日本の平沼だった。自分はいつも決まって二位か三位に甘んじていた。これでは、自国開催のモスクワ五輪で銀メダルに終わり、それが原因で自殺に追いやられた自分の父親とまったく同じであった。

勿論、必死に練習を重ねて彼女に挑んだ。だが、どうしても、彼女を倒して優勝することはできなかった。何度挑戦しても結果は同じであった。そして、そのうちに彼女は引退してしまった。平沼の結婚を機にきっぱりと競技を辞めてしまったのだ。間接的な復讐は、実現しないままに終わってしまった。

だから、直接的な復讐に手を染めなければならなくなったのだ。だから、復讐はエスカレートせざるを得なくなったのだ。

ジオヴァネッティへの報復に失敗した後、この娘の方に仕掛けるチャンスが到来した。あのやっかいな男爵のそばからしばらく離れて、ミラノでプライベートの買い物に行くという話を聞いたのだ。男爵の秘書を引き継いだおかげで、仕事の相談という名目で、毎日のように電話で彼女の行動を確認できた。

今度は、直接手を下さずに男を二人雇うことにした。金を渡せば何でもやる地元のコロッキ達だ。ミラノにはそんな男はいくらでもいた。彼女が一人で店に入るのを確認して、その男達に襲撃させた。店を襲うふりをして、彼女を始末させる算段だった。

これならば、うまく行くと思った。だが、実際、事はそううまくは運ばなかった。予想外の邪魔が入ったからだ。

あの時に、この娘の恋人の取った行動は並外れていた。並の人間では成し得ないような完璧な危機対処の方法だった。訓練されたプロでも真似のできないような、鮮やかな收拾の仕方であった。しかも、その恋人はあの男爵を彷彿させる容姿を持っていた。そして、男爵と同じような冷静沈着さを兼ねそろえていた。

娘は、まさに白馬に乗った騎士に救われたのだ。そして、騎士に抱(いだ)かれた彼女は、心底から幸せそうだった。

何故、彼女ばかりがそんなに幸せな人生に包まれているのだ。それに比べて、自分のそれは、あまりにも惨めだった。

そんな彼女が憎かった。憎くて、憎くて仕方がなかった！

引き金に掛けられたハンナの人差し指に、力が入った。

三十、悔いなき決断

「それは、本当かつ！」

その男の名前をジオヴァネッティから聞かされたエミリオが叫んだ。

「あのルスタム・ヤンブラホフが、ハンナの父親なのか！」

「そうだ！」

「そして、彼は、自殺していた……！」

「そうだ……！」

「そ、そんな……！」

エミリオは、絶句した。

彼のその反応を予想していたジオヴァネッティは、静かに口を開いた。

「こうなると、すべての辻褄が合うだろう……。僕と慎一郎が標的になったこと……！」

「た、確かに……！」

断片的だったエミリオの頭の中のパズルが、嫌がおうにもひとつひとつ埋まってく。く。

「だが……。だが、あの時の僕達は純粹に頂上を目指していただけだ。そして、正々堂々と戦い、勝利しただけなんだ……！」

エミリオの脳裏に、三十年以上前の出来事が激しく交差する。

「勿論だ……！」

「銃職人として立ち立した僕は、世界最高の銃を造ることに燃えていた。そして、完成させた。そして、それを君がオリmppickで実証して見せた。ただそれだけのことじゃないか……！」

「その通りだよ、エミリオ。僕達のこと自体には、何の後ろめたさも悪意もなかったさ。ただ、たまたまそのオリmppickが、普通のオリmppickではなかったんだ。特別過ぎたんだよ」

「そんなことを言われても……！」

「ああ…。若かった当時の僕達は、相手の都合なんかは気にもとめなかったさ。ただただ、世界に認めてもらうことのみ燃えていた。戦う国がどこであろうと、戦う相手が誰であろうと、そんなことはまるで目に入らなかったさ。ただ、結果的に僕達は、勝ってはならない国、勝ってはならない相手に勝ってしまったんだよ」

「そして、それに留まらず、僕達はその相手に名誉挽回のチャンスをも与えてやらなかった…」

「そうだ。僕も、慎一郎も、そして君も…」

「しかし、あの時は、ヤンブラホフが自殺をするなんてことまでは…」

「ああ…。勿論、あの時は、彼がそこまで窮地に陥っていたことなんかは知る由もないさ。だが、実際に彼はそこまで追い詰められていたんだ。死に物狂いだっただ。僕達が、モスクワとロスで勝利した裏では、想像もつかないほどの仕打ちがあったんだ

ろう。西側の世界で生きてきた僕達には想像もできなかった。だが、今考えれば、当時のソ連とは、東西冷戦とは、そういうものだったんだ」

「何てことだ…」

エミリオが、頭を抱えた。そして、涙目で訴えた。

「だけど、僕と慎一郎は、充分過ぎるほどにその報いを受けたはずだ。僕は、妹を失った。慎一郎は妻を失った。そして、子供達との普通の生活も失った。それだけではない。彼は、競技者として更に五年間のブランクを強いられたんだ…」

「わかってはいる。しかし、ハンナはそんなことは知らないはずだ。彼女には僕達が、自分の父親を踏み台にして成功者になり、のうのうと楽しく暮らしているようにしか見えていないはずだよ。更に、父親が自殺してから間もないうちにソ連が崩壊し、彼女の祖国のウクライナは独立してしまい、その結果、直接の仇がなくなってしまったんだ。だから、父の無念を晴らす矛先は、自然と僕達に向いたのだろう」

「何てことだ…」

エミリオの言葉には、もう力が残っていないかった。

しばらく重苦しい沈黙が続いた。

そして、エミリオがハツとした表情で訊いた。

「まさか、ラファエラは大丈夫なんだろうな…？」

「それなんだよ、一番の気がかりは…。狙われる可能性は充分にある。僕に失敗し、慎一郎にも駄目だったとなれば、次はその娘ということになる。しかも、娘なら一番やり易い相手だ…」

ジオヴァネッティが無念の表情で言った。

「今、彼女はどこにいるんだ？ 連絡はとったのか？」

「連絡はつかないんだ…」

「つかないって、ジオ…。じゃ、じゃあ…。ケンは…、ケンは一緒なんだろう？」

「一緒ではない…。しかも悪いことに、今…、娘はハンナと二人だけで会っているんだ…」

ジオヴァネッティの口から、最悪の事態が告げられた。

「な、何だつて。それじゃあ、ジオ…！」

絶望的な状況に見えた。だが、

「大丈夫だ、エミリオ。安心しろ」

ジオヴァネッティは不思議なほど落ち着き払っていた。

「念の為に、そこへ慎一郎に向かってもらっているんだ」

「そ、そうか。それで、君は落ち着いていられるのか……。だけど、あいつは二人の居場所がわかっているのか？」

「ああ、勿論だ。山の中だから携帯はつながらないが、幸いそこは慎一郎にとっては自分の庭のような場所だ」

「そうなのか。でも、いくら慎一郎とはいっても、人間が一人でできることは限られているからな……。当然、警察も向かわせているんだろうな？」

「いや、連絡はしていない」

「な、何を呑気なことを言ってるんだ。おまえの娘の命が危ないんだぞ！」

「勿論、それは承知の上だ。内心、イタリア中の警官を総動員したいくらいの気持ちでいるさー！」

「じゃあ、何で？」

「慎一郎に強く頼まれたからだ。警察沙汰にしないでくれ、と……。これは、自分達の問題だ。だから、自分達で解決したいんだ、と……」

「それは、そうだが……」

「彼の妻のマリエッタを死なせてしまった僕の立場からすれば、その申し入れを呑まざるを得なかったんだ……。それに、あいつは、できないことは口に出さない奴だ」

「た、確かに、そういう奴だ……」

「だから、僕は、あいつを一人で行かせたんだ……。死ぬほど迷ったが、その決断に、後悔はない！」

「そこまで腹をくくったんなら、わかった。僕からはもう、何も言わないよ。あいつの決着のつけ方に賭けよう」

三十一・暴発

パーン、という大きな銃声が森林の中に響き渡った。

ラファエラは、あわててその銃声の方向に振り向いた。

見ると、15メートルほど向こうで、ハンナが尻もちをついていた。

「ハンナ！」

ラファエラが叫びながら、ハンナの元へ駆け寄った。

彼女に怪我はないようだった。だが、放心状態でそのまま凍りついたようになっていた。

「ハンナ、大丈夫？」

ラファエラの問いかけにも、彼女はしばらく答えることができなかった。

そして、何かを探すようにやたらと周囲を見回し始めた。

「ほら、探し物はこれでしょ？」

3メートルほど横に落ちていた彼女の銃を、ラファエラが拾ってきて見せる。

「……ごめんなさい。……つ……つまずいちゃったみたい……」

やっとハンナが、絞り出すように言った。

だが、顔面は蒼白である。そして、なおも周囲を見回す。

「大丈夫よ、周りには私達以外はいないわよ」

「そ…そうね…」

「もう。ハンナったら、危ないじゃない。私に当たっていたらどうするのよ」

転んだ際の暴発事故だと思ひ込んでいるラファエラが、何事もなかったことに安心して、怒って見せた。勿論、本心から怒っているからではない。ハンナを元気づける為の芝居だ。

「ほ、本当に、ごめんなさい…。あなたに当てるつもりなんか…」

「ほほほ…、当り前でしょ。ちようどいいから、散策はもうこれで切り上げて、湖畔の方に戻りましょう」

「ええ…。そ、そうね…」

やっと立ち上がったハンナは、受け取った自分の銃の点検をした。

そして、彼女はハツとして、その部分を凝視した。

ラファエラには気づかれていなかったが、中央部に真新しい損傷の跡があった。間違ひなく、何かに撃たれた跡だった。それは、ライフルの弾の跡ではない。無論、散弾でもない。

それは、散弾銃で撃ち出すサボット弾だ。

誰かが、この銃を狙って撃つたのだ。だが、それがライフルならともかく、散弾式の銃でその弾を使って、遠方からこんなに正確に当てることなどできるはずがない。人間業ではなかった。こんな芸当ができる人間は、この世に一人しか存在しなかった。

だとすれば、これは警告だった。この娘には手を出すなという暗黙の警告であった。しかも、使われたのはサボット弾だ。つまり、この娘の父親を狙ったこともお見通しだという意思表示だ。

ハンナは震えだした。

撃たれた恐怖から震えたのではない。自分がしていたことの恐ろしさがわかってきたから震えたのだ。

三十二・終息

謙作の運転するレンジ・ローバーが市道を北に向かっていった。

仕事を終えた彼はエミリオの工房を出て、ラファエラ達と待ち合わせているいつもの湖畔を目指していた。

ふと、対向車線に目をやった。向かってくるのは見覚えのあるベンツのワゴンだった。

「男爵？」

すれ違った運転手の顔は、確かにそう見えた。

だが、サングラスをかけ、襟を大きく立てた服装だったので、肝心のトレードマークの髭までは確認できなかった。勿論、ナンバープレートまでは読み切れない。携帯をかけて確認してみようとしたが、圏外で駄目だった。

謙作が湖畔に到着すると、ちょうどそこへラファエラ達が森から戻って来た。

「散策は、今、終わったの？」

「ええ、ピッタリのタイムングよ」

謙作がラファエラの隣の女性に目を移した。

「紹介するわ。友達のハンナよ」

「はじめまして」

「はじめまして、三上謙作です。ラファエラがいろいろとお世話になっていま…」

言いかけたところで、謙作は彼女の顔をまじまじと見た。

「あれ…。ひよつとして、どこかでもうお会いしていますか？」

シヨートヘアの黒髪に見覚えがあったような気がしたのだ。

「い、いいえ。今日が初めてですよ」

ハンナが焦ったように否定した。

「そ、そうですね。失礼しました。ははは…」

謙作は、笑いながら、話題を変えた。

「そういえば、男爵も来たの？」

「ええっ、ボスが？ 来てないけど、どうして？」

ラファエラが不思議そうに訊く。

「じゃあ、さっきのはやっぱり別人か…」

「どういうこと？」

「うん。いや、さっきそこですれ違った車を運転していたのが男爵によく似ていたから。

それに、車種も色もまったく同じ車だったから、てっきり…」

「そうだったの…。でも、もしその人が本当にボスなら、必ず私達に声をかけていくはず

だわ…。ねえ、ハンナ？」

ラファエラは同意を求めるが、ハンナからの反応はなかった。

「(やはり、彼だった！)」

ハンナは茫然としていた。

これで、確信は確定になってしまった。やはり、あれは男爵からの警告だった。

「ねえ、ハンナったら。本当に大丈夫なの？」

再び、顔面蒼白な状態のハンナの様子を見て、ラファエラが心配して訊ねた。

「ごめんなさい、ラファエラ。あなたに話さなければならぬ大切なことがあるの…」

そして、ハンナは急遽それを言わざるを得なかった。

「な、何なの？」

「私。ボスの秘書を辞めて、ウクライナに帰ることにしたの。実は、もう空港に荷物も預けてあって、夕方の便で発つ予定になっていたの」

「ええっ。急に、何故？ ボスと何かトラブルでもあったの？」

「も、勿論、何もないわ！」

ハンナが大きくそれを否定した。

「じゃあ、どうして？」

「疲れてしまったの…。もう、これ以上続ける自信がなくなってしまったの…」

言葉通り、今のハンナは抜け殻のような状態に見える。

「そうなの…。それなら、仕方がないわよね」

「突然で、本当にごめんなさい」

「それで、さつきから様子が変わったのね…」

「え、ええ…。この話を言おうとしても、なかなか切り出せなくて…」

「そうだったの…。かえって、あなたを苦しませてしまったのね。もともとは、私のわがままから出たことなのだから、気にしなくていいのよ」

ラファエラは、納得せざるを得なかった。

「本当に、本当にごめんなさい。ごめんなさい！」

ハンナは、何度も何度も謝っていた。

まるで大罪でも犯したかのように。

本当の事情を知らないラファエラは、そんなハンナが気の毒で仕方がなかった。そして、もうこれ以上は彼女を引き留められないと思った。友情から引き受けてはみたものの、やはり男爵の秘書というのは想像していた以上に大変だったのだろう。

謙作とラファエラは、ハンナをマルペンサ国際空港まで見送った。彼女は、終始泣き震えていた。

この時、三上謙作は、三十年近く前にこの空港で始まった自分の人生の大きな転換が、今、この空港で終息したことなど知る由もなかった。

ハンナはウクライナへ発った。

そしてその後、彼女がイタリアの地を訪れることは二度となかった。

三十三．裁定の真実

ベルギー・ブリュッセル。

ヨーロッパの真ん中に位置するこの都市は、その立地的中立性もあってEUの本部など国際機関の本部が多く置かれている。

国際射撃連盟の本部もそれに習っていた。そのEU本部にほど近い大型の共同ビル内に連盟の本部機能が入っていた。

その一室に、三上恵造、大岡吉道、そして、田代雄太の姿があった。

MJ社が新しく開発した散弾式銃の審査を受ける為である。例えそれがどんなに素晴らしい銃であったとしても、連盟の承認を受けたものでない限り、連盟主催の公式な試合には使用できないのである。

彼らは、二時間ほど前から上の階の会議室で行われている委員会の結論を待っていた。MJ社から許可の申請が出された新しい銃の審査の為に委員会であった。

審査するのは国際射撃連盟の中の技術委員会の委員達である。通常、この種の審査は、試験データなどの必要書類さえきちんと揃えて申請すれば、受理されるのがほとんどである。わざわざ審査の為にだけに委員会が開催されることはない。ヨーロッパだけでなく北アメリカやアジアの委員もいるからである。ただし今回のMJ社の銃に関しては、委員全員の招集がかかった。委員の間に書類だけではなく、審査用のプレゼンテーションを望む声が多かったからである。その後、委員同士の審査会を行うことにしたのである。そうせ

ざるを得ないほど、今回のMJ社の新型銃は、画期的なものだったのだ。

「もう、こんなに待たされるって始めからわかっていたら、ワッフルやチョコレートのお店に行っていたよな」

雄太が、苛立つ。

「そうですね。僕もグラン・プラスの建築物なんかを、ゆっくりと見てみたかったですよ」

さすがに、大岡も同調せざるを得なかった。

「ははは……。それだけ、衝撃度が高かったということですよ。さっきの君達のプレゼンテーションは素晴らしかった。そして、とても説得力があった。それだからこそ、委員達の議論が白熱しているのですよ」

三上恵造がそう二人を励ました。

大もとの射撃連盟の理事を務める恵造は、立場上プレゼンテーションを「聞く側」になっていた。

恵造は安心していた。委員会の裁定が長引くことは予想していた通りだった。むしろ、こうして時間がかかってくれていた方が、彼の思惑通りに運んでいることになり、かえって安心であった。そうなればなるほど、恵造の打った手が確実になるからである。

もうひとつ、恵造を安心させる事柄があった。

プレゼンテーションでの雄太と大岡の説明が想像以上に素晴らしかったからである。映像とデータを上手に取り入れたその説明内容は、驚くほどの出来栄であった。無論、自分の会社の製品であることから多少のひいき目はあったかもしれない。だが、それを差し引いて考えてみても余りある内容であった。他の委員達も間違いなく同じように感じていたはずだ。

特に、大岡のその面での才能は卓越していた。世界中で大規模建築のコンペやプレゼンテーションを何度も経験してきた人間でなければ、かもし出せないような安定感と説得力を持っていた。英語による表現力も申し分なかった。

恵造はこの男をMJ社に欲しいと、心底感じていた。これからの社の将来を考えると、大岡のような世界と遜色なく渡り合える人物が不可欠であった。

MJ社は、男爵という圧倒的なブランド力のおかげで、世界のトップに肩を並べることができた。だが、その男爵もいずれは一線を退く。そうなった時に、MJ社は自身の真価を問われることになって行くのだ。男爵という絶対的な人気と信頼の看板を外して戦っていかねばならないのである。そしてそれは、そう先のことではない。今のうちから、何らかの手を打っておかねばならないのである。その為にも、大岡のような人材は是非でも獲得しておきたいのだった。

更に三十分ほど経過した頃、待合室に待機していた雄太達が委員長室に呼ばれた。

部屋に入って来る恵造に対して、技術委員長のヨーゼフ・カブリーニは椅子から立ち上がり敬意を表した。

「三上理事。長い時間お待たせしました。どうぞ、そこへお座りください」

皆が、応接用のソファに座った。

雄太と大岡は緊張していたが、恵造は違っていた。委員長の顔つきを見て、すでに合格を確信していたからだ。

「それで、委員長。審査の結果は出ましたか？」

恵造は余裕を持って訊いた。

「はい、理事。無事、承認されました。おめでとございます！」

「やったーっ！」

雄太が大きくガッツポーズをして、隣りに座る大岡と両手を握りあった。

英語のわからない彼でも、委員長が笑顔で言ったコングラチレーションの言葉は理解できた。そして、場もわきまえずに飛び跳ねて喜んだ。

恵造と委員長は、しばらくその若者のはしゃぎぶりを笑顔で見守っていた。

部屋にコーヒーが届けられると、恵造が委員長に訊いた

「かなり時間をかけられました。委員会はどうな様子でしたか？」

「ええ、実は少し揉めました。あなたが危惧されていた通りの展開になったのです」

「やはり、アメリカですか？」

恵造は、あらかじめ今回の委員会の流れを予想していた。

「ええ、その通りです。まあ、今回に限ったことではありません。彼らの自己中心的な振る舞いには、我々もいい加減にうんざりです」

委員長は苦虫を踏みつぶしたような顔で答えた。

「ははは…。まあ、彼らは我々とは少し置かれている状況が違いますからね」

恵造がそれを諷めるように笑った。

「しかし、今日の委員会は、気分がスカッとしました」

委員長は打って変わって、笑顔で言った。

「何故ですか？」

「どういうわけか、今回の委員達のアメリカへの反発は凄まじいものがあったのです。さすがの米国艦隊も皆の凄まじい集中砲火を浴び続けて、ついに撃沈されたのですよ」

「ほう、そんなことがあったのですか。そういうことは始めてですね…。いや、驚きました」

涼しい顔でそう言うと、恵造が何もなかったようにコーヒーをすすった。

「そうになると、票の結果は、五対一ということですか？」

再び、委員長に訊く。

技術委員は、イギリスとロシアの欧州圏が二名、アメリカとカナダの北米圏が二名、オーストラリアのオセアニア圏が一名、日本のアジア圏が一名、そして委員長が一名という全七名の構成になっている。但し、今回の委員会には当事者である日本は参加できない為に、満票は六票ということになるのだ。

「いえ、そういう決め方ではありませんでした」

「では、委員長裁定ですか？」

「はい。しかし、正確に言うと多数決もやりました」

「それは？」

「つまり、委員長裁定にすることを、まず、多数決で決めたのです」

「ははは…。なるほど。集中砲火はしたものの、今後のことも考えて、皆さんはアメリカとの直接対決を回避した、というわけですね？」

「ええ、その通りです。皆さんは保険を掛けたのです。そうすれば、私が内心で申請を認

めようと思っていることを皆さんは御存じのようですので、結果的には同じことになるわけですからね」

「ははは…、それは災難でしたね」

「笑いごとではありませんよ、理事。私に一任ということは、すなわちイタリアがアメリカに反対するという図式になってしまったのですからね」

「ははは…、これはどうも失礼しました。確かに、表向きはそういうことになってしましますね」

「ええ、実に、困ったものです」

と言いながらも、委員長は心底嬉しそうだつた。

「でも、そう言いながらも、最終的には、委員長であるあなたが承認賛成を決めてくださったというわけですね」

「はい、そうしました」

「心から、感謝します」

恵造が、頭を下げた。

「いやいや、私が自分の意志で決めたことですから」

委員長の顔が安らかになっていた。

「それに…。実をいうと、私はそういう形になることを内心期待していたのです」

「ええっ、それは何故ですか？ お一人で背負う委員長裁定よりも、多数決の方が良かったのでは？」

「いいえ。私の意志で決めたかったのです。個人的な理由ですので、他言は無用にしていただきたいのですが…」

「そういうことでしたら、勿論、他言しないとお約束しますが。いったいどんな…？」

「私が賛成票を入れたのは、あなたが次期理事長の有力候補だからでも、男爵という絶对的なカードをお持ちだからでもありません」

「では、何故…？」

委員長のその答は、恵造の「読み」を遥かに越えたものだった。

「私の父の夢を叶えてあげたかったからです」

「お父上…。あの伝説の天才銃職人・シーザー・カブリーニさんの、ですか…？」

「ええ、そうです」

そう言うと、委員長は雄太の方を見た。

「君は、あのマイスター・田代のお孫さんですね？」

雄太は、きよとんとした。

「雄太君。今、委員長は、君のおじいさんは田代相談役か、と聞かれていますよ」

あわてて大岡が通訳した。

「は、はい。そうです…」

雄太が、恐る恐る答えた。

「改めて、御挨拶をいたします。私はヨーゼフ・カブリーニと申します。銃職人をやっていたシーザー・カブリーニの息子です。あなたとお目にかかれて光栄です」

ヨーゼフが、とても優しい顔つきで言った。

「は、はい。僕もです…」

「おじい様は、お元気ですか？」

「は、はい…。じいちゃんは、とても元気です」

「それは、何よりです。どうかよろしくお伝えください」

「はい。必ず伝えます！」

雄太は、使命感に燃えるような仕草で返答した。

「安心しました…。私の父は、生前、事あるごとによく言っていたのです。あなたのおじい様と一緒に銃が造りたかったと…。彼と組めば、必ず素晴らしい作品ができていただろうと…」

「ということは、それは実現できなかったんですか？」

「はい。戦争が始まり、二人は離ればなれになってしまったのです」

「そうだったんですか…」

戦争という言葉聞いて、雄太はそれが半世紀以上も前の出来事であると理解した。

「ですから、マイスター・田代のお孫さんであるあなたが、新しい銃を考案して私の元へやってきた時には、とても驚きました。そして、それはきつと私の父がそうさせたのだと思います。亡くなった父が、あなたと私を引き会わせたのです。父は言っているのです。あなたの銃造りに協力してあげなさいと。つまり、自分の夢を叶えてくれと…！」

ヨーゼフの説明が終わると、恵造が再び頭を下げた。

「申し訳ありませんでした。委員長」

「どうされました、三上理事？」

ヨーゼフは、驚いて訊いた。

「私は、あなたに大変失礼なことをしていました」

「また、何故ですか？」

「私は、今回の件では、私なりに承認をいただくの為の筋書きを考え、それで旨く運ぶだろうと目論んでおりました」

「ほう…。それはどういうことですか？」

「つ、つまり、他の委員達に根回しをしていたのです。アメリカを黙らせるために、最後は委員長裁定に持ち込めばいいという筋書きです。それには、皆さんが快く賛同してくれました。ですから、先ほど、あなたから承認が下りたと聞いた時には、その筋書きが思い通りにうまくいったと内心満悦しておりました…。それは、私の経営者としての厭らしい策略でもありました。ですが、実際はまったく見当違いでした。真実は、あなたの父上への深い愛情が決め手となっていたのです。私は、そんな自分が恥ずかしくて仕方がありません」

「ははは…。三上理事。あなたのそういう嘘のつけない所が、連盟の関係者達に人気がある点なのですよ」

「お、恐れ入ります…」

「その気持ちを持ち続けていただければ、皆は次回の理事長選には、迷うことなくあなたに投票するでしょう。勿論、この私も含めてです」

「理事長選のことはともかく、そう言っていたらと少しは救われます」

恵造が、胸をなでおろした。

この時、大岡吉道は思った。自分のいるべき会社を見つけたと。この会社なら、常に世

界の頂点をにらみながら働くことができると。そして、この人物が経営する会社なら自分の人生を預けても悔いはないと。

彼は、転職の決心を固めていた。

三十四・手紙の内容

翌日、市内観光を終えた雄太ら三人は、ブリュッセル国際空港に入った。

雄太と大岡が成田便に乗ったのを見届けると、三上恵造はその後すぐにミラノ便に搭乗した。

雄太達には野暮用があるとだけ伝え、ミラノへ行くことは伏せていた。それが知れると、自分も一緒に行くと言われるのは目に見えていたからである。雄太は一刻も早く、謙作に会いたいのである。会って、自分が造った作品Ⅱ銃を見てもらいたいのである。

それは、恵造自身が誰よりも理解している。だが、その行為は、謙作の修行が終わるまで待つように強く禁じていた。今、謙作が勤めているのはあのエミリオ・リッチーニの工房である。そこへMJ社の新型銃を持ち込むという行為は、礼節に反している。土足で人の家にかかるようなものだ。例え、相手がどんなに仲のいいあのエミリオであつてもだ。恵造は、長きに渡るエミリオとの友情関係の間でも、その点だけはきちんと守つて来た。

それに、今回のミラノ行きは、雄太に限らず誰にも知られてはまずかった。座席に座った恵造は、二週間前に自分に届いたその手紙を読み返した。

それは、ジオヴァネッティから突然日本にいる恵造宛に来たものだった。日本語に訳されているのは、ラファエラが手伝ったからだろう。短く、主旨のみが書かれたものだった。

『突然の手紙で驚いていると思う。君に報告すべき事ができた。だが、手紙にもメールにも書けない内容だ。その件で、できるだけ早く会いたい。公務があるので、僕がそちらへ行くことはできない。申し訳ないが、今度こちらへ来る時には必ず連絡をくれ。それから、ケンの将来の話のこともしたい。彼が射撃競技の世界へ飛び立つ為のすべての条件が整った。それについても君と話をする必要がある。連絡を待っている。古き良き友人、三上へジオ』

内容があまりにも簡潔すぎて、まったくわけがわからなかった。

ただ、前半の「報告すべき事」とは、少なくともかなり重要な、しかも機密を要する話であることには間違いなさそうだった。

後半に書かれている「すべての条件」とは何だろうか。心当たりはひとつあった。先日のエミリオからの報告で、謙作の修行は、もういつ終了してもかまわないまでになっているとのことだった。加えて、一時陥っていた射撃のスランプの方も完全に克服して、より凄味を増して成長しているとのことであった。

手紙には、「すべての」という表現になつているから、これの他にもあるのだろう。だが、あとは皆目見当がつかない。慎一郎Ⅱ男爵の引退というのも、その中に入ってくるのだろうか。あるいは、結婚して身を固めるといふ線もあるのかもしれない。

そうこう考えているうちに、ジェットはマルペンサ国際空港に到着した。

ジオヴァネッティを乗せたリムジンが空港の正面玄関で待機していた。

恵造の姿を見つけると、ジオヴァネッティはSPの制止も聞かずに車から飛び出て、走り寄る。

「よく来てくれた、三上。会いたかったぞっ！」

言いながら、恵造を抱擁する。

「僕もだよ、ジオ。十か月前の理事会以来だな」

二人の会話は英語だった。

共に国際射撃連盟の理事を務めて二十年以上経つ彼らは、ほとんど通訳なしで英語での会話が出来るまでになっていた。

「ああ、そうだ。だが、その十か月の間にいろいろなことがあったんだ。まあ、乗れ。中で話そう」

リムジンに乗り込むと、すぐにジオヴァネッティが、アームレストの中のボタンのひとつを押す。すると、運転席との間に遮蔽ガラスが壁を作る。

「これで、大丈夫だ。会話は漏れない」

「ははは…、よほどの話の内容なんだな。その前に、礼を言っておく。謙作がとても世話になっていて、感謝している」

「ははは…。礼には及ばん。ケンはもう、僕の息子同然だよ」

「そうか。あいつは父親がたくさんいて幸せ者だ。ははは…」

密室であることが、恵造の気持ちを普段にも増して軽やかにしていた。

「ははは…。旨いことを言うな。だが、案外と本当にそうなるかもしれんぞ」

ジオヴァネッティが嬉しそうに言った。

「えっ、それはどういう意味だ？」

「ははは…、その話はあとだ。まずは、大事な報告をしておこう」

「うん、聞かせてくれ。随分と厄介な話のようだが…？」

「ああ。厄介なんて生易しいもんじゃない。それはそれは、凄まじい話だ…。だが、すでに、完全に終わってしまったことだ。そして、この話は存在しなかったこととして永遠に封印されるんだ…」

ジオヴァネッティの顔つきが引き締まった。

「始まりは、僕への狙撃だった…」

彼の報告が始まった。

途中、恵造の口から何度も発せられた驚嘆の叫びは、リムジンの後部座席の外に漏れることはなかった。

三十五・祝杯

その日の夕刻―。

成田空港に到着した雄太と大岡は、そこからバスや電車の東京への直行便を使わずに、電車を乗り継いでJRの錦糸町駅に降り立った。

ベルギーでの滞在は短く荷物の少ない二人は、そのまま駅に隣接する東武ホテルへ向か

った。チェックインを済ませて部屋に荷物を置くと、すぐにエレベーターで上階に昇る。24階で降りると、「簾(れん)」というレストラン・バーへ向かう。

店の入口で大岡が名乗ると、係の女性が用意された窓際の席に案内してくれた。すべて、大岡が雄太の為に準備しておいてくれたことだった。

「わー、本当だ。凄いつ！」

大きな窓越しに広がるその夜景を見た時、雄太が感嘆の声をあげた。

飲み物がテーブルに届くと、待ちかねたように二人がグラスを掲げた。

「すべては、あれから始まったんだね……」

「はい、そうです！」

「よし、雄太君。乾杯だ！」

そして、万感の思いで窓の外の「それ」に向かって乾杯した。

目の前にそびえ立つ東京スカイツリーは、美しいイルミネーションを放ちながら、ベルギーでの大役を果たした二人を祝福していた。

三十六・卒業

数日後――

三上謙作は、工房のB棟で銃床部分の製作の助手をしていた。

大まかにカットしてある木材を顧客の注文に合わせた寸法にカットし、研磨していく工程だ。作業には常に慎重さが要求される。加工する木材は値段の高価なフランス・クルミだからだ。この工房では値段の安いウルナツトや他の木材は使わない。それは、オーナーであるエミリオの強いこだわりであった。

クルミ材の買い付けには今でもエミリオ自身が必ず立ち合う。それは、エミリオの師匠からも強く教えられた習慣でもあった。ともすれば、金属でできた機関部や銃身の方に気が行ってしまうがちな謙作に、エミリオは常日頃から、木材の部分の劣らぬ重要性を説いていた。もともとバイオリン職人の家系に生まれ育った彼は、使用する木材の選定の重要さを誰よりも知っていた。そして、その妥協を許さないこだわりこそが、彼の銃をしてイタリアの芸術品と言わしめるまでになったのだ。

そんなエミリオの日頃の教えを守って、この時も謙作は木を削る職工の一挙手一投足に全神経を集中させていた。

「どうだね、ケン？」

後ろから声を掛けられても、すぐには気づかなかった。

「ふふふ……。よく集中しておるな」

やっと気がついた謙作が振り返ると、声の主はエミリオその人であった。

「少しは木のがわかってきたかね？」

「奥が深過ぎますね。二年やそこいらでは、とても……」

謙作は、ラファエラの個人レッスンのおかげで身に付けた流暢なイタリア語で返した。

「うん、そうだろう。それがわかるだけでも大きな進歩だよ」

「ははは……。褒められているのか、そうでないのか……」

「ふふふ…。勿論、褒めているのさ」

エミリオが、謙作の肩をポンと叩いて言った。

彼がこの工房で学ぶべきことはもうほとんどないと、エミリオは感じていた。本来、銃造りの職工ではなく、競技者を目指している彼にとって、学ぶべきことは技術的なスキルではなく、その精神なのだ。そして、すでに彼はそれを十分に習得していた。

「ところで、ここに来てもうそんなに経ったかね？」

「はい、二年とちよつとです」

「そうか、早いもんだな」

エミリオは、彼を本来居るべきステージに送り出す時期が近づいていることを感じ始めていた。送り出すのが、自分の務めだと思っていた。それは、彼と再会した二年前から感じていたことであつた。

入社試験と称して彼に撃たせた四挺の銃は、彼の潜在的な資質を確かめる為のものだつた。歴代の名だたるチャンピオン、更にオリンピックク二連覇のジオヴァネッティですら、感じ取ることができなかったレベルの世界だ。あの四挺の銃の癖を感じ取り、見分けることができた人間は過去四十年間で一人しかいなかった。近衛慎一郎、すなわち男爵ただ一人である。エミリオは、その男爵と出会えたことで、彼の銃造りの命題であつた「遥かなる誤差」の探究に打ち込むことができたのである。

そして、四十年後に二人目が現れたのだ。

「忘れるなよ、ケン…。銃造りとは、木と金属が織りなす、総合芸術のことなのだ」

エミリオが諭すように、そして誇らしげに言った。

それは、彼自身が自分の師であつたファーマス社の創業者、シーザー・カブリーニから受け継いだ言葉であつた。少年期の自分にバイオリン職人から銃職人に道を変える決心させた言葉であつた。

「はい！」

エミリオのそんな気持ちを通じたのか、謙作が力強く答えた。

エミリオは感慨無量になり、しばらく言葉を発することができなくなった。

「ところで、エミリオ。何か御用でしたか？」

「うん…。今から、ファーマスに付き合ってもらいたいんだが、いいかい？」

「ええ、わかりました。また試射ですか？」

「うん。まあ、そんなもんだ…」

エミリオは、はつきりとは言わなかったが、謙作には察しがついていた。

二時間ほど前に、「これから、父とファーマスへ行く」という旨の携帯のメールが、ラファエラから届いていたからだ。

そのメールを受け取った時、謙作は一瞬慌てた。あまりにも急な話だったからだ。ひよつとして、ラファエラと自分のことが彼女の父・ジオヴァネッティに知られてしまったのかと思つたのだ。だが、どうやらそうではないようだとの彼女の話だった。単に、彼のスケジュールが空いたので、かねてより約束していた謙作との射撃をやりに行くというだけのことのようだ、との話だった。

エミリオと謙作がファーマス社へ到着すると、すでに射撃場の脇には黒塗りのリムジンが横付けされていた。車の中には運転手しかいない。見るとジオヴァネッティが一人で射

撃を始めていた。

プラー室の中からラファエラが手を振っているのが見えた。謙作は軽く手を挙げてそれに応えた。

謙作達が到着したのに気がつくのと、ジオヴァネッティが射撃を中断し、二人に歩み寄っていく。三人は笑顔で抱擁し合った。

ラファエラは、プラー室のガラス越しから複雑な心境でその光景を見ていた。父親は、自分の愛する男を大層気に入ってくれている。まるで、実の息子のように可愛がつてくれている。最近では、自分との結婚を暗に勧めるようなことまで言ってくれている。だが、今日の彼は普段とは違っていた。ここに着くまでの車中での彼は、何かを思いつめたように黙りこくっていた。これから、大好きな三人で射撃を楽しもうという時にだ。気になった彼女は、その理由を尋ねてみた。

「今日、謙作に話そうと思う」とだけ、彼は答えた。

三十七・要請

同じ頃、東京。赤坂東急ホテル。

三階のバーラウンジの奥の一角にはダークスーツをまとった二人の体格のいい男が辺りを威圧するように立っていた。耳には、小さなイアーホンを付けている。見る物が見れば、場所柄でそれが政府の要人の警護官であることはすぐにわかる。

「お忙しいのにすみません。昨日から日本に帰っていらつしやるとわかったので、つい声をかけてしまいました」

浅尾義和が、急に呼び出したことを慎一郎に詫びた。

「かまわないさ。それに、ちょうど僕も急ぎで君と辰夫に話したいことがあったんだ」

「そうですね、以心伝心つてやつですね。でも、いつもの銀座でなくてすみません。ここだと警護の人間が慣れているものですから…」

義和が、更に詫びる。

「気にすることはないさ。なにしろ、君は現役の大臣様だからな」

「ははは…。茶化さないでくださいよ…」

九州の名門企業グループのトップでもある義和は、最近スポーツ大臣の任に就いていた。打診を受けた当初は、大臣職となると地元九州の企業グループの運営に支障をきたすという理由からずっと固辞していた。だが、長男の和孝がクレール射撃の選手を引退して本格的にグループ運営に就くということになったので、渋々これを引き受けることにしたのだ。総理周辺は、元クレール射撃の世界的な選手であり、それを通じて世界中にスポーツ関係の人脈を持つ義和に大きな期待を寄せていた。勿論、その人脈の中には親しい友人である近衛慎一郎も男爵も含まれていた。

「そういえば、近衛さんも、以前よりはよく日本にいらつしやいますね」

「うん、そうだな。確かにこんなに頻繁に日本に来ているのは初めてだな。二年前の東日本大地震以来、そういう機会が多くなったんだよ。いろいろとやっているんでね」

「はい。震災の義援の為に世界中を飛び回っていると伺っています。素晴らしいことだと

「思います」

「ははは…、ありがとう。だが、浅尾。そんな褒め言葉を言う為に僕を呼び出したんじゃないだろう？」

「ええ、まあ…」

義和は切り出しにくいようだった。

「どうした、言いにくいことなのか？ 遠慮しないで言ってみろ。僕と君の仲だろう？」

「はい。でも、そんな仲だからこそ、言い出しにくいのです…」

「ひよっとして、東京オリンピックピック絡みの話かな？」

グラスを口にしながら、慎一郎がポツンと言った。

「ははは…、相変わらず鋭い人だ…」

義和も苦笑いを浮かべながら、ウイスキーを口にした。

「正直なところ、やっかいなものを引き受けてしまったと後悔しているんです」

「スポーツ大臣のことか？」

「ええ、そうです。まさか、引き受けてすぐに二度目の東京オリンピックの開催が決まってしまうとは…」

「ははは…。そうだったな」

「もう、近衛さん。笑いごとじゃありませんよ。僕は、単に地元の為に国会議員になっただけで、国家をあげてやる一大事業の責任者なんかはとても勤まりませんよ」

「ははは…。とても名誉なことじゃないか。大丈夫だよ、君ならちゃんとできるさ」

「そうですねか…。今思えば、総理周辺はそのことを見越して、僕をスポーツ大臣に推挙したようです」

「うん、そうだろう。僕もそう思っていたよ。君は、海外のスポーツ関係に広く顔が効くからな」

「ははは…。そうかもしれませんが、近衛さん程ではありませんよ」

「で、浅尾。僕に用事とはなんだ？」

「はい…。本格的に動き出した東京オリンピックの運営委員会は、これからの六年間の手始めとして、各参加競技の強化の為に組織作りに着手していきます。まずは、各々の競技の最高責任者とその補佐を決める所から始まります。それについては、各々の競技団体に決めさせます。ただし、クレール射撃競技に関しては、僕が直接それを担当することになりました」

「まあ、そういうことになるだろうな」

「ええ…。それで、クレール射撃競技の最高責任者は三上さんをお願いしようと思っ

「うん、妥当なところだろう。連盟の理事職の方で忙しいようだが、君の頼みとあらば、あいつも引き受けてくれるだろう」

「はい。たぶん、大丈夫だと思います。問題は、その補佐役です」

「問題…？ 補佐役というのは、どんな役回りなんだ？」

「表面的には、最高責任者のアドバイザーということになりますが、実質的には代表選手の強化の統括責任者です。具体的に言うと、選手が国際舞台で勝つ為のスキルアップや育成、その為の海外の情報収集や戦術立案の責任者です」

義和の目が輝き始めた。

慎一郎は、高校生の時から彼のその目の輝く場面を何度も経験して知っていた。

「浅尾、ちよっと待て…」

しかし、すでに慎一郎の言葉は彼の耳には入らなくなっていた。

「僕が知る限り、それを完璧にこなせる人物は一人しかいません。いや、例え僕が知らなくても、世界中の誰もが知っています！」

和孝の言葉が、早く、大きくなってくる。

「ちよっと待て、浅尾！」

こうなってしまう時の義和には、もはや、慎一郎の制止とて効かない。

「あなたしかいないのです。お願いです、引き受けてください！」

義和は、ついにそれを言いきった。そして、一気にグラスを呷った。

静寂が戻った。

「いいか、浅尾…」

慎一郎が言いかけた時だった。

バーの入口で、ちよっとした騒ぎが起こっていた。

誰かと警護官とが、入れる入れないで押し問答になっている。

熊のような厳つい風体の男が、警護官に詰め寄っているのが見えた。

「工藤さんだ！」

そう叫ぶと、大臣は入口の方へ急いだ。

「工藤さん！」

工藤辰夫の登場だ。

「おう、義和！」

二人の親しげな雰囲気を感じて、警護官達が辰夫に向かって一礼し、道を開けた。

「義和。自分の兄貴分の顔くらいSP達に周知させておけ。それに、これでも俺は現役の

茨城県知事だぞ。しかも、もう二十年もやっている」

辰夫は、少々おかんむりだった。

「すみません。でも、彼らは例え相手がアメリカの大統領であっても、僕が許可しない限り通すことはないんです」

義和が申し訳なさそうに詫げる。

「わはは…。わかった、わかった。まあ、いい。会えてうれしいぞ、義和！」

豪快な笑いが、バー中に響き渡った。

「おおー。いた、いた。慎ちゃん！」

奥の席にいる慎一郎を見つけて、辰夫が嬉しそうに走り寄った。

「うん、辰夫。こんな時間にこんな所まで、呼び出してすまん」

「いいって、いいって。三人で会うのは久しぶりだな。あとは、三上がいなのが残念だが…」

この三人に三上恵造を加えた四人が、高校生時代から固い友情で結ばれた親友同士であった。

「あいつは、数日前からヨーロッパに滞在している。ミラノでジオ達とも会っている」

「というと、射撃連盟の関係か何か？」

「それもあるが、ジオと会っているのは別の理由だ。あいつは、ジオからある重大な報告を受けているんだ」

「報告…？ わざわざ会って話さなければならぬようなことなのか？」

「そうなんだ。時間も時間だから、今からすぐにその話をする」

「慎ちゃんが電話で言っていた大事な話ってのが、それか？」

「そうだ。三上がジオから聞くのと同じ話を、おまえ達にもする」

慎一郎は今も変わらず、あまり喜怒哀楽を表に出さない。

だが、それがどれほど重要な要件なのかは、死の際を共に渡り歩いた経験を持つ辰夫には感じ取れていた。

「わかった。話してくれ」

「うん…。以前、ジオが何者かに狙撃されたことがあった。それが、事の始まりだった…。」
慎一郎の話が始まった。

三十八・墓標の前で

射撃を満喫し終えた三人は、ジオヴァネッティの車で移動した。

その墓地は、ブレスシア郊外のアルプス山系が見渡せる丘の上にあった。車はその中へ入っていった。

車を降りると、ジオヴァネッティが用意してあった花束を持って歩き始める。謙作とエミリオがそれに続く。ジオヴァネッティが、ひとつの墓標の前で立ち止まる。彼は持っていた花束をそこに置いた。彼とエミリオはその場所をよく知っているようだった。

そこにはすでに、種類の違う真新しい花が二つとワインが一本供えてあった。

「ここは、誰の…？」

聞きながら、謙作はその墓標の名前を読んだ。

そこには、マリエッタ・コノエ・リッチーニと刻んであった。

「私の妹の墓だよ。そして、君の…」

エミリオが言いかけた時に、

「僕の母…ですね？」

謙作が続けた。

「わ、わかっていたのか。謙作？」

ジオヴァネッティが、驚いたように訊ねた。

「はい。薄々ですが」

「いつ頃からだね？」

「最初は、イタリアに来る少し前にでした。サーフィンと決別する為に若い頃からずっと続けていた長髪をばっさり切って短くした時です。鏡の前の自分の顔を見て、ふと男爵に似ているなと感じました」

「二年くらい前のことか？」

「ええ…。そして、イタリアに来た二年間で更に強く感じました」

「何故だね？」

「ジオヴァネッティさんやあなたの雰囲気から、昔、何かがあったんだなと…」

「そうだったのか…」

「それはすまなかった」

エミリオとジオヴァネッティが、困ったように顔を見合わせた。

「いいんです。実は、僕が今の両親の本当の子供でないことは、かなり以前から知っていましたが。サーフィンの海外遠征でパスポートを作る時に偶然知ったのです。今の父と母の実子ではなく、養子であると…。ただ、その時は、本当の両親が誰なのかまではわかりませんでした…」

「そうだったのか…。それは、当時警察にいたジオがそういう機密扱いで超国家的な処理をしたからなんだ。それで、お父さん、…つまり、三上の方のお父さんにはそのことは聞いたことがあるのかね？」

「勿論、訊いていません」

「そうか、両親思いの君らしい配慮だ。だが、もうそのことで変に気を回す必要はなくなつたよ」

「といたしますと？」

「三上は、この事実を君に話すことを承諾したんだ」

ジオヴァネッティが、それを明かした。

「そうなんですか。それは、いつですか？」

「つい、数日前だよ。こっそり、ミラノで会ったんだ。その時に、君の出生を明かす時期が来たという話をしたんだ」

ジオヴァネッティが、墓標に視線を戻して言った。

「そこにある花の一つとワインは、二日前に慎一郎が供えたものだ」

「じゃあ、男爵もそのことを…」

「うん、勿論だ。やっと実の子に名乗り出られる日が来たということを、愛する妻に…、つまり君の母上に報告したんだ」

「そして、もう一つの花は三上が供えたものだよ」

「お父さんも、ここに…？」

訊かれた二人は、黙って頷いた。そして、説明を続けた。

「始めてではない。数えきれないほどだよ。彼はイタリアへ来るたびに、こうやってこっそりここに来ては、君の母上の墓前に君の成長ぶりや近況を報告していたんだよ。彼が、国際射撃連盟の仕事にこだわっているのは、ビジネスの為だけではないんだ。そうしていれば、ここに来やすいからなんだよ。だが、それでも三上は、自分が君の本当の父親でないことを明かすのだけはずっと拒否していた。一番の理由は、君に余計な動揺を与えたくないからだと思う。しかし、もう一つの大きな理由は、彼自身も奥さんも、君に本当のことを知られたくなかったからだろう」

「そうか。それで…」

あれほど、MJ社の跡取りになることを切望していた三上恵造が、今回のイタリアの銃の修行には何故か難色を示していた理由が明らかになった。ブレシアへ行けば、この事実に突き当たることを恐れていたのだ。

「しかし、我々は、あえてそれを公表するように三上に進言した。詳細はあとで説明する

が、あらゆる状況から考えてそうすることが正しいと思ったんだ」

「我々が勝手なことをしているのは重々承知の上だ。だが、このタイミングしかなかったのだよ。それに、エミリオから君の工房での修行が終りに近いと聞かされて、どうしても君がこのブレシアを去る前にここに連れて来てあげたかったんだよ」

エミリオやジオヴァネッティの苦悶の表情から、それが散々迷った挙句の決断だったことがうかがわれた。

正体を明かした叔父が、自分の財布から一枚の古い写真を取り出して甥の謙作に手渡した。三人の男女が写っていた。美しい薄茶色の髪の毛の女性を真ん中にして左側がエミリオ、そして右側にはまだ口髭を蓄える前の若き日の慎一郎が微笑んでいた。三人共、幸せそうな笑顔だった。

「真ん中がお母さん？」

「ああ、美人だろう？」

「本当だ。それに、亜里沙さんにそっくりですね」

謙作は、子供の頃から亜里沙に恋愛とも違う、だが、とても深い特別な愛情を抱いていた理由がわかった。実の姉だったのだ。

「うん。アリッサに生き写しだよ。君も父親の慎一郎の方にそっくりだ。実際、二年前に君の顔を見た時は、心臓が止まるくらいに驚いたよ」

「確かにあの時は、あなたも、ジオヴァネッティさんも、不思議なくらい驚いていましたね」

事実はすべて明らかにされた。

だが、そうなるに至った理由がまだ明かされていなかった。

「でも、いったい何故、そんなことになってしまったんですか？ さっき言っていた「状況」とか「タイミング」というのはどういうことなんですか？」

謙作は、それを訊くしかなかった。

「ああ、その通りだな…。勿論、それを話さなければならぬ」

「ここは寒いし、立ったまま話すようなことではない。場所を移して、ゆっくりと説明しよう」

「わかりました。じゃあ、少しだけ時間をください」

そう言うと、謙作が墓標の前にひざまずき、深く目を閉じた。

三十九・警備力

「そうか、そんなことがあったのか…」

慎一郎の話聞き終わった工藤辰夫は、そう言うと、しばらく存在を忘れていたグラスを手にして一気に飲み干した。慎一郎も、義和もそれに倣った。

「…だけど、そのハンナが、また仕返しに舞い戻って来るといふことはないんですか？」

義和が懸念した。

「それは、まずないよ」

慎一郎が答えた。

「何か手を打ってあるんですか？」

「ああ。ジオが手をまわして、彼女を要注意人物のリストに入れておいたんだ。容疑は伏せてあるがね」

「ということは？」

「つまり、彼女はどのルートからもイタリアに入国する時はそれなりのチェックを受けることになるんだよ。ウクライナがEUに加盟しない限りは有効だ」

「なるほど…」

「いずれにしても、彼女は、もう来ることはないだろう」

「何故ですか？」

「彼女の犯行には、どれにもある種の「ためらい」が感じられた。絶対にやり抜こうという強い意志がなかったんだよ」

「つまり、本気ではなかったと？」

「うん、そうだ。むしろ、気がついてくれと言わんばかりだった。僕の散弾に細工をした時もそうだ。他のものとまったく同じ重さに細工していれば、僕でも気づかなかつただろう。おそらく、心のどこかで誰かに止めてもらいたいと思っていたはずだ。もはや、自分では止めることができなくなくなり、どんどんエスカレートしていく中で、もがき苦しんでいたんだろう」

「結局、彼女は行き場のない父親の死の悲しみを、どこかで清算するしかなかったんですね。可哀そうな女だ…」

義和がハンナを憐れんだ。だが、

「おい、義和。そこまで同情する必要はないぞ。おまえはともかく、慎ちゃんや俺はそのことで大変な目に会ったんだからな。そもそも、あの一件がなければ、俺は若い時分からこんな県知事なんかはやっていなかったんだ」

辰夫は、その同情に否定的だった。

「すみません」

子分格の義和は謝ってばかりだった。

お互いの役職や地位が何であろうが、この絶対的な主従関係は高校生の時から不変であった。

「でも、工藤さんが県知事になったのは、確か、観光業を発展させる為ではなかったんですか？ 自衛隊の百里基地への民間機の乗り入れとか…」

「ま、まあ、それもあるが…」

辰夫が言葉を濁そうとした。

「謙作と亜里沙を守る為だよ」

慎一郎が言った。

「えっ…？ 謙作君と亜里沙さんを…。それと県知事になっていることと、何か関係があるんですか？」

義和が聞き返した。

「勿論、あるさ。県知事というのは、県警察のトップでもあるんだ。辰夫は、県内で一番強い警備力を使って、二人をソ連の報復活動から守っていてくれたんだよ。いかにも、こいつらしいダイナミックなやり方だ。ははは…」

「なあに、慎ちゃんの子供達の為だ。どうってことはないさ」

辰夫が優しい目で返した。

「そ、そうか…。そうだったのか…。知らなかった…」

義和は、辰夫の慎一郎に対する友情の厚さと、謙作や亜里沙に対する愛情の深さを改めて痛感した。

「わはは…。まあ、いいさ。とにかく、もうすべて済んだことだ。なあ、義和！」

「は、はい…。工藤さん、あなたはやはり凄い人です。僕なんかは、とても及びません…！」

「なんだ、こいつ。今頃わかったのか。しかし、現役の大臣様にそう褒められると、まんざらでもないな。わははは…！」

すべてが決着したと知り、辰夫はいつにも増して機嫌よく笑った。

四十・東西冷戦

謙作達を乗せたリムジンは、ブレシアの中心街にあるラ・グロッタという名のパブの前で停まった。

「お父さん、こつちよ！」

一足先に着いていたラファエラが、手を振って三人をテーブルに招いた。

ラファエラは、すぐに謙作の顔色を伺った。彼女が送った笑顔に、彼はいつもの笑顔で返してくれた。それで、彼女は安心した。謙作の表情や他の二人の雰囲気から、あの話がスムーズに運んでいるのだと確認できたからだ。

「ケン。ここは、我々が若い頃に、それこそ毎週のように通っていた店だ。ここには、君の母上の大好きな地ワインがあったんだ。慎一郎…。つまり君の本当の父上は、エミリオと一緒に、この店の売りの生ハムを肴にグラッパを飲むのが好きだった」

そう言って、ジオヴァネッティがその通りの物を注文した。

「夜が更けるのも忘れて、熱く語り合ったものだよ。我々三人は、それこそ兄弟のように仲が良かった」

「ああ、その通りだ。慎一郎はマリエッタを、ジオもエリザベッタをよく連れてきたよ。

あの頃は本当に楽しかった」

エミリオがしみじみと言うと、

「へー、お母さんと…。知らなかったわ」

ラファエラが、笑顔で言った。

だが、彼女はすぐに真顔に戻した。ジオヴァネッティが真剣な表情になっていたからだ。そして、彼はそのことを語り始めた。

「ケン。君とお姉さんのアリッサが、父親である慎一郎と離れなければならなかった理由を、そして、名前を変えて三上夫妻の子どもとして育てられた訳を話そう…」

ジオヴァネッティはグラッパを呷ると、決心したように話し始めた。

「三十年程前、私はある大きな過ちを犯してしまったんだ。あれは、私がロス五輪で二度目の優勝を果たした数か月後のことだった…。当時のソ連のエージェントが秘密裏に私に接触を図ってきたんだ。それは、クレール射撃の試合の申し込みだった。ロス五輪に出られ

なかったソ連や東ドイツという東側の強豪国を入れた実質的な世界一を競う大会をやりた
いというんだ」

「いったい、何故そんな大会をわざわざ…？」

「その前のモスクワ五輪で、私に敗れてしまったからだよ。銀メダルに終わってしまった
ソ連は、次のロサンゼルス五輪に向けてその汚名挽回の為に、死に物狂いで練習に明け暮
れていたらしい」

ジオヴァネッティは、その説明の中では、当事者の中心人物であるルスタム・ヤンブ
ラホフの名前は出さなかった。それがハンナの父親だという話になってくれば、謙作は
ともかく、何も知らないラファエラが傷つくからだ。だから、その名前は今回は伏せてお
こうということにしていたのだ。

「若い君達にはピンと来ない話だろうが、当時の時代背景からして、本国開催で負けてし
まったソ連の連中は、復讐心に燃えて文字通り命を懸けるほどの練習に明け暮れていたん
だと思うよ。処刑とまではいかなくとも、それと同じくらいに追い詰められていたはずだ。
なにしろ、当時のオリンピッククというのは、東西の陣営のそこそこのメンツを掛けた代
理戦争のような様相だったからね。まして、他の競技ならともかく、射撃での勝利は天命
だったはずだ。命をかけてという表現は、当時の東側の状況では決してオーバーなもの
はなかったんだよ。ところが、モスクワ五輪ボイコットの政治的な報復処置で、ソ連など
の東側圏は肝心のロス五輪に参加できなくなってしまうんだよ。そこで、収まらない奴
らはジオにそういう申し入れをしてきたということなんだ」

エミリオが、ことの背景を補足説明した。

「うん、そういうことだ。だが、私はそれを断った。当時の私は国家警察に所属していた
身だからね。勝手に出場することはできなかったんだ。それに、私自身、真の世界王者は
自分ではないと思っていたからね。そんな大会に出ても意味がなかったんだ。しかし、必
死だったソ連の連中は、KGB（秘密警察）を使って、しつこく出場を迫ってきた。それ
で私はつい、奴らに真の王者の男の名前を出してしまったんだ。君の本当の父上、近衛慎
一郎の名を…」

ジオヴァネッティはそこでいったん話を止めると、グラッパを呷り、大きく深呼吸をし
て息を整えた。そして、再び話し始めた。

「実質的な世界一は私ではなくその人物だということは西側の関係者の間では有名な話な
んだと説明したんだ。彼の存在がある以上、私を招待して試合をやって、仮に勝利したと
しても何の価値もないことだ。何の名誉にもならないことだと…」

「その話は、本当なんですか。その時点ですでに男爵…、父が、実質的な世界一だったと
いうのは？」

謙作には実感として伝わっていなかった。

「ああ、本当だとも。しかも、ロスやモスクワどころではない。そのずっと前のミュンヘ
ン五輪の時には、すでに彼は世界一の実力を持っていたよ。事実、当時の世界チャンピオ
ンでミュンヘンでも金メダルを獲ったアンジェロ・スカルゾン自身がそれを認めていたん
だからな」

そう言ってジオヴァネッティが大きく頷いてみせた。そして、話を続けた。

「そして、それを聞いたKGBの奴らは、すぐに慎一郎の元へ出場の依頼に行ったんだ。

勿論、行っても無駄足だ。彼はそういうことにはまったく関心のない男だ。案の定、事も無げに断わられた。それでも、引くに引けない奴らはあらゆる手段を使って慎一郎に出場を迫った。だが、結局すべて撥ね退けられた。ところが、そこから先が私の誤算だった。

奴らの執念は私の想像以上だった。慎一郎には直接脅しが効かないとわかるや、今度は彼の家族に矛先を変えてきたのだ：」

「僕のところにも奴らはやってきたよ。何とか慎一郎を説得して欲しいとな。無論、断つたがね。そして、その直後に妹が急死したんだ：」

エミリオが悲しそうに言った。

「つ、つまり、母はソ連の奴らに：？」

緊張の面持ちで謙作がジオヴァネッティに訊ねた。

「その確証はない。だが、限りなくその可能性があった。マリエッタの亡くなり方が、余りにも突然で原因が不明だったからだ。当時の警察にはまだ、今のよう科学的な原因分析の手立てはなかった。KGBが頻繁に使うリシンのような毒物などは、調べようがなかったのだよ。証拠がない以上、勿論それは推測にすぎず、断定はできない。だが、状況やタイミングから考えて限りなくその可能性が高かった：」

そう言って、ジオヴァネッティが唇をかみしめた。

「そこで、事態を憂慮した慎一郎は、君達姉弟を一旦保護しやすい日本に逃がすことにしたんだ。当然、安全の為に君達は名前も素性も変えて別の人間として生きてもらうしかなかった。それは、父親の彼にとつては苦渋の決断だったと思う。アリッサはまだ幼く、君はまだ、赤ん坊だった：」

「そうだったんですか：」

謙作が小さく呟いた。

「だから、彼や彼の家族をそこまで追いつめてしまったのは、元をたせばすべてこの私
が原因だったのだ。私の軽率なひと言が招いたことだったのだよ。ケン、本当にすまな
かった：」

ジオヴァネッティが、震えながら頭を深々と下げた。

「亜里沙さん：。いや、アリッサ姉さんは、そのことを知っていたんですか？」

しばらくの沈黙ののちに、謙作が訊いた。

「ああ、彼女はほとんど知っている」

「そうですか、それで：」

亜里沙が、子供の頃から自分を守るようにして接してくれていた理由がわかった。今思
えば、それは親友同士の子供という接し方を超えた厚い愛情に満ちたものだった。

「君は、どこまで？」

謙作は、ラファエラに日本語で訊いた。

「ごめんなさい。薄々は知っていたわ。でも、細かいことまでは：。すべてを知ったのは
つい先日のことよ。父が、三上さんに今回の件の相談の手紙を書いて、それを翻訳した時
に：」

「そうか、そうだったのか：」

「ごめんなさい。でも信じて、ケン。私、決してあなたを騙すつもりは：。私、ずっと辛
くて、辛くて：」

「わかっているよ、ラファエラ。話すに話せない立場の君は、僕よりもずっと辛かったと思う。謝るのはむしろ僕の方だ。今まで、辛い思いをさせてすまなかった」

謙作が、自分の手を彼女の手の上に優しく重ねた。

「ありがとう、ケン：」

ラファエラが、大粒の涙を流した。

二人のそのやり取りを見ていたエミリオとジオヴァネッティは、はからずも同じ光景を重ね合わせていた。三十年前に、同じこの場所で愛情に満ち溢れていた二人の幸せそうな若いカップルの姿を。

四十一・後継者の名

東京、霞が関。合同庁舎内スポーツ省―。

その日、近衛慎一郎は大臣室に浅尾義和を訪れた。

「わざわざお越しいただいて、すみません」

義和はソファの上座を勧めた。

「いや、こちらでいいよ。言にくいことが言えなくなる」

慎一郎は軽く笑った。

「ははは…。ひよつとして、この間、お願いした件ですか？」

「うん。申し訳ないが、やはり引き受けることはできない」

「やっぱり…。そうですね」

予想はしていたものの、義和は落胆を隠せなかった。

「浅尾、誤解しないで欲しい。今回のことだけではない。僕は、今までずっと直接的にはオリンピックとは関わりを持たない主義で来たんだ」

「ええ、知っています。でも、もともとそのきっかけになったのは、三十年前のジオヴァネッティさんへの配慮からですよ？」

義和は、知っていた。

モスクワ五輪の時のことだ。当時、警察職員だったジオヴァネッティが国家の威信の重圧に苦しんでいたのを知った慎一郎は、密かに出場を取りやめていたことがあったのだ。自分が出れば、彼が優勝することは、まず無理だからだ。

「ははは…。そういう美談もあつたらしいが、それは彼に対して失礼だぞ。勝負事は、実際にやってみなければわからんからな」

慎一郎は、軽く受け流した。

「ま、まあ、そうですね」

「浅尾、本当の理由は他にあるんだよ」

「他に…？」

「ああ。極めて単純な理由だ。君も知つての通り、僕には日本とイタリアの血が半分ずつ流れている。そして、そのどちらも同じように好きだ。だから、国同士が戦うオリンピックだけは避けてきたんだ。どちらかの国旗を背負って戦わなければならないというのは、僕の場合、困るんだよ。矛盾を抱えて戦うことになるからな」

「なるほど、そういうことかあ…」

「そうだ。わかってくれ」

極めて単純ではあるが、絶対的でもあるその理由を聞かされて、義和は引き下がらざるを得なかった。

「ははは…。そんなにがっかりした顔をするなよ、浅尾」

「するなという方が、無理ですよ。久しぶりに三上さんとあなたと三人で面白いことができると思っていたんですから。そんな楽しみでもない限り、オリンピックの責任者なんてしんどい仕事はやってられませんよ…」

「ははは…。そうだな。だが、別の方法でやろうじゃないか」

「別の方法…?」

「ああ。直接は無理でも、側面から支援するよ」

「側面って…?」

それを聞いた義和の目が輝き始めた。

「六年後に、金メダルが取れそうな有力選手を、非公式に僕が応援すれば同じことだろう?」

「まあ、そういうことになります…。そんな逸材に心当たりが?」

クレール射撃の場合、他の競技と決定的に違うのは、競技を始められるのが一番早くて二十歳からである。その為に、他の競技のようにいわゆるジュニアからの育成ということができるのである。

「うん。今はまだヨーロッパ方面の試合に出始めたばかりだが、そのすべてで完全優勝をしている…」

「ええっ。その方は、ちゃんとした日本国籍なんですか? そうでない…?」

息子の浅尾和孝が引退した今、国内にこれといった目ぼしい選手は出てきていないはずだった。

「ははは…。真正正銘の日本人だよ。もっとも、最近彼は、自分に外国の血が混ざっていることを知ったようだがね」

「ああっ。それって、まさか…!」

義和の目が、眩いばかりに輝いた。

「うん、そうだ。ケンのことだ…。近々、国内戦をこなして代表権を獲得させ、もうすぐ開催されるドイツの世界選手権に間に合わせようと思っている。おそらく彼こそが、僕の後を引き継ぐ人間になるだろう」

慎一郎が、その後継者の名を口にした。

「彼は…、謙作君は、いよいよ本格的に競技生活を始めたんですね?」

「ははは…。そうだ。そういうことならば、いいだろう?」

「はい。勿論です。これ以上ない最高の答えです!」

四十二・約束の地

三か月後―。

千葉県、富津市―。

富津国際射撃場のクラブハウスの脇からは、海が一望できた。

潮風が、彼女の淡い金色の髪をなびかせていた。

「最高の気分で撃てたわ！」

念願の海に見える射撃場でのプレーを終えて、ラファエラは満足気に言った。

「射撃をするには、ちよつと海風の影響を受けるけどね」

「でも、あなたの方はそんなハンデも、物ともしなかったわ。さすがはワールド・チャンピオン様だわね。ほほほ…」

「ははは…、まいったな。そんな呼び方はよせよ、ラファエラ。それに、今回の優勝はあの銃のおかげでもあるんだから」

「ケンの弟分が開発したあの新型の銃ね…」

「うん、そうだ」

田代雄太と大岡吉道が共同開発した新型銃は、ドイツで開催された世界選手権においても、その驚異的な性能をいかに発揮した。

「私も試射させてもらったけど、本当に驚異的だったわ。あそこまで、衝撃や反動が少ない銃なんて、ちよつと私達の常識では考えられないわ」

「うん、確かにそれは言える。僕がイタリアに居る間に、あの泣き虫の雄太があんなに凄いものを開発していたとはね…」

「ふふふ…。人は皆、成長していくものなのよ」

ラファエラのその言葉を聞いて、謙作は、ふとイタリアに居るカーリーナのことを思い出した。

「MJへの報告会の都合や何やらで、ミュンヘンから直接日本に来てしまったけど、カーリーナさんの所にも早く優勝の報告をしに行きたいな」

「そうね。イタリアに戻ったら、必ず行ってあげましょうね。彼女も、その報告を直接ケンの口から聞きたがっていると思うわ。昨日電話でそれを話した時は、彼女、電話口で泣いていたわよ。とても、嬉しそうだった…」

ラファエラは声を詰まらせた。

そして思った。男爵が本当の父親であるという真実が明かされた以上、カーリーナと謙作との関係もいずれは打ち明けないといけないのだろうと。あるいは、彼はもうそのことに気づいているのかもしれない。だが、それを明かすことは男爵から止められていた。

男爵は、それについては自分の口から直接、謙作に伝えたいと言っていた。そして、それは次に謙作に会う時に話すつもりだとも言っていた。

「そうか…。カーリーナさん、泣いていたのか…。日本に帰って来たのは、両親に会う為もあったけど、どうしても早く君をここに連れてきてあげたくてね」

「ええ、とても感謝しているわ」

二人は顔を見合わせて微笑み合った。

それは、二人が出会った日にミラノの星空を見ながら交わした約束だった。

「それに、今夜、男爵に呼ばれているしね…」

謙作は、ラファエラに対しては慎一郎のことを父親とは言わずに、男爵という呼び名で通していた。おそらく、日本の皆に対してもそうしていくのだろうと、彼は思っていた。

勿論、その理由は育ての親である三上夫妻への配慮だった。

「例の銀座のお店ね。用件は何かしら？」

「わからないけど…。でも、どんな用件であっても、今夜、君とのことは打ち明けようと思っている」

「少し不安だわ…。ボスは、祝福してくれるかしら？」

「ははは…。その点は、大丈夫だと思うよ。約束通り世界選手権も獲ったし…。それに、男爵は今、それどころではないと思うよ」

四十三・男爵の憂鬱

東京、帝国ホテルの長期滞在客用の一室―。

男爵こと近衛慎一郎は電話を取った。

「おう、ケンか。…うむ、では予定通り、銀座のいつもの店で」

電話を切った彼は、小さなため息をつくど、ベッドの脇の写真たてを手に取った。

笑顔で赤ん坊を抱く亜里沙が写っている。

慎一郎が、その写真に向かって呟いた。

「やれやれ…。お爺ちゃんは、また新しい秘書を探す羽目になりそうだよ…」

了